

大学院論文集

第11号



杏林大学大学院国際協力研究科
2014年3月

目 次

関口 美緒：感覚のオノマトペ動詞	1
嶋崎 雄輔：理由を求める疑問副詞の用法 —日本語の小説に見られる表現—	23
董 昭君：時の指示詞としての「この・その・あの」の研究	35
前田 公子：会話文における、動作主の違いによる テクルの使い方の制限について	53
川端谷津子：同時通訳における起点テキスト特性と訳出パフォーマンス —中国語から日本語への訳出の場合—	67
2012年秋学期・2013年春学期国際協力研究科修了者論文題目一覧	
87	
博士学位論文 内容の要旨および審査結果の要旨	
左 咏梅：「中国における外資系企業の会社名・製品名の研究」	93
高 立偉：中国語形容詞の動態性と時間表現に関する考察 —日本語との対照研究から—	99
高橋 豊：「日本の文化外交の将来戦略」	105

感覚のオノマトペ動詞

関 口 美 緒

要 旨

心理動詞の下位分類「感覚動詞」「知覚動詞」「感情動詞」「思考動詞」の中で最初の情報感知ともいえるのが五感の感覚受容器での刺激受容である。この五感に関わるオノマトペの表現について考察する。まず五感別（視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚）にオノマトペ動詞の特徴を分析する。次に感覚のオノマトペ表現やオノマトペ動詞の際立った特徴について考察する。心理動詞には動作動詞や状態動詞と違い、第3者からは客観的に判断できない様態を表すといった特徴がある。心理のオノマトペ表現もその特徴を持つ。情報受容による体内・脳内での情報処理の内的な状況・状態をオノマトペ動詞が表現するのである。

キーワード：オノマトペ動詞、擬音語、擬声語、擬情語、擬態語、感覚動詞

0. はじめに

Onomatopoeia を英和辞典¹で調べると「1. 擬声、2. 擬声（擬音）語、3. 声喩法（擬声語またはそのもの自体を連想させる響きをもつ語を用いる修辞法²）」とある。英語における Onomatopoeia は「音」に関する情報であると解釈される。しかし、日本語では「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬情語」「音喩」など多くのものをオノマトペとしている。日本語は「心理」もオノマトペで表現する。本稿では日本語としてのオノマトペ表現を扱う。それらを使用する場合「オノマトペ」+「(と)する」となる形式を「オノマトペ動詞」と呼ぶことにする。「擬音語」「擬声語」「擬態語」「擬情語」の表記は、「オノマトペ動詞」の具体的な特徴を取り上げる場合に使用する。

心理動詞の研究の結果、心理動詞の下位分類を通じて、オノマトペの表現にはそれぞれ異なった特徴があることがわかってきた。例えば、心理動詞の4つの下位分類(関

¹ 小学館、研究社、岩波書店の英和辞典を使用した。各社とも非常に類似した記述である。

² かつこ内は、『New Random House English-Japanese Dictionary』の記述である。

口 2012) において「感覚動詞³」「知覚動詞」は「擬態語」による言語表現を用い、「感情動詞」は「擬情語」を用いて表現する。「思考動詞」にはオノマトペ動詞を使った言語表現は見当たらない。「思考動詞」の場合、オノマトペは副詞的用法などにより使用するしかなく、オノマトペ動詞での直接表現は困難であると思われる。本稿では、まず「感覚動詞」のオノマトペ動詞の特徴を「五感」の下位分類において考察する。

1. 研究の範囲とオノマトペの定義

1.1 本稿の研究範囲

日本語オノマトペは、統語的に副詞、動詞、名詞、形容詞／形容動詞として働くことができる(田守他 2001: 47)。本稿は中でも日本語オノマトペの動詞用法を扱う。田守他(2001: 55)は、「如何なる日本語オノマトペも直接に動詞として機能することはできないが、それ自体あるいはその一部の要素が少数の動詞語尾と結びついて、動詞の役割をはたすことができる。」としている。本稿はそのもっとも生産的なタイプである「オノマトペ+ (と) する」という組み合わせを上記のようにオノマトペ動詞と呼び、考察する。しかし、動詞化にみられる接尾語(後項動詞)「つく(べとつく、かさつく等)」「めく(きらめく等)」については今回は扱わない。その理由は、本稿の中心は複合動詞の研究ではないこと、「つく」や「めく」自体が意味を持っているので、単なる動詞化とは言えないためである。また『助詞「と」+動詞(ごろっと寝る等)』については例文に上げる程度にし、中心課題としては扱わない(『オノマトペ+「と」+する』は扱う)。それは2つの要素(オノマトペ+統語的に述語となる動詞)が問題になってしまうためである。「だ」を伴って形容動詞となる語(かさかさだ等)も扱わない。しかし、新しい文化現象としてのオノマトペを紹介する場合、オノマトペ動詞だけに限定せずに引用する。

つまり本稿の中心となるのは感覚とオノマトペ表現の意味や解釈の芯の部分で、文法的な用法については柔軟な範囲設定をする。

1.2 オノマトペの定義

田守他(2001: 5)は、オノマトペの定義について「その定義は実に多様であるが、それらに共通している考え方は、オノマトペと考えられている語彙の形態と意味の関係が恣意的ではなく、何らかの形で相関しているということである。(略)伝統的には、擬声語・擬音語・擬態語と呼ばれるが、ひっくり返って模写語とも言うべき特別な範疇に属していると認識されるだろう。」と述べている。さらに「オノマトペは、もっとも一般的な定義では、現実の音をまねている語、あるいは少なくともそのように見なされる語を指す。」(田守他 2001: 10)としているが、またそれだけでなく、動作の様態や肉体的あるいは精神的な状態を描写する語に対しても用いられることがあると

³ 感覚動詞の下位分類は関口(2012)参照。

している。

また飛田他(2002)は、下位分類となる「擬音語・擬態語」の区別について、「擬音語は対象である音や声を言葉という手段によって表現したもの、擬態語は対象である様子や心情を言葉という手段によって表現したもの(略)」と述べている。しかし、元は外界の音を表現していたが、その様子をも表現するようになる場合もある。そのため、擬音語と擬態語の区別は簡単ではないとも述べている。

1.3 オノマトペの統語的特徴

飛田他(2002)は、擬音語・擬態語の用法として、「主語・述語・修飾語・独立語の4つの働きをすることが可能であり、その用いられ方によって、名詞・副詞・感動詞など異なる品詞名でよばれることになる。」と述べている。

田守他(2001:47)は「ほとんどすべての日本語のオノマトペは、その音韻形態に関係なく、様態副詞として機能することができる。」と述べている。また、飛田他(2002)は、「もともとが音声や様子を描写して述語を修飾する用法から出発しているので、結果として副詞用法(述語にかかる修飾語)が最も多くなる。」としている。副詞的用法というオノマトペの特徴は、「思考動詞」のオノマトペ表現で顕著に見られる。当然他の心理動詞(感覚・知覚・感情)でもみられる特徴であるが、「思考動詞」に関しては、副詞的用法のみで用いられる(2.4参照)。

2. 心理動詞の下位分類におけるオノマトペの特徴

心理動詞は、語の意味による分類(Pustejovsky 1993)、文構造による分類(Pesetsky 1995)、語の傾向⁴による分類(Voorst1992)などで見られるように多様な方法で下位分類される。本稿はオノマトペを扱うため、前もって、語の意味的性質を知る必要性がある。そのためPustejovskyの方法(語の意味に重点を置く)を参考にし、関口(2013:a)に従い、心理動詞を4つに下位分類する。

2.1 感覚のオノマトペ動詞

感覚のオノマトペ動詞は、五感の感覚を表す「擬態語」が中心である。しかし、擬態語での言語表現は五感全てに適用できるわけではない(関口2012)。視覚感覚動詞と聴覚感覚動詞ではオノマトペによる表現はあまり見られない。一方、触覚感覚動詞によるオノマトペ表現は膨大な数に及ぶ。五感と一口に言われるが、感覚によりオノマトペで表現される数や表現にそれぞれの特徴がみられる。これらの特徴を踏まえて、本稿3節において、感覚のオノマトペ動詞について考察する。

2.2 知覚のオノマトペ動詞

知覚のオノマトペ動詞は、主に知覚の状態を表す「擬態語(mimetic words)」である。知覚動詞として身体部位の症状の度合いや知覚の種類など幅広い用途で使用さ

⁴ 語の意図性の有無、好き嫌いのタイプ、活動動詞から心理動詞への変化といった特徴による分類(Voorst 1992)。

れる（関口 2013.b）。楠見らは知覚表現である「痛み」に関して言語表現の分析をしている。それによると「痛み」の 98 の言語表現の内、擬態語は 41 を数え、57 の比喩表現より擬態語で表される痛みの方が頻度が高いという研究結果がある（楠見他 2006：9）。またその強度・深度・持続時間などはオノマトペの反復表現⁵によって表現できる。

- (1) 頭がズキッと痛くなったがすぐに治った。
- (2) 昨日から頭がズキズキする（痛む）。（持続）
- (3) 頭が割れるようにズキズキする（痛む）。（強度）
- (4) 頭がズキンズキンする（痛む）。（持続・強度・深度）

2.3 感情のオノマトペ動詞

感情のオノマトペ動詞は「感情」を表す「擬情語」である。先行研究の分類には、感情因子 5 分類（楠見 1996）や音喩の起源と音（モーラ）による分類（楠見他 2007）などがある。これらを参考に考察し、表 1 を作成してみた。ここから知覚動詞と感情動詞のオノマトペの間には「身体知覚の擬態語が感情動詞の擬態語（擬情語）に派生・意味拡張（近接性・類似性・包含関係など）する」という関係があることが仮説として考えられる。

＜知覚動詞と感情動詞の擬態語表現＞ （表 1）

擬態語	知覚の身体部位	知覚動詞の意味	感情動詞の意味
クラクラ	頭	眩暈	嫉妬等で心が燃えるさま
ドキドキ	胸（心臓）	動悸	興奮・恐怖等で心拍数が上がる
ムカムカ	胃	嘔吐感	怒り・不快感がこみ上げるさま
ゾクゾク	背筋	寒気・震え	恐怖・興奮で震え・寒気を感じるさま
ムズムズ	皮膚	痒い感じ	歯痒さや気持ちのはやるさま

2.4 思考のオノマトペ動詞

思考動詞について「思考の擬態語＋する」というオノマトペ動詞を探索したが見当たらない。思考に用いられる擬態語は、副詞的表現として用いられるだけである。下記の例文でも思考の様態を表現する副詞として用いられている。

- (5) くよくよ、しょんぼり考える、反省する、後悔する。（感情的擬態語＋思考動詞）
- (6) けろりと、すっきり忘れる。（状态的擬態語＋思考動詞）
- (7) すっきり、ぴたっと、ぱっさり、ほいほい、ずんずん、さらりと、すきっと、解決する。（状態＜速度や感触＞的擬態語、感情的擬態語、動作行動性の擬態語＋思考動詞）
- (8) ちょいちょい、ちよくちよく忘れる、考える。（頻度の副詞的擬態語＋思考動詞）

⁵ 守田他（2001：12）は、日本語のオノマトペの反復形（reduplication）の特徴について、「反復形は通常、音や動作の継続ないし繰り返しを示唆する」と述べている。本稿筆者はこれに「程度・深度」を加える。

(9) じっくり、みっちり、しっかり、じわじわ考える、解決する。

(時間をかけて綿密な様子) (時間／様態／程度の副詞的擬態語＋思考動詞)

(10) さくさく、ばさばさ、しゃきしゃき、ずいずい、ずんずん、ほいほい解決する。

(歯切れよく目標に向かって進んでいく様子) (時間／様態の副詞的擬態語＋思考動詞)

思考動詞が直接オノマトペで表現できない理由について、次のような仮説が成り立つのではないかと思われる。「一般的に『思考』は他の心理活動と比較して構造的で論理的な作業であるといえる。擬音語類の持つ特徴の『抽象化・直感的』という性質と『思考動詞』の持つ『理論的・構造的』な性質とは相容れないことになる。したがって言語記号である擬音語類での表現は困難なのである。」しかし、この仮説を立証または補足する論説は見当たらない。

3. 感覚のオノマトペ動詞の特徴

感覚は五感の感覚受容器から外部信号を受容し、脳の感覚野で認知する段階である。特に言語表現では、「外部からの刺激」ということ、つまり発話者と対象（刺激）が異なることに重点がおかれる。したがって、本稿では刺激源が身体内部である平衡感覚・運動感覚・内臓感覚は含めない。感覚動詞は、「受動的情報感知動詞」である。その特徴は「情報源が主語で動作主体は（一人称であることが多い）基本的に表現されない自動詞」である（関口 2012：4）。五感の動詞表現は「能動的情報感知動詞（他動詞）」「受動的情報感知動詞（自動詞）」「情報＋スル形」という形であるが、擬態語表現の場合「情報＋スル」が「擬態語＋スル」の表現になり、オノマトペ動詞となる。例えば、「ほくほくする」の「ほくほく」は「芋や栗などに見られる食感」と「蒸して」「高温」になっている状態の食品という多くの内容を含む「情報」である。それに「(と) する」が付いてオノマトペ動詞となっている。

＜感覚動詞の擬態語の例＞（工藤 1995、吉永 2008 参考）（表 2）

嗅覚	つんと（くる）、おんと、ぶんぶん、むんむん、むっと
触覚	ざらざら（ざらりと）、さらさら（さらりと、さらっと）、じくじく、しっとり、じっとり、つるつる、ぬるぬる、ごわごわ、すーすー、<ズキズキ、ヒリヒリ、ムズムズ、チクチク（チクリ、チクン、チクット）>、ねとねと、べとべと（べったり）、ひゃっと、かさかさ、がさがさ、ぎとぎと、すべすべ、べたべた、べたべた
食感	ぼそぼそ、もそもそ、ほくほく（口内触覚）

注：「擬態語＋する」が一般的である。「する」を省略して表示。

注：カタカナ部位<>記号内は皮膚感覚受容器⁶を越えて、深部神経に到達しているので「知覚動詞」と判断する。

⁶ 皮膚の受容器はマイスナー小体（微妙なタッチ感）、パチニ小体（圧力）などであるが、痛感を感じない。自由神経終末に到達して痛感を感じる（下条 2007 等参照）。本稿では痛感をより神経よりの表現と解釈し、知覚動詞で扱う。

3.1 視覚感覚のオノマトベ動詞

視覚感覚のオノマトベ動詞はないと述べたが、境界線上にある擬態語表現は存在する。

3.1.1 視覚受容器での皮膚感覚・知覚

「ちかちかする」というのは、視覚受容器の皮膚での痛感であるが、解釈によっては視覚領域での反応であるため視覚感覚動詞としての分類も可能である（関口 2012：5、表 1 参照）。浅野（1987：180）は「光線、微生物などの刺激で目が刺されるように断続的に痛む様子」と述べている（例文 11）。また、閃輝暗点（せんきあんてん）と呼ばれる偏頭痛の前兆症状によって起こることも多い（例文 12）。情報源と視覚野をつなぐ神経での反応であるため、このような症状は視覚感覚として単純に処理できない。

(11) 太陽を直接見てしまい、目がチカチカする。（?皮膚感覚）

(12) 突然目の前が真っ暗になったかと思ったら、目がチカチカした。（?知覚）

3.1.2 触覚の視覚的表現

「ぎとぎとする」は自己の皮膚感覚を表現する。しかし、類義語の「ざらざらする」も同様に油分を表現した擬態語だが、視覚的であり、皮膚感とはいえない。光の反射程度によって非常に類似するオノマトベ動詞が触覚的であったり、視覚的であったりする。例えば「ベトベトする」は明らかに触覚であるが、「ぎとぎとする」から「ざらざらする」そして「きらきらする」と変化するにしたがって、触覚から光の反射に重点が移行し、視覚的表現が強調されていく傾向にある。同じように「ぐしょぐしょする、ぐっしょりする、びしょびしょする」は皮膚感と状態どちらも表現するが「ぐしょぐしょになる、びしょびしょになる」は、どちらかといえば雨や汗でぬれた物質の状態を表現しているので、感覚動詞というよりは状態動詞の傾向が強であろう。このように類義語表現を比較すると皮膚感覚であるが、視覚的要素の強い擬態語や視覚から判断して物体の状態を表す状態動詞の傾向の強い擬態語に傾くものもある。そういった表現は視覚感覚動詞と状態を表す動詞との境界線にあるといえる。これはオノマトベが深い思考過程を経るのではなく、直感的に言語として表現されるため、強制的な意味範囲の中に存在するわけではなく、曖昧性も許容するといった性質をもつためにおこるからであろう。しかし、やはり視覚的表現は実際に視覚感覚器での処理を表現するというより、その後認知され（知覚処理以降の情報伝達段階）、イメージ化・表象化された情報の擬態語表現であると解釈した方が自然である。つまり視覚感覚段階より高次の情報処理段階となるため、感覚動詞とはいいがたい。例文（13）（14）に見られるように、視覚の対象物の状態を表す擬態語、つまり状態動詞の擬態語となっている。

(13) 油の膜が張って、湖面がキラキラしている。（触覚感覚的表現）

(14) 光が反射して、湖面がキラキラしている。（視覚的表現）

このように触覚感覚で過去に経験されていて、推測できるようになっている皮膚感覚があるとき、視覚情報として入力された情報が視覚感覚経由で触覚においてオノマトペ表現になることがある。

3.2 聴覚感覚のオノマトペ動詞

聴覚感覚のオノマトペ動詞は、「スル形」の動詞での表現が困難である。擬音語と聴覚に関連する動詞を組み合わせる表現するのが一般的である。しかし、聴覚感覚動詞表現が可能でないにしても、音は当然擬音語化しやすいので、聴覚動詞と組み合わせることにより多種多様な表現ができる。一般に文法的には、聴覚感覚のオノマトペ表現＝「擬音語＋聴覚感覚動詞」または「擬音語＋音に関連する外的運動動詞⁷」という方程式が成り立つ（(15)～(18)）。また(18)のように動物（人間も含めて）の場合は、オノマトペ表現＝「擬声語＋音に関連する動詞」となる。

(15) おもちゃの音がガチャガチャ聞こえる。（擬音語＋聴覚感覚動詞）

(16) 太鼓の音がドンドン響く。（擬音語＋外的運動動詞）

(17) お寺の鐘がゴーンと鳴る。（擬音語＋「と」＋外的運動動詞）

(18) 鳥の雛のピーピー鳴く声が聞こえる。（擬声語＋聴覚感覚動詞）

制限があるがオノマトペ動詞による表現も可能である（「ガチャガチャする」など）。しかしこの場合、例文(15)～(18)のように「鳴る、鳴く、聞こえる」など「音に関連する動詞」を付けて表現する方が自然である。またオノマトペ動詞にすると動作主体の動きや状態を表すこととなり（例文19・20）、感覚動詞の特徴である「受動的」な性質が表現されにくく、感覚動詞ではなくなる。

(19) 木槌を叩く音がカンカンする。（聴覚＜音＞に関連する状態動詞）

(20) ミツバチの羽音がブンブンする。（聴覚＜音＞に関連する状態動詞）

3.3 嗅覚感覚のオノマトペ動詞

3.3.1 嗅覚感覚の擬態語

嗅覚関係の擬態語は多少みられる。「つんとくる」は吉永(2008)も例にあげている。これはにおいの質の情報（酸性もしくはアルカリ性の強度で不快感のあるにおい）も伝わってくる。「ぷんとくる、ぷんぷんする」はにおいが一気にある程度広範囲に拡散し、不快な感じであることを表現している。「むんむんする、むっとする」は、閉鎖的な（こもった）空間から拡散した化学物質が急激に鼻に感じられ、不快な感じを表現する。例文(21)(22)は鼻腔内に直接侵入してきた科学物質を脳の嗅覚神経で認知し、表現したものである。

⁷ 工藤(1995)は動詞を外的運動動詞、内的情態動詞、静態動詞に3分類した。本研究の動作動詞、心理動詞、状態動詞にあたる。

(21) 肉の腐った臭いでツーンとした。(嗅覚感覚の擬態語)

(22) ミントのガムの匂いがスーッとした。(嗅覚感覚の擬態語)

＜擬態語で表現されるにおい成分・質の例＞

(表 3)

擬態語	性質	成分例
つん、つんつん、つーん	強く鼻をさすような刺激臭・腐敗臭	アンモニア
スースー、スーっ	薄荷・ミントの爽快な匂いの薄荷臭	メントール
むっ、もあー	密閉された空間にこもる臭い(腐敗臭?)	湿気+悪臭/熱気+悪臭
ブンブン、ブーン	強いにおいが空間に拡散(刺激臭)	香水・アンモニア

表3には7原臭全ての例ではないがいくつかの例をあげた。人が臭いの差異を認知できるのは、エーテル臭、樟脳(しょうのう)臭、ジャコウ臭、花臭、ハッカ臭、刺激臭、腐敗臭の7原臭である(法研2010)。

3.3.2 においを嗅ぐ動作の擬態語

くんくん、ふんふんなどは、においを嗅ぐ行動を表す擬態語で、動作動詞である。山口(2003:149)は「くんくん」について「動物がしきりににおいをかいだり、鼻を鳴らしたりする音。またその様子。人間について用いる場合は、動物的に嗅覚を働かせている時で、においのもとを探す場面や、食欲に結びつく場面であることが多い」としている。また「ふんふん」について山口(2003:479)は稀ではある⁸が「匂いをかぐ時に鼻から発する音。また、その様子」と述べている。このようにこれらの擬態語は、においを嗅ぐ時およびそれに伴う鼻息に関連して発生する音や様子を表すので、動作に関連する擬態語であると解釈でき、感覚動詞とは別に扱う。

3.4 触覚感覚のオノマトペ動詞

触覚感覚のオノマトペ動詞の特徴は、皮膚感覚を表現するものが多数を占める。

3.4.1 原材料の性質による擬態語表現

3.4.1.1 温度

温度の範囲は高温・温暖から低温までがあり、それらの物体が皮膚に触れた時の感覚を表現する擬態語が数多くある。これらは純粋に物体の温度を表現したものもあれば、温度とその物体の材質も一緒に表現したものもある。

3.4.1.1.a 高温・温暖

「ほかほかする」は皮膚に感じた空気や物質が適度に暖かい感じである。類義語では「ほっかほっか、ほっかほか」である。「ぬくぬく」は寒い時に布団に入ったりしたときのあたたかい様子(山口2003:359)である。温かいの意味の「温い(ぬくい)」

⁸「ふんふん」は通常相手の話に同意したり、うなずいたりする時に鼻から発する音を表し、本文の意味で使う事は稀である。(山口2003参考)

などと関係がある。しかし、「ぬくぬくする」は動作動詞や状態動詞（「テイル」形）として用いられることが多く、皮膚感覚言語としては表現しにくいと思われる。「ふかふか」は炊いたばかりで温かい様子（山口 2003:458）である。しかし、類義語の「ふわふわ」のようにやわらかくて弾力があるという意味で言語表現されるほうが一般的であろう。

3.4.1.1.b 低温

「ひやひやする、ひやっとする、ひやりとする」など単純に温度が低い状態の皮膚感覚の擬態語表現である。

(23) (スライム⁹に触ったら、) ひやっとした。(低温の触覚感覚の擬態語)

3.4.1.2 湿度

田守 (2001:42) はオノマトペの意味的考察において、日本語の語彙的優位性について述べている。これによると日本の文化的背景や気候・風土などの影響で日本語には水分や湿度を表現する語彙が英語と比べて豊富であると考えられる。

3.4.1.2.a 湿度

「しっとりする、べっとりする、べとべとする、もちっとする、じめじめする、じとじとする、べちょべちょする」など湿度（水分）に関係する表現である。

(24) (乳液をつけたばかりの肌は) しっとりする。(湿度の触覚感覚の擬態語)

例文 (24) はしっとりしている皮膚の状態でもあるが、触覚感覚と解釈する。

3.4.1.2.b 乾燥

皮膚に接触したときのイメージを表現したものが、そのまま皮膚感覚の擬態語として用いられる。「ごわごわする、ばりばりする」は固くて乾燥した物体をイメージする。「ざらざらする」は乾燥した粒状の感じから表面が滑らかでない様子をイメージする。「さらさらする」は細かく粘り気や湿気のない砂などをイメージする。例えば、制汗パウダーを使用した際は、夏の湿気の不快な皮膚感を一掃するという正の感覚がある。「ざらっとする」「さらっとする」は一過性の感覚である。これらの微妙な表現の差が、乾燥の状態やその媒体の大きさなどの差異を表現する。例文 (26) は触覚感覚を味覚にたとえて表現している。

(25) (制汗パウダーでべたつく肌が) さらさらする。(乾燥の触覚感覚の擬態語)

(26) (脂肪分ゼロのビールの飲み口は) さらっとしている。(味覚の触覚感覚の擬態語)

3.4.1.2.c 油分

油分が皮膚に感じられる感覚である。「ぎとぎとする」は皮膚感覚で不快感がある。「つるつるする」は肌に余分な油があって滑る感じである。「ざらざらする、きらきらする」は視覚的で油が反射する対象物の状態を表す表現であるため、触覚には含まれ

⁹ ホウ砂、洗濯のり等を材料とし、絵の具等で色づけされた玩具。人工ゴムのような弾力性があるがより柔らかく伸張性があり、形も変えられることから学校の実験用教材としても用いられる。

ない。

(27) (揚げ物を食べ過ぎて、顔が油で) ぎとぎとする。(油分の触覚感覚の擬態語)

3.4.1.3 圧迫感

きつい服や靴をはいて締め付けられるような圧迫感を表現することがある。しかし、実際接触しているのは皮膚であるが、時に筋肉・脂肪組織から内臓にも及ぶ感覚である。皮膚感覚に限定するのであれば、皮膚の表面組織が押し付けられるような、または引きつれたり引っ張られる感じの圧迫感を指す。しかし、言語表現の場合はそこまで具体的に把握しているわけではなく、その部位や文脈によっては「知覚動詞」であると解釈できる。

(28) (矯正下着を着けているので、) きちきちする。(圧迫感の触覚感覚の擬態語)

3.4.1.4 痛感

ズキズキ、ヒリヒリ、ムズムズ、チクチク (チクリ、チクン、チクッ) などは、「知覚動詞」として解釈される (関口 2012)。言語表現という場において話者はそれらの相違点を認識して表現しているとは思えない。解釈によっては痛感を皮膚感覚の一部ととらえる場合もある。「ちくちくする」などは触覚と視覚的特徴から皮膚感覚的に言語表現することもある。神経医学の観点からは知覚 (神経に関わる) であると解釈されるが、日常生活の中では皮膚感覚として表現することの方が多いかもしれない。

3.4.2 その他の特徴

3.4.2.1 皮膚感覚と感情

「すーすーする」は皮膚の体温が奪われて涼しい感じの意味であれば、皮膚感覚である。メントやハッカなどで息のとおりがよくなったり、冷たく感じられたりするのであれば味覚であろう。同じように「ひやっとする、ひやりとする、ひやひやする」も皮膚感覚と味覚どちらでも表現できる。また感覚動詞ではなく、恐怖を感じれば感情動詞の意味を持つ。しかし、原義は感覚動詞として用いたものであろう。

(29) (背中に冷たい風が当たって) スースーする。(低温の触覚感覚の擬態語)

(30) (接触事故を起こしそうになって) ひやっとした。(恐怖の感情の擬情語)

「ひやりとする、ひやっとする」は皮膚感覚から派生・意味拡張して感情の表現 (感情動詞) にも用いられる。「ぞっとする、ぞくっとする」と同様に「恐怖感」や恐怖を伴う「緊張感」を感じたときに用いられる。「ひやり」はより冷たさを直接表現し、低温状態の温度という状態の感覚を表す。「ぞくっとする」などはさらに身体の深い部位の神経系に至る知覚なので心理的な意味合いを持ちやすい。また「ぞくぞくする」も皮膚感覚では冷感に対する反応であるが、心理的意味合いは負の心理の「恐怖感」だけでなく、正の心理の「期待感 (嬉しさ)」も表現する。

このように皮膚で感じる「冷感」は、感情的に恐怖心を表現する擬態語に派生・意味拡張しやすい。

3.4.2.2 皮膚感覚と聴覚的効果

「ぱりぱりする、ぱりぱりする、ぴりぴりする、ぴりっとする」などは乾燥した肌の感覚を表現するとき用いる。これら「ぱりぱり（薄い物を割った時の音）、ぱりぱり（厚い物を割った時の音）」「ぴりっ（薄い紙等が少し裂ける音）（神経的刺激＝知覚）」（山口 2003）などは聴覚的な表現が原義であり、皮膚感覚はそれらの音響効果から派生・意味拡張したと考えられる。

(31) (日焼けで肌が) バリバリする。(触覚表現の擬音語)

この表現は固くて厚くなった皮膚が割れる音から、消費者に強い衝撃と危機感を与えている。聴覚的効果を使って皮膚感覚を表現している。

3.5 味覚感覚のオノマトペ動詞

味覚感覚のオノマトペ動詞の例を分析していくと、味覚も触覚も類似した表現が多いということに気づく。しかし、それは生理学的な分類から見ると、味覚も皮膚感覚の一部であると言える面もあるからである。ただ、味覚と触覚に関する擬態語表現ではそれぞれ異なった特徴が見られる。それは当然味覚野表現は食物と関連が強いからである。

3.5.1 食感による分類

<口内運動・味覚の擬態語>

(表 4)

味覚器官・作用	擬態語の例	質
唇	びちゃ、びちゃびちゃ、びちゃ、びちゃびちゃ、ふわふわ、ふわっ、あつあつ、あちっ、ひやっ等	湿度(粘り気)・柔らかさ・温度等
歯・噛む	さくさく、ざくざく、さくり、かりかり、かりっ、ぱりぱり、ぼりぼり、ぱりっ、ぼりっ、ぱりん、ぱりん等	固さ
舌・咀嚼 (口内感覚)	プルプル、ふわっ、ねばねば、さくさく、(辛っ、甘っ、すっぱっ、) あつあつ、しゃりしゃり、べったり、もさもさ、ねっとり等	基本 5 味、温度、湿度(粘り気)、柔らかさ、固さ等
嚥下	あちっ、あつっ、イガイガ、ガサガサ、ネバネバ、ネチヨネチヨ、べたべた、べとっ等	温度、固さ、粘り気等

食感と一口に言っても、唇（温度など）、歯ごたえ（歯に食品があたる感覚）、舌下（唾液に溶け粘膜から吸収、または味雷で 5 味覚を感じる）の咀嚼の過程から、食道にいたる嚥下の過程までが味覚感覚に含まれるのであるから、当然様々な過程の感覚器での擬態語表現が考えられる。唇で味覚を感じる事はできない。唇では温度や触覚（固さ・柔らかさ・湿度等）を感じる事ができるので、それらの感覚が表現される。歯ごたえは、歯でかんだ感覚であるので、固さ（柔らかさ）の言語表現がなされる。舌下・咀嚼の段階では、舌では基本 5 味、咀嚼の段階で食品の材料の性質が擬態語表

現される。嚥下・飲み込みの段階では温度（高温の食品を飲み込んでしまった時）や固さ（乾燥感）・粘り気（餅が喉に詰る時）などが表現される。

味覚（歯ごたえや舌触りなどの食感）あるいは口内の皮膚感覚の擬態語である。「ほそほそする、もそもそする」は、乾物と口内の皮膚の間に唾液が不足して乾燥した食感を表す。「ほくほくする」は、焼き芋、茹でたり蒸したりした南瓜や栗などを食べた時の食感で適度な水分があり、温度の高い状態である。これらの表現は食品材料の状態と口内の感覚両方の関係において成立する。例えば、パンが乾燥して舌や口の中の湿り気を吸収してしまい、ペタペタくっついて、ある程度の時間口内に残っているといった場合に「ほそほそする、ぱさぱさする」という表現が成立する。パンの状態だけでも口内の状態だけでも成立しない。したがって口内感覚といえる。

(32) このパンはスープがないとほそほそして食べられない。(湿度の口内感覚の擬態語)

(33) この焼き芋はほくほくする。熱いけどおいしい。(温度の口内感覚の擬態語)

(34) 舌の上で（溶けて）ふわふわする。(柔らかさの口内感覚の擬態語)

(35) パリッとした食感のえびせんべい。(固さ・歯ごたえの口内感覚の擬態語)

例文 (32-35) は口内の感覚であるが、触覚感覚動詞の擬態語である。口内における皮膚感を表現している。食感（味覚）のオノマトベ動詞は見当たらない。基本5味を表現する場合は形容詞（「甘い、辛い、苦い、しょっぱい、うまい」）で表現することのほうが一般的である。

3.5.2 文脈によるオノマトベの違い（歯ごたえ）

歯ごたえについて、一つ触れておく。文脈によって、2通りの解釈が可能である。

(36) ラスクにかかっている粉砂糖がシャリシャリした。(食べ心地、状態)

この場合は、粉砂糖の食感を表しているので、「シャリシャリ」＝「粉砂糖」である。これは3.5.3でふれる「材料」の比喻表現としての擬態語であるといえる。

(37) 煎餅をバリバリ食べる。(動作の様子、擬音語＋動作動詞)

(38) アーモンドチョコレートをカリッと食べる。(動作時に発生した音、擬音語＋動作動詞)

例文 (37) は、煎餅を食べている音を表現するので、擬音語として用いられる。したがって、この擬音語は、聴覚感覚を表現したものである。または「バリバリ」と音を立てて煎餅を食べている動作の状態・様子を音で表す。例文 (38) の場合の「カリッと」は一口・一回歯で噛んだときの音そのもので、動作そのものを音として表現している。例文 (37) (38) ではオノマトベ動詞ではなく、擬音語＋動作動詞である。

このように歯ごたえを表現するオノマトベは、それらの文脈によって、食品の材料・要素を比喩的に表す「擬態語」である場合と、食品を食べている音を表す「擬音語」として用いられる場合がある。

3.5.3 原材料・食品要素による分類

日本人は健康オタクである。日本ではテレビ番組やコマーシャルで絶えず健康に関する番組や食品の紹介をしている。日本人はきれいなモデルが出てきて、ただ健康にいいとかただ痩せるとか言うだけでは納得しない。より具体的に医学専門家並みの情報や臨床例がないと納得しない。肌の美白のコマーシャルでは、紫外線でできたシミの皮膚の内部にまで浸透する美容液の液体成分まで強調する。シャンプーでも毛髪の断面図まで出てきて、どのように髪が痛めつけられ、そのシャンプーがどのように修復するかというメカニズムがコンピュータグラフィックスによって再現される。最近では、肌のメカニズムから美肌になるにはヒアルロン酸（皮膚組織の維持のためにたんぱく質と結合する多糖類）とコラーゲン（皮膚を生成するたんぱく質）が必要であることが言われてきた。興味深いことに日本人消費者は、それらがどのくらい含まれる製品であるか（具体的に何%とか何mgとか）で商品価値を見出す。実際はそれらがどのくらい含有されているかなど分かるはずがなく、沢山含まれているとなんとなく効果があるような気がするのである。しかし、近年では健康食品などの宣伝はそれらの物質（たんぱく質、食物繊維、ミネラルなど）がそのまま擬態語化して表現される。下記の擬態語表現は、全てが動詞ではないが、日本人が製品内の目に見えない要素を擬態語化して使用している例となっている。

＜成分からイメージされる擬態語の例＞

(表5)

擬態語	成分	特徴	製品例
プルプル	コラーゲン	水分保持	グミ・ゼリー
もちもち	餅粉	粘り気	和洋菓子
パリパリ・パリポリ	餅粉など（乾燥して焼いた）	乾燥、割れやすさ、薄さ	煎餅、豆菓子
すっきり	炭酸	炭酸が心理に及ぼす影響	ビール・コーラ
ふわっ	ゼラチン・卵白	舌で溶解していく過程	マカロン・ケーキ
トロリ・とろっ	良質のたんぱく質（肉や魚）・乳製品	舌で溶解していく過程	とろまぐろ・ステーキ・プリン
しゃきしゃき	食物繊維	キャベツなどの歯切れ感	キャベツ・レタス
ねばねば・ネバっ	発酵食品・海藻	発酵して粘り気があり糸を引く感じ	納豆・海藻類

(39) (コラーゲンたっぷりで、) プルプルする。(コラーゲン)

(40) (このパンは、) もちもちして粘り気があるなあ。(餅粉)

例文 (39) はコラーゲン、例文 (40) 「もちもち」は餅粉などが含まれ、適度な粘り気のある食感を表現する。これもその食品の要素を表現している。

(41) (このせんべいは) パリパリしておいしいな。(炭水化物を焼いて乾燥した食品)

これは一般的にせんべいの食感を表現している。歯ごたえの場合もある。

心理的作用を食感として表現することもある。(42)はキャッチフレーズとしては飲み心地を強調しているが、文全体の印象は精神的な爽快感を強調しているようにとれる。山口(2003:254)は「すっきり」の3番目の意味に「疲労やだるさなどの体調不良や悩みなどが取れて、気分的につかえるものがない快い様子」としている。山口の挙げる4つの「すっきり」の意味の中には、「飲み心地」など飲食に関する意味はない。したがってこの場合は精神的な爽快感と飲み心地を掛けて使用している表現であるといえる。その「すっきり感」を分析すると、「冷感の心地よさ」と「炭酸飲料」のもつ特質が浮かび上がってくる。

(42) すっきりした爽快感な飲み心地。(炭酸、オノマトペ動詞の名詞修飾)

また口内での物質変化のプロセスを食感として表現する擬態語表現もある。ただし例文(43)と(44)は、感覚のオノマトペ動詞ではない。

(43) (舌の上で、) ふわっととろける 食べ心地。(良質のたんぱく質、副詞的用法)

(44) (この牛肉は、口の中で) トロリととろける。(良質のたんぱく質、副詞的用法)

3.5.4 知覚と口内感覚

辛い物を飲食したときなど、口内の神経が麻痺することがある。この場合、科学的には神経反応であるので、知覚表現として分類される。言語でも生理学の分類どおり知覚動詞の擬態語表現ともとれる。しかし、口内感覚であるので感覚オノマトペ動詞の知覚的表現ともいえる。例を挙げておく。

(45) (辛いキムチを食べて、口が) ヒリヒリする。(びりびりする)(神経系の擬態語)

(46) (コップの静電気で唇が) ビリっとした。(神経系の擬態語)

(47) (知覚過敏なのでアイスクリームを食べると) ズキっとする。(神経系の擬態語)

3.6 肯定的・否定的・中立的な表現

日本語表現の興味深い点として、類似の状態を表現しているにもかかわらず、オノマトペが肯定的に感じられる場合と否定的に感じられる場合がある。それについて少々例を挙げる。

3.6.1 皮膚感覚(乾燥)表現

田守他(2001:175)は、「乾燥」に関するオノマトペを「乾燥の意味だけを表すわけではない。例えば、「ほそほそ」という語は食べ物が乾燥していてとても食べられたものではないということを示唆する。」と述べている。このように乾燥を表すオノマトペは、単に乾燥だけを表現するのではなく、その意味に多くの要因を含んでいる。

＜乾燥を表すオノマトペの含有する肯定的・否定的評価＞ (表6)

乾燥を表すオノマトペ	意味領域	肯定 / 否定
ぼそぼそ・ばさばさ	食べ物の乾燥 + 食品価値が低い	否定的
ざらざら	人の皮膚の状態 + 肌荒れ	否定的
ばさばさ (髪)	髪の毛が痛んでいる感じに乾燥	否定的
さらさら (髪)	髪がなびくような感じに乾燥 (健康的・美的)	肯定的
かりかり・ぱりぱり (食品)	煎餅など硬くて薄く乾燥 + 心地よい歯ごたえ音	肯定的
がりがり・ぱりぱり (食品)	焦げ付き + 食品価値が低い	否定的

(48) 衣がかりかりッとしてうまそうな唐揚げ。(飛田 2002:71) (オノマトペ動詞)

(49) カレーががりがりに焦げついて灰みたいだ。(飛田 2002:72) (副詞的用法)

例文 (48) は「うまそうな」というように肯定的な意味を持つ。一方、例文 (49) は「焦げついて灰みたい」というようにとても食べられないというように否定的な意味を持つ。どちらも食品の乾燥を表する表現だが、肯定的意味を含有するか否定的な意味を含有するかでオノマトペ表現が異なる。例文 (48) (49) は触覚感覚ではないが、触覚感覚のオノマトペの意味領域にもいえることであろう。

3.6.2 皮膚感覚 (湿度) 表現

3.6.1 の対照として湿度・湿気・水分を表現する例も挙げる。

＜湿度を表すオノマトペの含有する肯定的・否定的評価＞ (表7)

湿度を表すオノマトペ	意味領域	肯定 / 否定
びしゃびしゃ	少量の水が連続して跳ね返る音 (飛田 2002:438)	中立
びしょびしょ	大量の水を含んで濡れている様子。(飛田 2002:440)	否定的
もちもち (食感・皮膚)	粘り気と弾力があり柔らかさと適度の水分がある。	肯定的
べたべた / べとべと (食感・皮膚)	粘り気と粘着力があり水分がある。不快の暗示 (飛田 2002:528)	否定的

(50) 日本人はもちもちとした食感が好きだ。(飛田 2002:611)

(51) 背中が脂汗でべとべととする。(飛田 2002:528)

例文 (50) は「食感」を表しているが、プラスのイメージである。例文 (51) は皮膚感を表しているが、不快な様子が受けとれ、マイナスのイメージである。表7の「びしゃびしゃ」と「びしょびしょ」は「する」をつけて動詞化した場合、「状態や様子」を表すので「感覚動詞」ではない。しかし、オノマトペが表す状態から感覚として身体に接した場合も類似した意味領域をもつと思われる。

このように、感覚を表すオノマトペはその状態だけでなく、プラスやマイナスの評価やイメージを含むことでオノマトペ表現が変わる。それは状態動詞でもいえるが、特に食感や皮膚感のように人の感覚に接する現象には快・不快といった評価やイメージが表れやすい。この場合、思考レベルの理論的な評価ではなく、身体に直接関わる

ような直感的なレベルであると思われる。

4. 様々な角度から見た感覚のオノマトペ動詞の特徴

4.1 感覚と知覚の境界線にあるオノマトペ

感覚器官に入力された刺激（情報信号）は、脳内の感覚野で情報処理され、次に知覚野で認知され、イメージである「知覚表象」になって認知されるという一連の情報伝達経路がある。感覚と知覚は連続した情報伝達回路によって関連している。これは言語表現の一つであるオノマトペも同様であると思われる。それは生理学・神経医学の分類に類似する。例えば、「閾値¹⁰」の認識（関口 2013.8:237 図 7-3「閾値段階図」）において、刺激閾は「感覚」の範囲にあり、次段階の「認知閾」は「知覚」の範囲にあり、絶頂点となる「刺激頂」は「痛覚」となる。生理学でのこの違いはそのまま言語表現にも反映される。知覚表象化というイメージ化はゲシュタルト認知であるので、個々の情報と記憶や想像をも巻き込んだ高次認知となる。しかし、感覚では第1次的な情報処理が行われる。したがって、感覚の言語表現は知覚の擬態語の表す範囲と類似する部分・両義的な範囲（情報処理の連続性から）と異なる部分（情報処理段階の違いから）があると仮定される。皮膚表面の感覚を表現する場合の「ガサガサする、チクチクする」などが触覚感覚の擬態語となる。皮膚のより深部に感覚が浸透した場合の「ズキズキする（シクシク・シンシンと痛む）」は、神経系にまで情報が到達するので知覚動詞の擬態語となる。ただし、「チクチク、チクン、チクッ、チクリ」という痛みは、皮膚感覚の場合とさらに深部の神経に到達する場合があります、この分類は困難である。このように類似した言語表現であっても、刺激の情報源の違いで触覚感覚（皮膚表面）とも知覚（深部神経に達する）ともとれる。そしてその情報源について文脈から理解できる場合もある（ウールのセーター＝皮膚表面がこすれてチクチクする、針＝深部に刺さるとチクンと痛み神経に達する）。しかし、実際には瞬間的なイメージによる言語表現であるので、この両者の境界線を正確に分析することは困難である。

このように、実際の生理学上の分類で境界線になる擬態語表現（感覚野での情報処理と神経到達など知覚領域に属する場合との境目）と、これとは別に、擬態語自体が感覚と知覚の両領域を表現する可能性をもつものがある。

4.2 動作・状態表現と感覚表現の境界線にあるオノマトペ

3.3.2では、動作動詞と嗅覚感覚動詞との境目にある動詞を挙げた。嗅覚感覚動詞の場合、「くんくんする」は能動的に臭いを嗅ぐ行為・行動を表す「動作動詞」である。同じく鼻という嗅覚感覚器を使用した言語表現であっても「つんつんする」は酸性の

¹⁰ 閾値と言語表現については、関口（2013.7）参照。生理学上の「閾値」は八木（2009:37-42）参照。

強い臭いが受動的に受け入れられる事態を表現するため、受動的情報感知となり、「嗅覚感覚のオノマトペ動詞」となる。

また視覚感覚動詞では、3.1.2で視覚で認知した状態を表現する擬態語表現を取り上げた。「ギトギトした、ギラギラした」は、油を触った時の感覚のイメージ（状態）が視覚表現として転用されたものである。

4.3 文構造によるオノマトペの違い

3.5.2で触れたように文構造によって、状態を表すのか、動作を表すのかという違いがでてくる。さらにそれが状態であれば擬態語、動作中の音であれば擬音語となる。特に味覚感覚動詞において両義に渡るオノマトペが存在する。擬態語表現であれば、食品と舌（口内）の関係を表し、文の構造は擬態語が名詞修飾（「もちもちの食感」等）か述語動詞（「もちもちする」等）となる。一方、擬音語は飲食の行為や様子・状態を音で比喻表現し、文の構造は擬音語が述語動詞を修飾する場合（「ぼりぼりする、ぼりぼり食べる」「ゴクゴクスル、ゴクゴク（喉を鳴らして）飲む」等）、動作を表し、動作中に追隨した音を表現する。

3.4.2.2の視覚の聴覚的効果も似た現象である。例は、皮膚の乾燥を強調するために、「バリバリ」と音をたてて乾燥していく肌の様を表現している。肌がバリバリと音を立てるはずが無いが、このコマーシャルの音響効果はかなり印象的である。

4.4 感覚のオノマトペ動詞と知覚

歯肉炎のコマーシャルで「ぷよぷよする」という表現が使われている。これは菌莖が炎症を起こして、水ぶくれして腫れている状態を視覚と皮膚感覚から表している。オノマトペ表現の特徴は「ぷよぷよ」というだけで細かな症状まで連想させるところにある。「ジクジクする」も足の中で水虫菌が増殖しているような連想をさせ、その皮膚の状態を知覚と視覚から表現している。「パンパンになる」も皮膚感覚の状態や触感から皮膚が緊張して膨らんでいる状態を表し、この場合はむくみや筋肉痛などの症状を表現している。

(52) (今朝は、顔が浮腫んで) パンパンになっている。(擬態語+なる)

また、その呼吸の音から（聴覚感覚動詞）「ゼーゼーする、ヒューヒューする」で肺炎や気管支炎などの呼吸状態を表す。極度な運動後の呼吸の状態を表すときは「ゼーゼーする、ハーハーする」となる。

感覚動詞では「嗅覚・味覚・皮膚感覚」からのオノマトペ動詞として表現される。知覚の段階になると情報がより高次な神経伝達回路にはいるため、多様な症状を表すオノマトペ動詞が多く使用される。例えば頭痛を表すために、その頭痛の状態の差異を細かに使い分ける必要があるからである。刺すように痛いのか、鈍痛なのか、どの程度痛いのかなどという情報を医師に正確に伝達する必要がある。感覚器官であれば、

ある程度外から判断できるが、神経の痛みは言語で表現することが多いため、正確に伝えるために微妙な言い回しが増えるのである。感覚のオノマトペ動詞は知覚表現と重なる部分もあり、感覚による知覚（病的症状）表現ともいえる。

5. まとめと展望

日本語のオノマトペは、他の言語とは異なり、擬音語、擬声語、擬態語、擬情語、比喩表現など多様な表現がある。心理動詞では擬態語（感覚動詞・知覚動詞）や擬情語（感情動詞）の表現が中心である。日本語の感覚のオノマトペ動詞は、それらの表現する要素が豊かである。本稿では感覚のオノマトペ動詞について、物理的分析（皮膚による粒感・摩擦感・温度感など）や化学的分析（嗅覚による化学物質の感覚の別）等の方法を視野にいれて、分類を試みた。またそれらの反応に伴う直感的な情動反応である快・不快もオノマトペの表現に影響することも念頭に入れた。本稿で感覚受容器別に言語表現に含まれる物理的・化学的要素、情動反応による要素、時間・頻度・強度などの要素に重点をおいて考察した結果、オノマトペ動詞の派生や類似性はどんな要素が関わっているのかということも分かってきたのではないと思われる。しかし、それらの分析を行う過程で単純に分類できない困難さに遭遇したのも事実である。つまりオノマトペ表現のもつ直感的言語表現（深い思考過程を経由しない）は、言語の制約がゆるく、また直感由来の個人差も許容され、さらに造語性も高い。たしかにオノマトペ動詞を単純に分類することはできないが、それでも科学的分析を言語分析と照らし合わせることにより、より適切に分類できる可能性がみえてきたのではないだろうか。

5.1 五感別オノマトペの特徴

5.1.1 視覚感覚動詞

視覚感覚を擬態語で直接言語表現できるオノマトペ動詞は見当たらない。視覚と関連したオノマトペで動詞は、「視覚野と関連した皮膚感覚での反応」と「視覚野で受容した情報を触覚の擬態語によって比喩的な表現に置き換えた場合」（「ギラギラする、ツルツルする」など視覚に入った情報から触覚が想像できる擬態語）である。特に後者の場合、比喩の範囲を広げれば直接視覚的な擬態語でなくてもその状態がより多く表現できる。しかし、それを視覚表現のオノマトペ動詞として分類すべきかは疑問である。

5.1.2 聴覚感覚動詞

聴覚表現のオノマトペ動詞（心理動詞）は見当たらない。文法的には「擬音語＋聴覚関連動詞」になってしまう。聴覚関連動詞は、「聞こえる（聴覚感覚動詞＝自動詞）、鳴る、音がする」などがある。擬音語のオノマトペ動詞は、「ガラガラする、ドンドンする」などであり、これらは音をたてる「動作動詞」または音の発生している状況

を表現する「状態動詞」になる。

(53) 子供が玩具をガラガラして、遊んでいる。(動作動詞)

(54) 風鈴が風になびいて、チリンチリンしている。(状態動詞)

5.1.3 嗅覚感覚動詞

嗅覚のオノマトペ動詞は「ツンとくる、スーとする」など多少見られる。しかし、一般的ににおいを言語表現するときは、何の、もしくは何のようなおいかというように、より臭気源を明確に表現する。「擬態語+スル」のオノマトペ動詞は、においを嗅ぐ動作動詞（「クンクンする、フンフンする」など）として表現される傾向にある。

5.1.4 触覚感覚動詞

視覚・聴覚・嗅覚表現と比較して触覚表現の擬態語は数多くあり、またオノマトペ表現自体造語しやすいため、現在も増え続けている。味覚の表現もそうであるが、オノマトペ表現は1つの語が多くの情報を持つため、短時間で表現するテレビコマーシャルに多く使用される。日本人は触覚感覚の微妙な違いを動詞の持つ機能以上に表現する必要から、擬態語を使用し、温度や湿度などの微妙な感覚の違いまでを表現する。

また別の特徴として、触覚感覚表現から精神的状態を表現したり、視覚的な状態や聴覚的な状態を表現したりする拡張・派生・比喩的な表現をすることが挙げられる。

5.1.5 味覚感覚動詞

味覚・口内感覚表現のオノマトペ動詞も触覚感覚動詞同様数多くあり、造語が盛んに行われている。食品産業における経済的効果が見込まれるため、テレビコマーシャルの場でキャッチフレーズとして用いられる場合が多い。また食品を紹介する番組などでたまたまゲストが発したオノマトペがすぐに一般化され、使用される例もある。

分類として例を挙げたが、咀嚼器官や過程¹¹（唇接触、歯ごたえ・噛む、舌・咀嚼、嚥下）による分類（表4）や食品成分・要素による分類（表5）などが考えられる。咀嚼過程においては生理的反応が言語表現となる。例えば、唇では触覚と温度・湿度しか感じられず、味覚表現はなされない。また歯ごたえでは食品の切れ味やすりつぶし感の表現が中心となる。味覚機能のある舌に食品が到達した時点で味覚表現となる。また味雷の数や質の相違によって当然感じ方が異なるため、言語表現も変わってくる。特に人種や年齢・環境による要因が大きい。近年では食品成分を比喩的にオノマトペで表現するようになってきた。これもテレビコマーシャルによる強烈なインパクトが経済効果に反映されるといった理由による。具体的にその食品の科学的なメカニズム（例えばどんな成分が骨粗鬆症予防になり、メタボリズム・脂肪燃焼効果があるかなど）

¹¹ 歯科生理学用語の咀嚼過程は取り込み及びStage I 移送期(bite and stage transport I)、咀嚼期(chewing stage)、終期(clearance stage)の3段階である(基礎歯科生理学 医歯薬出版株式会社2007-2012 DentaArrow)。

を説明することによって説得力が増し、購買意欲をそそる。このような近年の日本人の動向もオノマトペ表現の多様化を促している。

5.2 日本語のオノマトペと展望

日本語のオノマトペ表現は日に日に数を増している。これは日本社会のメディアの技術進歩と有用性、それに伴う経済効果という社会的背景によって言語表現の拡張が生じているためと考えられる。オノマトペ表現にはそれ自体に多くの情報が含まれ、スピード化した時代に適したニーズに合っている。例えば、医療現場では、痛みの質や程度を詳しく知るため医師が率先してオノマトペ表現（「ズキズキする、ズキンズキンする、ガンガンする」など）を患者から聞きだす。天気予報¹²では、5段階（「ポツポツ、パラパラ、サー、ザーザー、ゴォー」）に雨の降り方を分類している。特に「ゴォー」という地域は「赤いエリア」を指し、1時間に80mm以上の地域と断定している。このようにオノマトペで具体的に数値化して表現するのは近年の傾向であろう。

またリズムのあるオノマトペ表現は気持ちを軽くし、楽しい雰囲気を出すため、これがストレス社会においてもはやされる要因の一つとなっている。特に感覚に関する言語表現は直感的であるため、スピード感とリズム感を実現しやすい。メディアの広がりとその特徴から感覚を直感的に言語表現できるオノマトペ動詞のニーズは今後も増していくだろう。

5.3 まとめ

本稿は、「感覚（五感）」のオノマトペ動詞について、感覚受容器別に分類をおこなった。各感覚受容器の特性（刺激の種類や信号受信）に関してオノマトペ動詞がどの要素に対応して表現されているのかなどの点に重きをおき、分析した。その結果、感覚器官が受信する、物理的（聴覚など）・化学的（嗅覚など）信号と、「感覚動詞（心理動詞の下位分類の1つ）」としての心理作用、特に情動（快・不快）とによって分類がおこなえるのではないかという可能性を見出した。本研究は「オノマトペのもつ直感的表現という特徴、造語力が高いという特徴、意味範囲が広いという特徴などのもつ曖昧性」と「具体的な科学的要素をもちいた分析」という相容れない性質を認識において接近させようとする試みである。本研究はこの試みの成功に向けて一つひとつ課題を実行していきたい。

¹² TV 朝日千葉市の予報、6月19日22時10分、ウエザーニュース社

参考文献

- 浅野鶴子 (1987) 『擬音語・擬態語辞典』 角川書店
- 岩崎民平他 (1960) 『研究社新英和大辞典』 研究社
- 楠見孝 (1996) 「感情概念と認知モデル構造」 土田昭司・竹村和久編 『感情・行動・認知・生理』 誠信書房 pp.29-54
- 楠見孝, 中本敬子, 子安増生 (2006) 「痛みの比喩表現の身体感覚と認知の構造」 『痛みの認知・表現・推測に関する認知科学的アプローチ』 平成 15 年度～ 17 年度科学研究費補助金成果報告書
- 楠見孝, 米田英嗣 (2007) 「第 3 章感情と言語」 『感情科学の展望』 京都大学学術出版 pp.55-64
- 関口美緒 (2012) 「日本語感覚動詞の特徴—生理的現象から言語表出へのプロセスを考える—」 『言語と交流』 第 15 号 pp.1-13 言語と交流研究会 凡人社
- 関口美緒 (2013.a) 「心理動詞のアスペクト—局面指示体系による分析—」 『大学院論文集』 第 10 号 pp.1-19 杏林大学大学院国際協力研究科
- 関口美緒 (2013.b) 「生理的限界点・閾値と局面変化完了認知基『タ』の関係」 『言語と交流』 第 16 号 pp.95-108 言語と交流研究会 凡人社
- 中島文雄 (1970) 『岩波英和大辞典』 岩波書店
- 八木昭宏 (2008) 『現代心理学シリーズ 6 知覚と認知』 培風社
- 飛田良文, 浅田秀子 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典』 東京堂出版
- 法研 (2010) 『六訂版 家庭医学大全科』
- 田守育啓, ローレンス・スコウラップ (2001) 『オノマトペ—形態と意味—』 くろしお出版
- 山口仲美 (2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』 講談社
- 吉永尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』 和泉書院
- Shogakukan (1994) *New Random House English-Japanese Dictionary Second Edition*
- Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax* : Cambridge, Mass : MIT Press
- Pustejovsky, James (1993) *Semantics and the Lexicon* Kluwer Academic Publishers pp.52-72
- Voorst, Van Jan (1992) *The Aspectual Semantic of Psychological Verbs: Linguistics and Philosophy 15* pp65-92, Kluwer Academic Publishers
- http://www.oralstudio.net/stepup/jisho/sakuin/E382BD/04774_12.php 基礎歯科生理学 医歯薬出版株式会社 (Copyright(c)2007-2012 DentalArrow,Inc Allrights

Reserved

www.oit.ac.jp/bme/~akazawa/bitext/S4-1.pdf (第4章受容器と感覚情報／大阪工業
大学 2013.10.15 確認)

www.rm.mce.uec.ac.jp/sice/2006HapticsCommitteePPt.pdf (下条誠、触覚の整理・心
理学の基礎／電気通信大学 2007)

理由を求める疑問副詞の用法

—日本語の小説に見られる表現—

嶋 崎 雄 輔

要 旨

疑問副詞（どうして・なぜ・なんで）は、理由・原因（一部、「方法」）の疑問を表示することに加え、おどろきや不満を示すことなどが辞書にも記載されているが、どのような要因でその機能がなりたつのか、詳しく論じられてはいない。本稿では、会話参加者間には「共通認識」と仮定する何らかの判断基準が存在し、受け手がそれに違反した場合、「疑問副詞」を使用することで違反したことを伝えており、それが「不満の表明」などを示す要因になりうると述べた。時にはそれがコミュニケーションにおいて、相手にマイナスな印象を与えてしまい、不適切と判断されてしまう場合がある。さらには送り手自身の評価を下げる原因にもなるという考えを提示した。

1. はじめに

日本語の理由・原因・方法についての疑問を表すとされる疑問副詞（どうして・なんで・なぜ）には、そのようなプロトタイプの意味以外に、「不満の表明」などの心的態度を示す機能があるということが、辞書にも記載されている。

作例：（飲み会の約束を突然キャンセルした人に向かって）

「なんで行けないんだ」

しかしながら、そのような心的態度が付随する要因について論じた研究は管見の限り見当たらない。本稿は疑問副詞（どうして・なぜ・なんで）の使用状況について、小説の会話文に見られる用法を調査し、その特徴を、「疑問の対象が全く不明である場合」「ある程度予測可能な場合（もしくは知っている場合）」と分類する。次に、調査した実例について説明を加える。さらに、心的態度が付随する要因の観点から考察し、「共通認識への違反」という考えを提示する。それによって、疑問副詞の使用が不適切だ

とされる場合を考えるものである。

2. 先行研究と研究課題

2.1 辞書等の記述

まず、辞書と類義語辞典における疑問副詞の使い分けに関して、その記述をみる。『日本国語大辞典』の記述と、類義語辞典¹の内容をあわせ、要約し、記載する。

「なぜ」

理由・不明な事柄について問題を出す・問題を出して説明する・不審に思うといった使い方があがる。原因、理由が話し手の力の及ばないところにあることが多く、自然に起こる気分にも用いられる。

「どうして」

「なぜ」とほとんど同義のややくだけた言い方であり、「どのような方法で」「どうやって」の意味にも用いられる。客観的な原因、理由を考えている。自然に起こる気分するときには使わないことが多い。的外れに驚く気持ちを表す。「なぜ」と比べ、ややくだけた口語的表現になり、どういうわけなのか本当に分からない・判断に苦しむといったニュアンスが濃くなる。感嘆詞としても用いられる。

「なんで」

「なぜ」とほとんど同義。「なぜ」と比べて、相手を叱責したり詰問したりする気持ちを強く表すように思われる。反語に用いて、強く否定する気持ちを表す。話し言葉として用いられる、俗語的表現。

上記のように、これら三語は「理由・原因（「なぜ」以外は「方法」も）についての疑問である点では共通しており、「ほとんど同義」とも言える。「どうして」や「なんで」はそれ以外に、判断に苦しむ・叱責したり詰問したりする機能も表されることが示されている²。

2.2 疑問文（疑い）について

2.1 では、疑問副詞の単語としての辞書的意味を見た。ここでは日本語のモダリティとの関連で「疑問文」とされる説明を見る。

仁田ほか（2000）による「疑い」の説明では、「疑いとは、話し手が、自らの認識、判定作用によって命題内容を成立させようとするのではあるが、情報が不確かであっ

¹ 参考文献参照。

² 実例を観察したところ、辞典記載の説明が現状に即しているかは疑問があるが、今回は追究しない。

たり、かけていたりして、最終的にはその成立を断念する、という事態に対する認識的な捉え方を表したものである」とし、その表現として「カナ」「カシラ」「ダロウカ」「カ」「マイカ」を挙げている³。また、疑問文について、「疑問文においては、述べられている内容に矛盾対立する内容は否定されず、そのいずれかが真になるという関係で並立しているのである」と述べられている⁴。今井（2001）では、関連性理論の立場から疑問文を見ると、様々な疑問文を一つの定義で表せるとしている⁵。しかしながら、なぜ「疑問副詞」を含む文が、「不満の表明」となりうるのか⁶については、特別説明されているわけではない。

3. 研究対象と研究方法

本稿で取り扱う疑問副詞は、理由・原因（一部、方法）などの疑問を表すとされる「どうして」「なぜ」「なんで」である。分析に使用する例文は、日本語で書かれた小説7冊（参考文献参照）から、疑問副詞を含む文と、その前後数行を取り出したものである。疑問副詞を話すほうを「送り手」、それを聞くほうを「受け手」とする。送り手の外界で生起した事象と、受け手が送り手に応じた発話をあわせて「事象」とする。

4. 調査結果

日本語で書かれた小説7冊（参考文献参照）から、疑問副詞（どうして・なぜ・なんで）を含む会話文⁷を取り出すと、合計153であった。このうち、「どうして」が80、「なんで」が54、「なぜ」が19であった。現代の小説の会話文では、「なぜ」が圧倒的に少ないことがわかる。（図1）

³ 仁田ほか（2000）p.156

⁴ 仁田ほか（2000）p.50

⁵ 関連性理論の立場から言う疑問文とは「話し手が、（誰かにとって）関連性がある答え（考え）を希求的かつ潜在的であると見なしている旨を示したもの」と規定している。

⁶ 語用論的な解釈ではどんな表現でも「不満の表明」になりうるが、疑問副詞はひとつの機能として辞書にも記載される形になっている。

⁷ 本稿で言う会話文とは、小説の表記において、対話（電話を含む）、もしくは独話で、カギカッコで示されたものである。

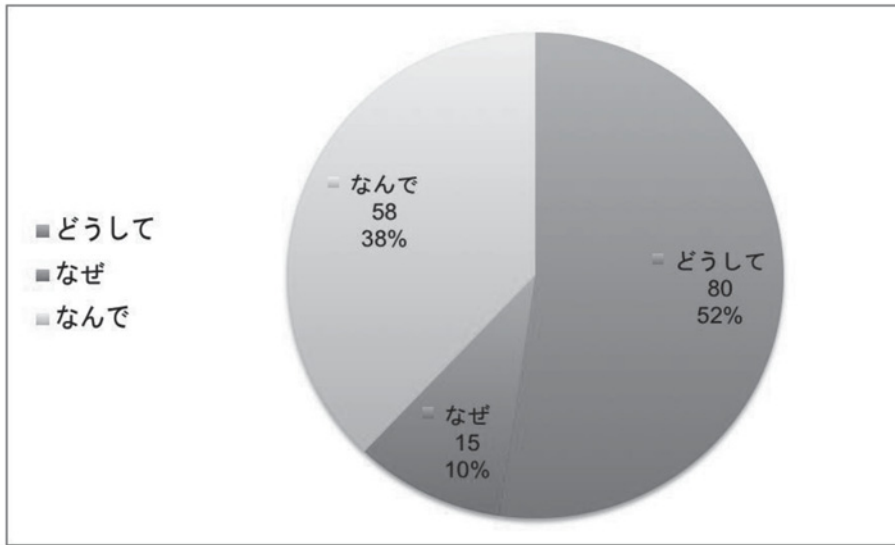


図 1

全体として、「どうして？」のように単体で用いられる場合が45、「どうしてなの？」「どうして別れたの？」など、「の」「のだ」を伴う場合が73と、比較的多い。辞書表記における「方法についての疑問」については、「どうして」「なんで」においてわずかに観察された⁸が、本稿では分析対象としない。

5. 分析

本稿で扱った三語は、筆者の内省において入れ替えが可能であり、その理由・原因の疑問という意味の違いは小さいと考え、三語を一つの「疑問副詞」として、まとめて取り扱った。また、単体使用の場合（「どうして？」など）と「のだ」などの文要素を含む場合の違いなどについては触れていない。しかしながら、今後はそれらの違いについても更に分類、分析するなど、検討が必要である。

5.1 疑問副詞が使用される状況

取り出した例文を観察すると、送り手が疑問副詞を発するきっかけ（疑問の対象）となるものには、以下のような特徴があるように思われる。①は、プロトタイプの意味で、疑問副詞を使用して「不明である」物事を表現している。②は、ある物事が「不明」ではなく、知っている、あるいはある程度の予測が可能でありながらも、疑問副詞を用いている。

⁸「どうして」が6、「なんで」が1。筆者の内省において、「どうやって」に置き換えて自然だと判断したもの。

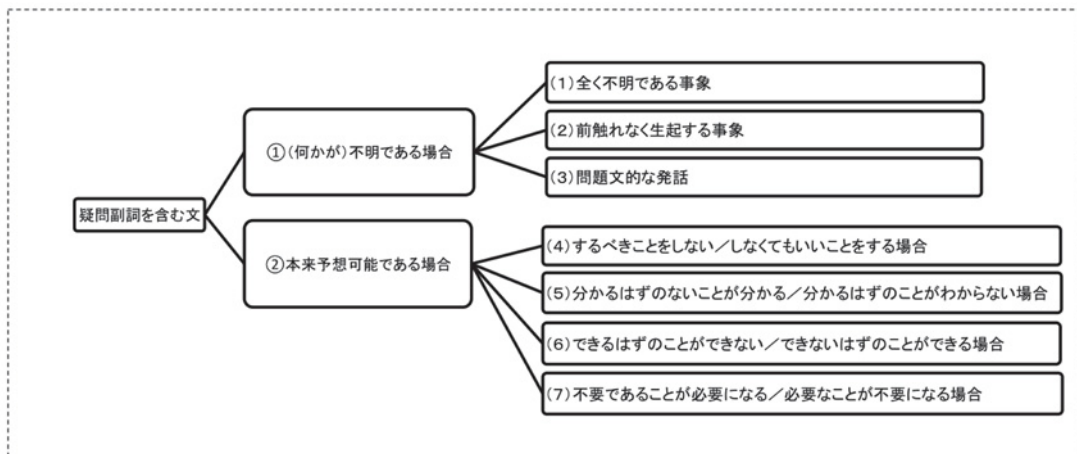


図2：実例から見る疑問副詞文の分類

本稿では、疑問副詞を用いた場合、図2を破線で囲むように、発話すべてを、2.1で述べた疑問文（疑い）の特徴である「命題を決定する要素が欠けている・不安定・いわゆる辞書的な『疑い』などの要素」が包み込んでいる状態であると考え。すべての要素に対して、分類項が1対1に対応しているわけではなく、重なりあう部分もある。この分類項をより適切なものにするのは今後の課題である。次に、(1)～(7)について、実例に基づき、説明を加える⁹。

5.2 実例の扱い

ここでは地の文は省略し、図2の分類に基づき、(1)～(7)に対応する実例を記載する。さらに、それぞれの例文について説明を加える。発話者をA、Bで表し、対象の疑問副詞に下線を表示する。

5.2.1 (何かが) 不明である場合

(1) 全く不明である事象

A「最近、どうしておかずが増えてんだ？」

B「糖尿病になってくれないかな、って思って」

(GO 1)

この会話がなされる場面において、送り手は、「おかずが増えている理由」について想像するすべもなく、情報が足りないために、それを補おうとしている。情報を求めているタイプの疑問文である。

⁹「小説の内容についての考察」ではないので、小説内の世界やキャラクター設定その他の要素はできるだけ排除して考える。ただし、会話文を解釈するのに必要な場合は、この限りでない。

(2) 前触れなく生起する事象

A「なあ、おまえんち、犬飼ってない？」

B「え？ なんで？」

A「なんか——、ケモノくさいから」

B「——！」

B「——飼ってないよ」

(おおかみ 9)

Bは、この会話（とそれ以前の状況）から、Aが「Bが犬を飼っている」というような想定をすとは思ってもいあかったと考えられる。突然疑問を投げかけられたために、はじめに「え？」と反応している。

(3) 問題文的な発話

A「急に呼んですまなかった。先日のレポートについて話しておきたいことがあってね」

B「何でしょうか」眼鏡をかけた学生は直立不動になった。

A「君のレポートはなかなかよく書けていた。ただ、ひとつだけ確認しておきたいことがある。君はあれを物性論で語っていたが、どうしてかな」

B「だって、物性論の試験だったから……」

(容疑者 X 28)

Aは教師であり、学生の指導のために、Bに質問を投げかける。Aはみずからがもつ有用な情報を提供するためにBの反応を伺う。Aは「理由」よりも、「Bは答える意思があるのかどうか」ということに重点を置く疑問文であり、不十分である情報を補おうとする意図はないように思われる。

5.2.2 本来予測可能である場合

(4) 本来すべきことをしない／しなくてもいいことをする場合

(BがAに仕事を手伝ってもらい、お礼を言ったあとで)

A「気に入らない」

B「え？」

A「どうしてそういつもヘラヘラ笑っている」

B「クククククク……！」

A「笑うな」

B「アハハハハハハ……！」

(おおかみ 6)

受け手の反応が、送り手が「こうであるべきだ」と感じるものでなかった場合に用いられている。送り手は不快感を抱いていると感じられる。また、この例では年長者(男性)が若い女性に向けて発している。その他の例では、親しい仲にある女性から男性に向けて発せられたものが多々ある。

(5) 分かるはずのないことが分かる¹⁰ 場合

A 「唯高の鈴木くんでしょ？」

B 「え!？」

B 「なんで……？」

(ウォーター 5)

Bは、Aが(本来知らないはずの)Bの名前を呼んだことに反応して発話する。このように、名前や秘密の事柄について明言され、その反応として疑問副詞を用いるケースが見られた。(2)と同様に、「え!？」のように反応していることから、「おどろき」という意味では重なる部分も大きいだろう。なお、この例文のように、必ずしも「マイナスイメージ」としての「疑い」となるとは限らない。

(6) 本来できるはずのことができない／できないはずのことが出来る場合

(Aは電話で話す親族、Bはそのことを親族から伝えられた女性の反応である。AとBが直接話しているわけではない)

A 『ええっ!？ 参ったな、とにかく陣内の家の人には、明日には必ず行きますからと伝えといてくれ。—あっ、ああ、なんでもない。早く管理ソフトのバックアップを』

B 「ええっ、帰れない？ なんで?」掃除機を引き連れた典子が、居間に現れた。

(サマー 10)

例のとおり、(自分、もしくは相手が)本来できるはずのことが不可能となった場合、それについて発している。「予想外」という点では(5)に同じであるが、「可能・不可能」という点で、それと分けて考えた。

(7) 本来不要であることが必要になる／必要なことが不要になる場合

A 「ちょっと小耳に挟んだんだけどな」

B 「どうせロクでもないことをでしょ」

A 「付き合う男全部振ったって本当か？」

B 「何であんたにそんなこと言われなくちゃならないのよ」

(ハルヒ 1)

¹⁰「驚き」となる場合が多いように思われる。

この例では、送り手Bにとって不要であったはずの話をされた、という状況が表現されている。そしてこの場合、送り手にとっては若干の不快感を抱く内容であるように思われる。

5.3 実例の分析結果

本稿では、送り手が上述のような事象に直面した場合、その事象に対し、なんらかの判断を下す基準があると仮定する。ある事象が生起したとき、その事象が自身の基準と照らし合わせ、妥当であるかどうかを送り手は判断する。その基準は、送り手の経験的知識であり、使用されている言語コードについての知識、各人の信念、願望、嗜好など、あらゆることがらを含む¹¹。図2の分類(4)(5)(6)(7)は、本来予想される結果が、予想に反する結果になった場合であると言える。

本稿では、この基準を「共通認識」とし、以下のように定義する。

「共通認識」¹²

- 生起した事象を理解するための材料であり、その事象の妥当性を判断する基準
- 送り手は、受け手（または自身の外側の世界）も、その基準を満足させる範囲で動くと信じている基準
- 送り手個人の経験的知識であり、そこには送り手の信念・願望・嗜好なども含まれる

ある事象についての妥当性を評価する基準が存在すると仮定すると、疑問副詞は、ある事象が会話参加者間（もしくは会話参加者が会話を繰り返す場）にとって妥当性に欠けるということを表明するマーカーであると言えるのではないだろうか。分類(1)(2)(3)の場合、「共通認識」の中では、「送り手に欠けている部分がある」ということになるだろう。そのため、送り手から受け手に「質問」としてストレートに届く可能性が高い。送り手、受け手の間には、「質問されて当然」または「質問するに値する理由が存在する」などの認識が存在すると考えられる。分類(4)(5)(6)(7)は、いずれも（送り手にとっての）「共通認識」では「生起すると予想される」ことが、実際には予想した結果になっていないことを、「妥当性に欠ける」として受け手に表明するものと考えられる¹³。また、場合によっては、「相手の依頼（指示）を断る」という表現にもなりうる¹⁴。

¹¹ これは送り手個人に属する知識であるが、その送り手は、（全ての人が同じ思考をもつことは当然ありえないと知っていながらも）受け手も同じように考えているだろうという希望を抱く。

¹² 「フレーム」や「スキーマ」、「文化的知識」など、いろいろな形で「送り手の経験的知識」は表現されている。本稿で示す「共通認識」も、その一部に入るだろう。

¹³ 図2の分類とその説明で示したように、疑問副詞の基本的な意味である「ある要素（理由など）が不明であること」や「疑いがあること」などの要素は意識されるだろう。

¹⁴ 断る場合、あえて疑問副詞を使用することが「遠回しに配慮している」のかどうかは、より詳しく検討しなければならない点である。

疑問副詞には大きな意味として「命題を決定できる要素が欠けている」「不安定である」などの意味があると考えられ（先行研究の記載による「疑い」の意味）、「妥当性に欠けることを示す」機能が存在しているのではないかと考えられる。図2の①、②を「共通認識」の考え方で書きなおすと以下のようなになる。（それぞれI、IIとする）

疑問副詞を含む文は、事象が共通認識により妥当性に欠けると判定されることを表明する

- I. 送り手のもつ共通認識が妥当性に欠けると判断（所持している情報が不完全）
例 i) A「どうして休んだのですか」 B「風邪だったので」（作例）
- II. 受け手のもつ共通認識が妥当性に欠けると判断（想定していない事象が生起）
例 ii) A「どうして笑っているんだ」 B「*面白いからです」（作例）

6. 「違反の表明」のフェイス脅かし行為

疑問副詞が、ある事象において、送り手の「共通認識」への違反を表明する機能、または疑問文として受け手に「発話をうながす」機能を持つと仮定すると、それは受け手のフェイスを脅かす行為につながる可能性がある。山岡（2010）では、フェイス脅かし行為は、「消極的フェイスを脅かす行為」「積極的フェイスを脅かす行為」として説明されている。また、山岡（2012）では「疑問」を「相手あるいは対象のなかにある種の不完全状態があることを認め、それに対して否定的評価づけを行うもの」として、「否定的評価の付与」と呼んでいる¹⁵。

6.1 疑問副詞のフェイス脅かし行為

疑問副詞の発話が受け手への否定的評価として考えられ、送り手は（その状況においては）上位の立場として自らの考えを主張するように思われる。再び（4）の例を示す。

(4)

(BがAに仕事を手伝ってもらい、笑顔でお礼を言ったあとで)

A「気に入らない」

B「え？」

A「どうしてそういつもヘラヘラ笑っている」

B「クククククク……！」

A「笑うな」

B「アハハハハハハ……！」

(おおかみ 6)

¹⁵ 本稿の考え方によれば、この「不完全状態」というのが「共通認識への違反」と考えられる。

送り手は「感謝する場面では笑うべきではない」などの「共通認識」を持っているが、それに反し受け手が笑ったことで、みずからの「共通認識」に合わせるように、命令的に疑問副詞を用いていると考えられる。Bの笑いを「ヘラヘラ」と否定的に表現していることから、AがBの行動に不快感を抱いているのは明らかであるだろう。これは直接的な批判であり、積極的フェイスを脅かす行為（受け手に批判的な評価を示す行為）に当たるのではないのだろうか。

また、不満の表明や叱責などを表現するだけであれば、(4)の例で言えば、はじめから「笑うな」と言えば送り手の本来の意図は達成されるはずであるが、あえてそれ以上に複雑な解釈のコストをかけさせていることから、さらに別の意図を示している。また、疑問副詞を用いることで、受け手に発話を促すことにつながるだろう。次に、別の例を(4-2)として示す。

(4-2)

(ファンタジーの話。大人になるために手術を受けないといけない国の話。子供が「手術を受けない」と言ったあとの発話。便宜上、子供をAとする)

A「(手術を受けない)」

B「なんでいきなりそんなことを言い出す？誰がお前にそんな非人間的な考えを吹き込んだ？」

(キノ 11)

送り手Bは「手術をするのが当然であり、しないことは『非人間的』である」という「共通認識」を持っているが、子供がそれに反する言動をしたことで、強く叱責し、考えを変えることを要求するように、疑問副詞を用いていると考えられる。

受け手にとって答えるのが難しい話題、もしくはそもそも答えられないことがらについて発した場合、消極的フェイスを脅かす行為（受け手に何かをさせようとする行為）に当たる可能性がある。

疑問副詞を用いた発話は、時に上述のように、単純な疑問の表明や質問という用法を超え、受け手に対して強く働きかける、場合によっては不適切な使用となってしまう場合がある。これは、送り手がそれを意図していない場合、受け手に対してマイナスな評価を与えることにつながるだろう。それによって、送り手自信の評価や、受け手との関係にマイナスな影響を与える危険性があると考えられる。

7. まとめ

本稿では、日本語の小説に登場する疑問副詞がどのような状況で発せられるか、その一部を考察した。会話参加者間には、その場の事象の妥当性を判断するための「共通認識」と仮定する判断基準が存在し、それに違反する事象が起こった場合、疑問副

詞を用いて、その違反を受け手に伝える。それにより、受け手のフェイスを侵害する行為となりうることを提示した。

本来、疑問を抱くこと自体が、「共通認識」に対する違反を示していると考えられる。本稿は、正常な会話は、会話参加者間の「違反」を可能な限り生じさせないような言語行動によって実現するという考えを前提としている。

疑問副詞が用いられている文の分類など、まだまだ検討の余地があるが、「送り手が受け手に何らかの違反に気づかせる意図をもっている」ことが、疑問副詞の心的態度表明という機能の一部を担っているのではないかと考える。

今後、例文を増やし、より洗練された分類方法で考察を行っていかねばならない。さらに三語の使い分けや、その他の文要素を含む表現についても考察を加える必要がある。また、他言語についても比較してみたい。

8. 参考文献

- (1) Grice, P.H. 1975 “Logic and Conversation”, Cole P. and J. Morgan (eds.) 1975, *Speech acts. (Syntax and Semantics 3)*, 41-58. New York, Academic Press.
- (2) 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』大修館書店
- (3) 岡本真一郎 (2006) 「話し手の意図を伝えること—伝達過程の心理学的研究を中心に—」『日本語学』第25巻第4号：6-1, 明治書院
- (4) 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型 (1) —対話資料による研究—』国立国語研究所報告 18
- (5) ジョン・ガンパーズ (井上逸兵ほか訳) (2004) 『認知と相互行為の社会言語学ディスコース・ストラテジー』松柏社
- (6) 泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』くろしお出版
- (7) 田窪行則・西山佑司・三藤博・亀山恵・片桐恭弘 (1999) 『談話と文脈』(岩波講座言語の科学7) 岩波書店
- (8) ジェニー・トマス (浅羽亮一監、田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳) (1998) 『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』研究社
- (9) 仁田義雄 (2009) 『日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房
- (10) 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『モダリティ』岩波書店
- (11) 橋内武 (1999) 『ディスコース 談話の織りなす世界』くろしお出版
- (12) 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版
- (13) 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現』明治書院
- (14) 山岡政紀 (2012) 「いわゆる疑問表現のコミュニケーション上の二面性をめぐって」『日本語コミュニケーション研究論集』第2号：69-78, 日本語コミュニケーション研究会

参考辞書・辞典

- (1) 小学館辞典編集部（編）（1994）『使い方の分かる類語例解辞典』小学館 p.226
- (2) 田忠魁・泉原省二・金相順（1998）『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する類義語使い分け辞典』研究社 pp.367-568
- (3) 日本国語大辞典第二版編集委員会（編）（2001）『日本国語大辞典第二版』（第九巻、第十巻）小学館
- (4) 藤原与一・磯貝英夫・室山敏昭（編）（1985）『表現類語辞典』東京堂出版 p.691

例文出典（出版年順）

- (1) 金城一紀（2000）『GO』講談社
- (2) 時雨沢恵一（2000）『キノの旅 -the Beautiful World』電撃文庫
- (3) 矢口史靖（2001）『ウォーターボーイズ』角川文庫
- (4) 谷川流（2003）『涼宮ハルヒの憂鬱』角川スニーカー文庫
- (5) 東野圭吾（2005）『容疑者 X の献身』文藝春秋
- (6) 岩井恭平（2009）『サマーウォーズ』角川文庫
- (7) 細田守（2012）『おおかみこどもの雨と雪』角川文庫

略号

「GO」 — 『GO』

「キノ」 — 『キノの旅 -the Beautiful World』

「ウォーター」 — 『ウォーターボーイズ』

「ハルヒ」 — 『涼宮ハルヒの憂鬱』

「容疑者 X」 — 『容疑者 X の献身』

「サマー」 — 『サマーウォーズ』

「おおかみ」 — 『おおかみこどもの雨と雪』

時の指示詞としての「この・その・あの」の研究

董 昭君

要 旨

本稿は、時間を示す指示詞としての「この・その・あの」について、時制の視点から、その分析と分類を行った。絶対時制と相対時制の考えを取り入れて、時間を示す指示詞を〔3-1〕時制がある場合と〔3-2〕時制がない場合に分け、更に〔3-1〕時制がある場合を、1) 絶対時制と、2) 相対時制に分けた。〔3-2〕時制がない場合を、3) 超時的なもの、4) その他に分けた。さらに、収集したデータを、時制の観点から分析して考察し、「このとき・そのとき・あのとき」の使用領域及び「コ・ソ・ア」の用法や区別などを明らかにした。その結果を踏まえて、時の指示詞としての「この・その・あの」の用法と使い分けのモデルを作成した（(図-1、図-2を参照)。

キーワード：指示詞、時制・テンス、時間

0. 研究目的

このような文がある。¹

父は、旅行先で事故にあって、生死の境をさまよった。このとき（そのとき・あのとき）、私はまだ12歳だった。

この文では主文は過去であるが、「このとき・そのとき・あのとき」は指示詞が異なっても、三つとも使える。「とき」を修飾する場合の「コノ・ソノ・アノ」の使用上の区別はどのようなものなのだろうか。「このとき・そのとき・あのとき」の使用領域及び「コ・ソ・ア」の用法や区別などを明らかにしたい。

1. 先行研究

1-1. 指示詞に関する先行研

1-1-1. 阪田（1971）の研究

¹ この例は、作例である。時制の視点から見ると、この例は、時制があるものに属しており、主文は、過去となっている。

指示詞の標準的な捉え方として阪田（1971<1992：66-67）をあげておく。特に時間に関わるものとして下記（1）のハに注目したい。

- (1) 話し手自身を中心として考え、話し手自身の領域の中にあるものと外にあるものに分ける。即ち話し手は空間的・心理的に身近なものは自己の領域内のものと認め、コ系で指示し、自己の領域外のものとして認められたものをソ系で指示する。

イ. 現場指示

話し手と相手が向かい合っている場合に、話し手の領域外のものとして認められたものは、即ち相手により近いものであり、結果的には、佐久間説（※1）の「なのなわばり」に属するものとなる。

ロ. 文脈指示

- a. 対話 話し手は自分の発言内容は自分の領域内のものとして、コ系で指示し、相手の発言内容は自分の領域外のものとして、ソ系で指示する。
- b. 文章 話し手は先行の叙述内容を主体的にとらえた場合には、自分の領域内のものとしてコ系で指示し、客観的にとらえた場合には、自分の領域外のものとしてソ系で指示する。

a、bを通じて、後行の叙述内容を指示する場合は、未発表のものであるから、話し手は自己の領域内に属するものとしてコ系で指示する。

- ハ. 指示されるものが外に表れておらず、話し手の意識の中にある場合の指示 多く過去を思い出して語るような場合に用いられ、事態を客観的に眺めるという立場に立つというよりは、思い出を懐かしむ感情、あるいは逆に忘れがたい忌まわしい思い出として主観の色合いを重加するところにその特徴がある。その結果、客観的な時間としては隔たりのあるものとして、コ系ではなくア系が用いられる。

- (2) 話し手は聞き手を自分の領域内に包み込んで、「われわれ」というひとつの領域をつくり、その領域内に属すると認められたものをコ系で指示し、領域外のものであると認められたものをソ系、あるいはア系で指示する。

イ. 現場指示

話し手は「われわれ」の領域内にあるものをコ系で指示する（「あなたのこの洋服」「ここはどこ？」）。また、「われわれ」の領域のもので、比較的近いものをソ系で指示し（「すぐそこです」「その左から二番目の」）、遠く離れたものをア系で指示する（「比叡山があのようにはっきりと」）。

ロ. 文脈指示

話し手の発言が共通の話題となった場合に、両者は共にソ系で指示するの

が普通であるが、それを主体的な意識で「われわれ」の身近なものとしてとらえる場合にはコ系が使われることがある。また、特にその話題が両者の共通の知識である場合にはア系が用いられる。

1-1-2. 久野（1973）の研究

また、久野（1973）では、特にコ系列の記述に注目したい。

- ・コ一列も、目に見えないものを指すのに用いられる場合があるが、これはあたかも、その事物が眼前にあるかのように、生き生きと叙述する時に用いられるようで、依然として、眼前指示代名詞の色彩が強いようである。しかも、「話し手だけがその指示対象をよく知っている場合にしか用いられない。」(pp.188-189)
- ・ソ一列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。(p.185)
- ・ア一列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合のみに用いられる。(p.185)

1-1-3. 吉本（1992）

吉本は時との関係を次のように論じている。

話し手・聞き手の双方に知られていると想定される過去の時点は「アノ時」によって指示される。現在は「今」によって指示される。「コノ時」は必ずしも現在点とは一致せず、未来を除く過去および現在の時点を指示しうる。「ソノ時」は過去・未来ともに指示しうる。(p.117)

2. 本稿での研究

2-1. 時制についての先行研究

本稿では町田（1989）の記述に従い、以下のように自制を把握する。

絶対時制は、発話時点をS、事象をEと表示し、「同時」という概念を=で表すことにし、左側にある記号が右側にある記号よりも時間的に先行するというように決めておけば、「現在」はS = E、「過去」はE - S、「未来」は、S - Eと表示することができる。

相対時制は、「過去以前」を表すためには、発話時点よりも前の、別の過去の事象を想定する必要がある。このような、相対時制を定義するための基準となる時点のことを「基準時点」というが、これをRという記号で表せば、「過去以前」はE - R - S、「未来以後」はS - R - Eと表示することができる。同じように「過去以後」と「未

来以前」も、R—E—S、S—E—R と表示できる。

2-2. 指示詞と時制についての本稿の考え方

1) 指示詞に「とき」が付いた「このとき・そのとき・あのとき」は、時制があるものと時制がないものに分けられる。

時制があるものとは、発話時点（場合により、聞き取り時点・読み書き時点となる）が明確に特定できるもので、事態を未来・現在・過去の時間の中で捉えているものである。

時制がないものとは、発話時点（場合により、聞き取り時点・読み書き時点となる）と事態との関係を切り離して、出来事間の時間的關係のみを捉えるものである。（超時的なものもこれに当たる）

2) 指示詞は、文脈の結束性に貢献する²（庵：1994）。時間を示す指示詞の時制を明確にするために、指示詞「コ・ソ・ア」の用いられている部分の前後の文脈を考慮する必要がある³。

² 指示詞は文章に結束性を与える。結束性とは文と文の關係に関するものであるから、時間を示す指示詞の時制を明確にするためには、指示詞「コ・ソ・ア」の指す前後の文脈を把握する必要がある。例を挙げておく。

明日、会議があります。そのとき、会議で使われる資料を用意して持ってきてください。

ここで、「そのとき、会議で使われる資料を用意して持ってきてください。」の「そのとき」は、「明日、会議があります」を指している。「明日、会議があります」がなければ、「そのとき」の時制を分析することができない。つまり、時制の把握のためには「このとき・そのとき・あのとき」の前後の文脈の検討が必要である。

³ 時間を示す「このとき・そのとき・あのとき」の時制を検討する。

本稿の時制を判断する対象は、時間を示す指示詞「このとき・そのとき・あのとき」の時制であって、文の時制ではない。その時間を示す指示詞は、述語の時制との關係において次のようなあり方がある（このことはさらに検討を続ける必要がある）。

- 1) 時名詞が続く文の中に指示詞で表されて、その述語の時制を決める場合
 - a. 明日、会議があります。そのとき、会議で使われる資料を用意して持ってきてください。
- 2) 引用文中の時名詞は（外側の）引用を表す動詞の時制と關係がない。
 - b. 昨日、彼女は、「明日、会議があります。そのとき、会議で使われる資料を用意して持ってきてください。」と言いました。
- 3) 時名詞が、続く文の名詞修飾節において指示詞で表された場合、その被修飾名詞の関わる述語の時制は一致する必要がない。
 - c. 1月東京に行った。あのとき寒かった新宿も今は暖かい。
- 4) 条件文の中に時名詞があるとき、帰結節に続く別の文において指示詞で表されると、それは異なる時である場合がある。
 - d₁. 明日、雨が降ったら、一人で行きます。そのとき、私は新しいシャツを着て行きます。（そのとき=明日）
 - d₂. 明日、雨が降ったら、明後日友達と行きます。そのとき、私は新しいシャツを着て行きます。（そのとき=明後日≠明日）

2-3. 研究方法

電子版朝日新聞から、「このとき・そのとき・あのとき」のデータを収集して時制を分析する。データは、2011年3月24日から2012年3月23日まで収集した。

2-4. データの分類

データはこのように分類して分析する。

時間を示す指示詞	{	[3-1] 時制がある場合	{	1) 絶対時制 [3-1. (B)(D)(E)(F)]
			}	2) 相対時制 [3-1. (A)(C)]
	{	[3-2] 時制がない場合	{	3) 超時的なもの [3-2-1]
			}	4) その他 [3-2-2]

3. データ集計結果

収集したデータの中に「このとき」は、255例、「そのとき」は、454例、「あのとき」は、126例あった。合計は、835例であった。

表-1 「このとき・そのとき・あのとき」の分布

指示詞	時制がある場合 [3-1]			時制がない場合 [3-2]		総計
	過去	現在	未来	超時的なもの	その他	
このとき	211	10	15	19	0	255
そのとき	306	0	108	35	5	454
あのとき	126	0	0	0	0	126
合計	643	10	123	54	5	835
	776			59		

先行研究に基づいて予測すれば、「コ系」は、近称であり、現在に使われ、「ソ系」は、中称であり、未来・過去で使われ、「ア系」は、遠称であり、更に、遠い過去・未来に使われるであろうということになる。しかし、表-1に示すように、「コ系」は現在よりは過去・未来で使われている。「ソ系」は、予想と一致している。「ア系」は、未来には使わず、過去にしか使われていない。このような結果になった。また、吉本(1992)では「コ系」は過去及び現在の時点を指しうると述べているが、今回の調査で明らかになったのは、「コ系」で未来を指す例がかなり(15例)あることである。

本稿は、相対時制の視点も取り入れて、データを再分類する必要があるものとする。

3-1. 時制がある場合のデータの分布

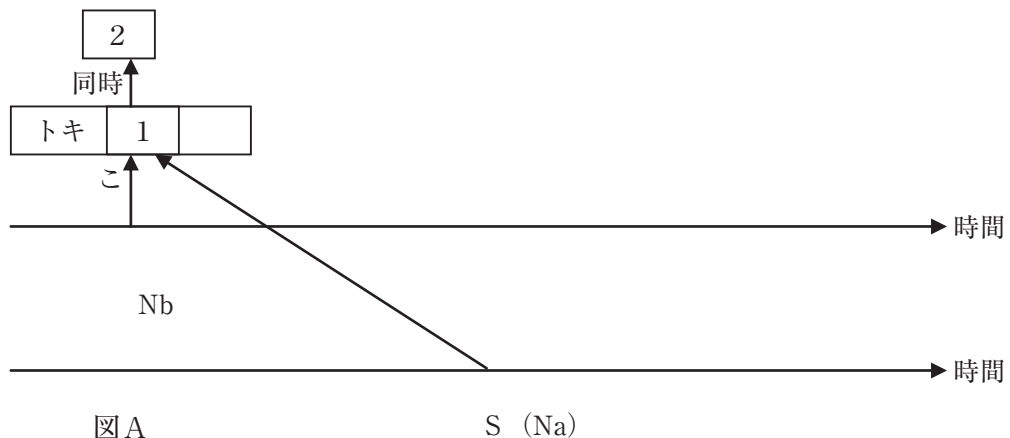
まず時制がある場合について分析する。表中の (A) (B) (C) (D) (E) (F) は、以下において記述する記号になっている。なお、この表-2は、表-1に絶対テンス相対テンスの区別を加えたものである。

表-2. 「このとき・そのとき・あつとき」の時制の分布

時制の領域	過去		現在		未来	
	相対テンス	絶対テンス	相対テンス	絶対テンス	相対テンス	絶対テンス
このとき	(A) 211	0	0	(B) 10	(C) 15	0
そのとき	0	(D) 306	0	0	0	(E) 108
あつとき	0	(F) 126	0	0	0	0

以下に例を示す。使用される記号については、4の図-1と図-2を参照されたい。

・(A)「このとき」が過去における同時(相対テンス)である場合の例
 なお、カセレスは2009-10シーズンにユヴェントスへレンタル移籍していたが、このときはシーズン後の完全移籍には至らなかった。
 『朝日新聞』 電子版 2012年1月26日「ユヴェントス移籍間近のカセレス、26日にメディカルチェックへ」



注

1. [1] は、「カセレスは2009-10シーズンにユヴェントスへレンタル移籍していた」の出来事である (E1)。

2. [2] は、「シーズン後の完全移籍には至らなかった」の出来事である (E2)。

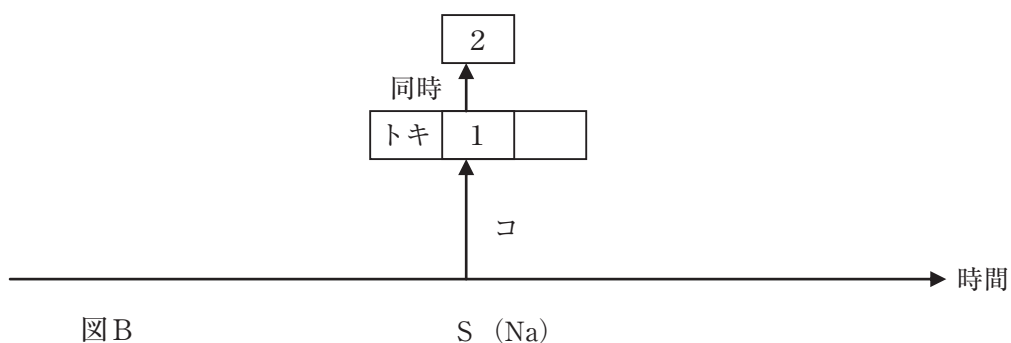
3. 認識基準点 (N) $\left\{ \begin{array}{l} \text{Na 発話時点 (絶対テンシ的) S} \\ \text{Nb 出来事 1 の生起時点 (相対テンシ的)} \end{array} \right.$

発話時点 (S) から出来事 1 の「カセレスは 2009-10 シーズンにユヴェントスヘレンタル移籍していた」を見た (E1-S)。「このとき」が示すのは、出来事 1 の「カセレスは 2009-10 シーズンにユヴェントスヘレンタル移籍していた」とき (Nb とする) である。(Nb) では、出来事 2 としての「シーズン後の完全移籍には至らなかった」の出来事が起きている (Nb = E2)。したがって出来事 1 の時点 (Nb) と出来事 2 の時点は、同時と考えられる。すなわち発話時点 (S) と関わりなく、(Nb) の時点から出来事 2 を「コ」で述べている。これは相対時制の考え方で説明することができる (E2= (Nb) E1-S)。

・ (B) 「このとき」が絶対時制の現在である場合の例

同社がソフトウェア企業として独立し、次なる段階に突入しようとしているこのときに、取締役の一員になれることを光栄に思っています。

『朝日新聞』 電子版 2012 年 03 月 01 日 「ジェネシス・ジャパン株式会社：ジェネシス、新取締役会を発表」



注

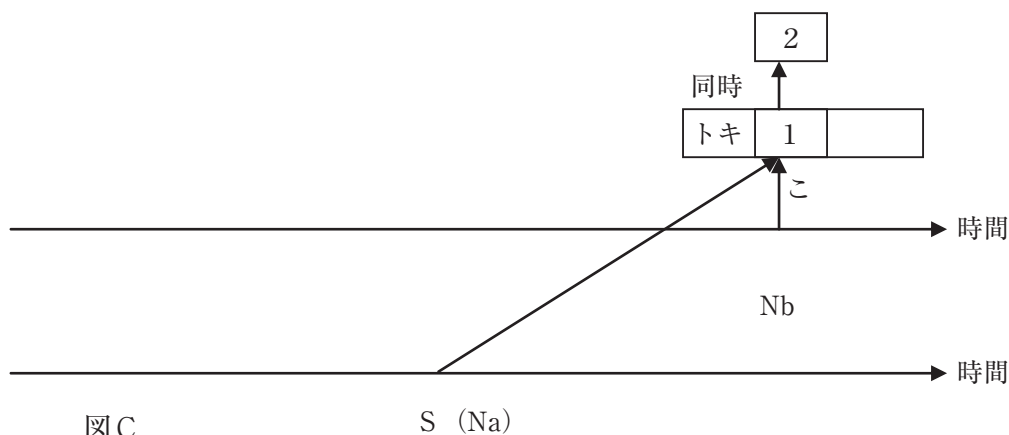
1. [1] は、「次なる段階に突入しようとしている」の出来事である (E1)。

2. [2] は、「取締役の一員になれることを光栄に思っています」の出来事である (E2)。

3. Na 発話時点 (絶対テンシ的) S

発話時点（S）から出来事1の「次なる段階に突入しようとしている」を見ると同時に、出来事2の「取締役の一員になれることを光栄に思っています」を見ている（S = E1/ S = E2）。つまり、出来事1と出来事2は、同時である（E1 = E2）。そして、発話時点（S）と重なって、これを「コ」で表しているの、これは絶対時制の考え方で説明することができる（S = E1/ S = E2 「E1 = E2」）。

・(C)「このとき」が未来における同時（相対時制）である場合の例
 Salt&PepperのブランドロゴマークがプリントされたTシャツが、オープニング特別価格の2,990円にて発売されます。デザイン、価格共にこのときだけの限定商品となります。【オリジナルブランド】
 『朝日新聞』電子版2012年02月24日「2/24（金）新メンズセレクトショップ "Salt&Pepper"（ソルト・アンド・ペッパー）大阪ヨドバシ梅田に第1号店オープン」



- 注
1. [1] は、「Salt&PepperのブランドロゴマークがプリントされたTシャツが、オープニング特別価格の2,990円にて発売されます」の出来事である（E1）。
 2. [2] は、「デザイン、価格共に限定商品となります。」の出来事である（E2）。
 3. 認識基準点（N）

{	Na 発話時点（絶対テンシ的） S
	Nb 出来事1の生起時点（相対テンシ的）

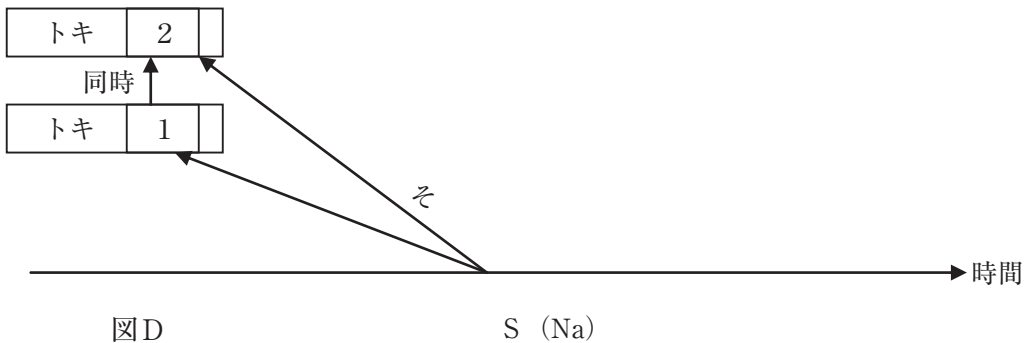
発話時点（S）から出来事1の「Salt&PepperのブランドロゴマークがプリントされたTシャツが、オープニング特別価格の2,990円にて発売されます」を見てい

る (S - E1)。これは未来である。「このとき」が示すのは、出来事 1 の「Salt&Pepper のブランドロゴマークがプリントされた T シャツが、オープニング特別プライスの 2,990 円にて発売されます」のとき (Nb) である。(Nb) のときは、出来事 2 としての「デザイン、プライス共に限定商品となります。」の出来事が起きる (Nb = E2)。したがって出来事 1 の時点 (Nb) と出来事 2 の時点は、同時と考えられる。すなわち発話時点 (S) と関わりなく、(Nb) の時点から出来事 2 を「コ」で述べる。これは相対時制の考え方で説明することができる (S - E1 (Nb) = E2)。

・ (D) 「そのとき」が絶対時制の過去である場合の例

彼らは C・ロナウドを獲得できず、僕に残留を求めてきたけど、僕はそのときにもう出ていくと決断していた。

『朝日新聞』 電子版 2012 年 03 月 24 日 「ロビーニョ：「ネイマールはブラジルを去るべき」」



注

1. 1 は、「彼らは C・ロナウドを獲得できず、僕に残留を求めてきた」に表わされる出来事である (E1)。
2. 2 は、「もう出ていくと決断していた」に表わされる出来事である (E2)。
3. Na 発話時点 (絶対テンズの) S

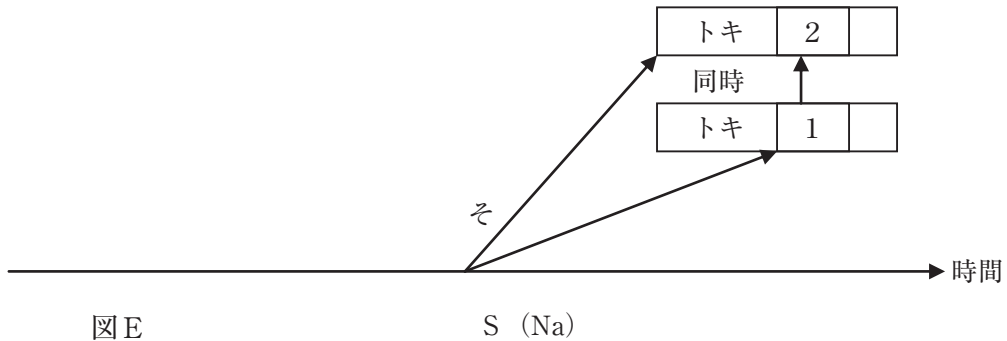
発話時点 (S) から、出来事 E1 「彼らは C・ロナウドを獲得できず、僕に残留を求めてきた」の出来事を見ている (E1—S)。また、発話時点 (S) から、出来事 E2 「もう出ていくと決断していた」の出来事を見ている (E2—S)。出来事 E1 の発生時を「このとき」ではなく、「そのとき」で表現している。すなわち、出来事 E1 と出来事 E2 を発話時点 (S) から見ている。これは絶対時制の考え方で説明するこ

とができる (E1—S、E2—S「E1=E2」)。

・(E)「そのとき」が絶対時制の未来である場合の例

私は、来年35歳になり、キャリアの終わりが近づいていると言っただけだ。続けるかどうか、まだ分からない。そのときに決断するよ。

『朝日新聞』電子版2011年09月07日「ファン・ボメル、EURO後の代表引退を否定」



注

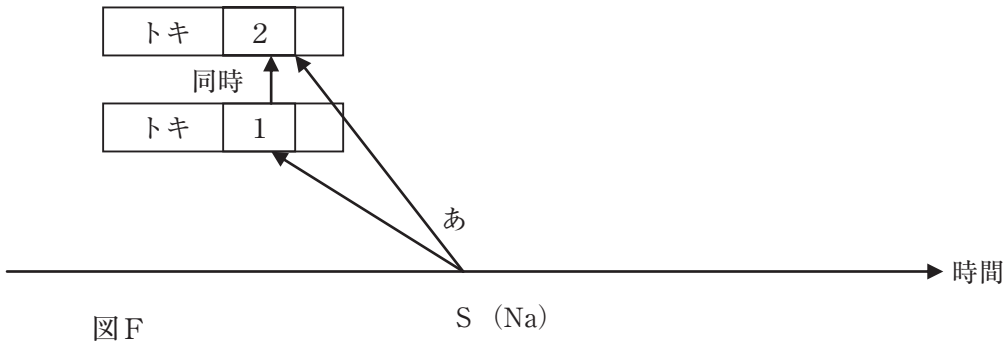
1. [1] は、「続けるかどうか、まだ分からない。」の出来事である (E1)。
2. [2] は、「決断するよ」の出来事である (E2)。
3. Na 発話時点 (絶対テンズの) S

この例文では「そのとき」が示すE1にあたるものは「来年35歳になる」ことである (S—E1)。また、発話時点 (S) から、出来事E2「決断するよ」の出来事を見ている (S—E2)。「そのとき」が示すのは、出来事E1と出来事E2の発生時点が同時であることである (E1=E2)。出来事E1と出来事E2を発話時点 (S) から見て述べている。これは絶対時制の考え方で説明することができる (S—E1、S—E2「E1=E2」)。

・(F)「あのとき」が絶対時制の過去である場合の例

嫁さんにも謝って許してもらいました。あのときは3日で5キロやせました。

『朝日新聞』電子版2011年09月13日「ワッキー不倫騒動であわやCM降板!？」



注

1. 1 は、「嫁さんにも謝って許してもらいました」の出来事である (E1)。
2. 2 は、「3日で5キロやせました」の出来事である (E2)。
3. Na 発話時点 (絶対テンス的) S

発話時点 (S) から、出来事 E1 「嫁さんにも謝って許してもらいました」の出来事を見ている (E1—S)。また、発話時点 (S) から、出来事 E2 「3日で5キロやせました」の出来事を見ている (E2—S)。出来事 E1 と出来事 E2 の発生時点は同時である (E1=E2)。すなわち、出来事 E1 と出来事 E2 を発話時点 (S) から見ている。これは絶対時制の考え方で説明することができる (E1—S、E2—S 「E1=E2」)。

以上、時制がある場合のデータの例を1つひとつ説明した。「ア系」が何故「未来」を示せないのかについて考察することが今後の課題となっている。

3-2. 時制がないものとしてのデータの傾向

3-2-1. 超時的なもの

次に、時制がない場合についてであるが、表-1に示したように、超時的に用いられる「このとき・そのとき」のデータがある。これらのデータは、主に習慣・常識や本質、マニュアルやルール、物語の話し筋、意見、主張などを表している。

「あのとき」は、今回のデータから出てこなかった。このことから、「ア系」が超時的なものは使われないと推定したい。

3-2-2. その他

表-1に示したように、「その他」に分類されるものがある。ある時を示してはいるが、時制と関係ないデータである。これらは主に「適切なとき」を指すものと「その場合のとき」を指すものである。出来事に関しては、該当の出来事を指す例は、以

下のようなものがある。

・適切なとき

今がそのときだと思う。

『朝日新聞』 電子版 2011 年 04 月 03 日 「村井雅清さん（60）」

・その場合のとき

このシステムでは、船の速度やそのときの天候などに基づいてコンピュータシステムが配列した移動可能な硬帆を利用して、風力および太陽光エネルギーを集めます。

『朝日新聞』 電子版 2011 年 05 月 12 日 「エコマリンパワー、エコ船舶研究を開始」

4. 結果分析のまとめとモデル図化

以上のように、本稿は、絶対時制と相対時制の考えを取り入れて、収集したデータを分析して考察を行った。その結果、「このとき・そのとき・あのとき」の時制の使用領域及び「コ・ソ・ア」の用法や区別などが以下のように明らかになった。

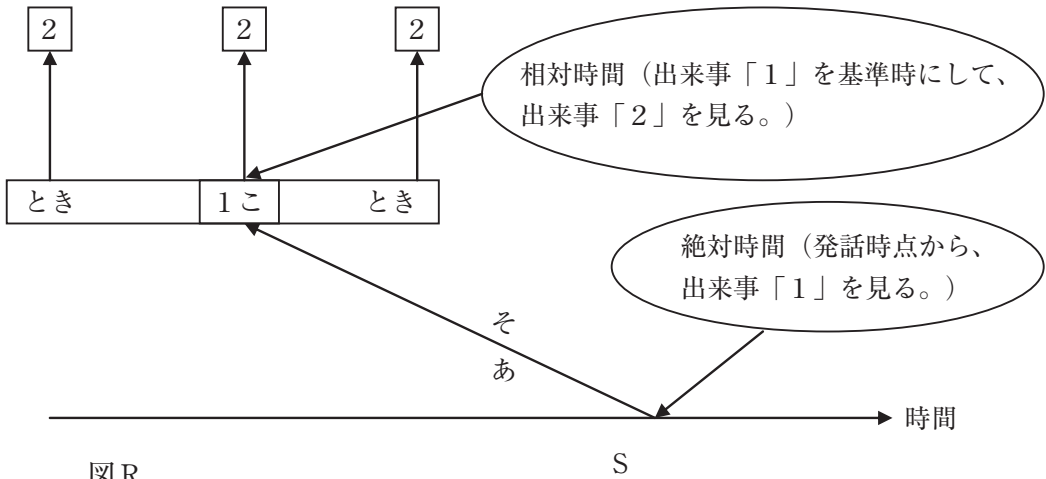
- ① 「コ」は、絶対時制・相対時制の両方の使い方がある。つまり、「このとき」は現在では発話時点から現在の出来事を見ることができ（絶対時制）、また過去と未来では基準時から出来事を見ることができる（相対時制）。
- ② 「ソ・ア」は、「コ」と異なり、絶対時制でしか使わないと考えられる。つまり、「そのとき・あのとき」は、常に発話時点から出来事を見ていることになる。
- ③ 「コ系」の時間を示す指示詞（このとき）は、過去・現在・未来の三つの領域で使える（上の①）。「ソ系」の時間を示す指示詞（そのとき）は、過去・未来の領域で使える（絶対時制）。「ア系」は、過去の領域でしか使わない（絶対時制）。

以上の結果を踏まえて、時の指示詞としての「この・その・あの」の用法と使い分けをモデル図で表せば、次のようになる。

4-1. 時制がある場合

例： 1 父は、旅行先で事故にあって、生死の境をさまよった。

{ このとき、 2 私はまだ12歳だった。
そのとき、
あのとき、



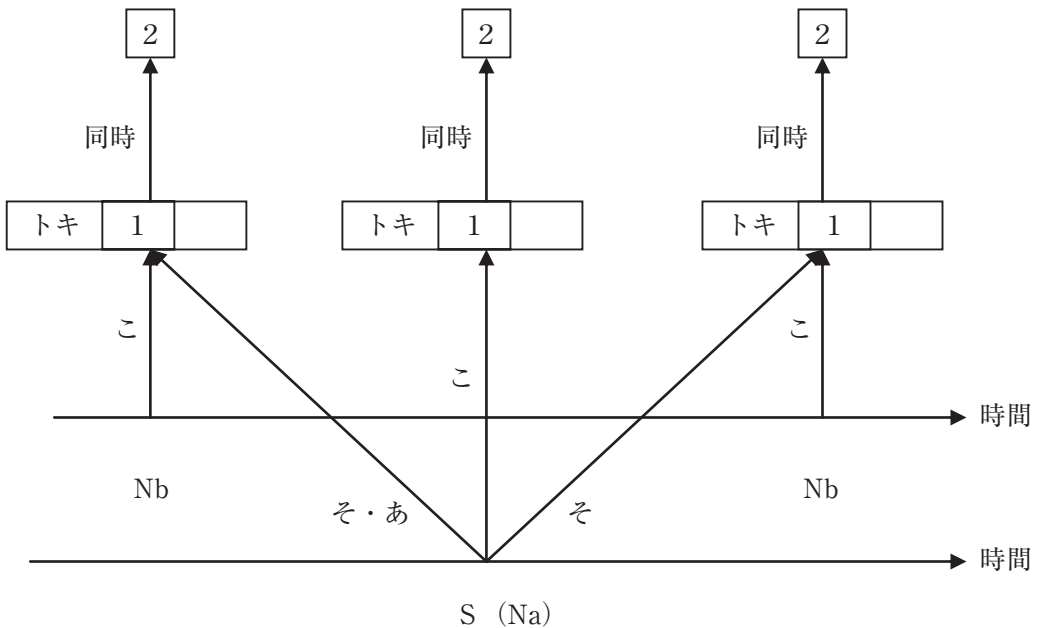
図R

注

1. 「1」は、出来事「父は、旅行先で事故にあって、生死の境をさまよった」である。
2. 「2」は、出来事「私はまだ12歳だった」である。
3. 「S」は、発話時点である。

以上のように、本稿では、人は、ある出来事を述べる際に無意識に出来事を見る視点を移動しており、ある出来事を、絶対時制で述べるか、相対時制で述べるかによって、「コ・ソ・ア」を使い分けられていると考える。図-1のようなモデルが立てられる。

図-1 時制による「コ・ソ・ア」の使い分け



注

1. [1] は、先に言及する出来事

2. [2] は、後に言及する出来事

3. 認識基準点 (N) $\left\{ \begin{array}{l} \text{Na 発話時点 (絶対テンス的) S} \\ \text{Nb 出来事 1 の生起時点 (相対テンス的)} \end{array} \right.$

図-1のモデルが立てられる理由として、以下のような説明による裏付けがある。久野(1973)がコ系例について、「目に見えないものを指すのに用いられる場合があるが、これはあたかも、その事物が眼前にあるかのように、生き生きと叙述する時に用いられるようで、依然として、眼前指示代名詞的色彩が強い」と述べている。なぜ「コ系」は、その事物が眼前にあるかのように、生き生きと叙述できるのか。それについて、図-1で説明することができる。その事物が眼前にあるかのように、生き生きとした感じの臨場感が感じられるのは、「コ系」が、相対時制で出来事を見ているからであると考えられる。相対時制は、発話時点「S」以外のある時点(前件生起時)を基準時にして、出来事を見るからである。その基準時を発話時点「S」のような気持ちで、その時点に立って、出来事を見るからである。それに対して、「ソ系・ア系」は、相対時制では使えない。発話時点「S」からしか、出来事を見ないからである。

4-2. 時制がない場合(繰り返しの場合)

例: [1] 通常の大気圧の下で水を100℃以上で加熱する。

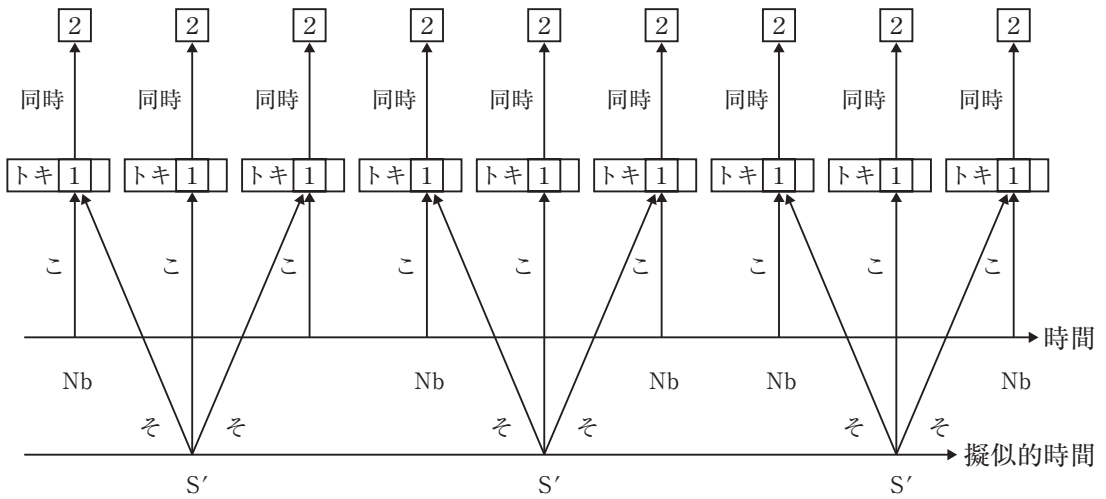
$\left\{ \begin{array}{l} \text{このとき、[2] 水は沸騰する。} \\ \text{そのとき} \end{array} \right.$

注

1. 「1」は、出来事「通常の大気圧の下で水を100℃以上で加熱する」こと。

2. 「2」は、出来事「水は沸騰する」こと。

図-2 時制による「コ・ソ」の使い分け（繰り返しの生起、擬似的現在）



注

1. 1 は、先に言及する出来事
2. 2 は、後に言及する出来事

3. 認識基準点 (N) $\left\{ \begin{array}{l} \text{Na 擬似的現在 (非テンス) } S' \text{ (時制がないで} \\ \text{発話時点と事態は結びついていない)} \\ \text{Nb 出来事 1 の生起時点 (相対テンス的)} \end{array} \right.$

5. 結論

収集したデータを分析・考察した結果、「このとき・そのとき・あのとき」の時制の使用領域及び「コ・ソ・ア」の用法と区別などが分かった。改めてまとめると、以下のようなになる。

表-4 「このとき・そのとき・あのとき」の時制の使用領域の分布

指示詞	時制がある場合					時制がない場合	
	過去		現在	未来		超時的なもの	其の他
	相対テンス	絶対テンス	絶対テンス	相対テンス	絶対テンス		
このとき	○	×	○	○	×	○	×
そのとき	×	○	×	×	○	○	○
あのとき	×	○	×	×	×	×	×

そして、この結果を踏まえて、時の指示詞としての「この・その・あの」の用法と使い分けを示すモデルを作ることができた（図-1、図-2を参照）。

6. 今後の課題

時制という視点での考察を通して、指示詞「コ・ソ・ア」の使用には、出来事を絶対時制で見るか、相対時制で見るかによって、使い分けがあるということが分かった。ただし時制の視点から、「ア」を選ぶ基準については未決である。時制の使い分け以外に、何らかの理由があるかもしれない。それが、明らかになれば、指示詞「コ・ソ・ア」の本質にもう一步迫ることができるはずである。今後の課題である。

注釈

※1

佐久間（1951）話し手（コ）とその相手（ソ）との相対して立つところに、現実の話の場ができる。その場は、まず話し手と相手との両極によって分節して、いわば「なわばり」ができ、その分界も自然に決まってくる。「コ」という場合の物や事は、発信者・話し手の自分の手の届く範囲（わのなわばり）、言わばその勢力範囲内にあるものである。「ソ」は、話し相手の手の届く範囲（なのなわばり）、自由に取れる区域内のものをさす。こうした勢力圏外にあるものが、すべて「ア」に属する。

参考文献：

1. 庵 功雄（1994）「結束性の観点から見た文脈指示—文脈指示に対するひとつの接近法—」『大阪大学日本学報』13: 31-42
2. 庵 功雄（1994）「定性に関する一考察—定情報という観念について—」『現代日本語研究』1: 40-56
3. 庵 功雄（1995）「語彙的意味に基づく結束性について—名詞の項構造の関連から—」『現代日本語研究』2: 85-102
4. 庵 功雄（1995）「テキスト的意味の付与について—文脈指示における「この」と「その」の使い分けを中心—」『大阪大学日本学報』14: 79-93,
5. 庵 功雄（2002）「《この》と《その》の文脈指示的用法再考」『一橋大学留学生センター紀要』5: 5-16,
6. 今泉喜一（2003）『日本語構造伝達文法 発展 A』揺籃社
7. 今泉喜一（2005）『日本語構造伝達文法・05版』揺籃社
8. 大槻文彦（1889）『言海』「語法指南」第一冊
9. 金水 敏（1989）『日本語文法セルフ・マスターシリーズ4 指示詞』くろしお出版
10. 金水 敏 田窪行則（1992）『指示詞』ひつじ書房

- 1 1. 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 1 2. 国立国語研究所 (1981) 『日本語の指示詞』大蔵省印刷局
- 1 3. 佐久間 鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法 (改訂版)』厚生閣
- 1 4. 阪田雪子 (1971) 「指示語『コ・ソ・ア』の機能について」(1992 『指示詞』ひつじ書房 所収)
- 1 5. 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 1 6. 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 1 7. 町田 健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク出版
- 1 8. 森田良行 (1995) 『日本語の視点』創拓社出版
- 1 9. 山田孝雄 (1922) 『日本口語法講義』宝文館
- 2 0. 吉本 啓 (1992) 「日本語の指示詞コソアの体系」『指示詞』ひつじ書房

データ：『朝日新聞』記事電子版 2011 年 3 月 24 日から、2012 年 3 月 23 日まで

会話文における、動作主の違いによる テクルの使い方の制限について

前田 公子

要 旨

本稿は「動詞のテ形」に「クル」が後続する文型が用いられた会話文において、聞き手がテクルの動作主となる場合の用いられ方を、「テクルは話し手の視点を基にした表現である」という観点から考察したものである。テクルを使うとき話し手は、前項動詞句の事態は話し手の領域に属することであり、聞き手も事態を話し手と同じように考えている「つもり」である。このことから、「聞き手が目上やソトの人物である場合にはテクル文が回避される」という仮説をたて、映画やドラマのシナリオ会話文から検証した。この結果、使用した例文の範囲内では緊急時など上下、ウチ・ソトという人間関係の概念が不問、あるいは逆転する場合を除き、仮説には妥当性があることが認められた。

1 はじめに

テクル¹には様々な意味が認められている。2-2 で取り上げた「情報のなわ張りの出入り」「パーフェクトを表す」「ポライトネスに係る」「話し手の領域に事態が出現する」「主観的表現」の他にも、「共存意識²を表す用法がある」、「話し手は前項動詞句が表す事態を対抗的に捉えている（山本 2006、澤田 2009b など）」、などもある。

日常の会話の中での使われ方を見ると、テクルの有無によって文法的には間違いで

¹ 本稿では「動詞のテ形+来る」をテクル、「動詞のテ形+行く」をテイクと表す。先行研究においてテクルとテイクの両方が扱われている場合には、テイクに係る部分を割愛していない。クルは本動詞として使われている場合と補助動詞として使われている場合があるが、本稿では一括してテクルと表す。理由は本動詞としてのクルと補助動詞としてのクルの使用は連続的であること（寺村 1984：156-162、山本 2007a：69）、本動詞か補助動詞かの区別は文脈によること（澤田 2009b：3）、シナリオ上で「来る」と漢字表記した本動詞であっても補助動詞的な意味が含まれている場合があること（妻が家に戻ると夫も旅行から戻っていた—「あ、やっちゃん帰って来てる」（『かけおち』）などによる。

² 共存意識：杉戸・水谷（2009：112-113）は、「昨日、病院へ行きました」と「昨日、病院へ行ってきました」を取り上げ、事実は同じでも話し手の態度が違い、聞き手は「行ってきました」といわれたほうが、「そうですか、それで・・・」と次を尋ねる姿勢になりやすく、これはテクルが「情報を相手と分かち合いたい」という気持ちを伝える共存意識を表すためである、と述べている。

はないのに、言われると「何となく違和感」を感じることもある³。

また一方で、「何となく言いにくい」と感じることもある。例えば、一緒に作業をする中で「私がコピーを取ってきます」は誰に対しても言うことができるが、コピーをしに行く教師に、たとえどんなに丁寧に言ったとしても、「先生、私の分もコピーしてきてくださいませんか」とは言いにくい。また、学校で教師の帰り際に、「先生、課題のレポートです。見ていただけませんか」とは言うことができるが、「先生、課題のレポートです。見てきていただけませんか」と言うのは、教師に（まるで宿題を出すように）家でレポートを見て、またここへ持ってくることを言っているようで、言いにくさがある。あるいは、新幹線の中で、「(私は) デッキで電話をかけてきます」は言う相手を選ばないのに対して、車掌が乗客に「電話はデッキにかけてください」と言うのは、かなり強圧的に聞こえる。

本稿は、テクルが表す様々な意味の中から、「言いにくさを感じる場合」に課題を絞り、これが話し手の視点を通すことによってどのように現れ、実際の会話ではどのように使われているかを、映画やドラマのシナリオの会話文を使って検証する。

2 先行研究

2-1 話し手の視点から見た状況認識

テクルの基本的な意味は、話し手の視点⁴から見た空間移動である。しかし、行為の方向性を移動と捉えたり、物事の時間的な変化を移動と捉えることにより、テクルの意味は空間的な移動から行為の方向性を表すもの、さらに時間的な変化を表すものへと拡張している。いずれにしても、テクルが話し手の視点から見た話し手のいる方向への「移動」であることには変わりがない。

森田（1968：87）は、クル・イクの本来の機能を「話し手との関係性の表示－話し手を中心とした作用・行為の表現」として書いている。森田（2002：234）は日本語の構造におけるクル・イクと視点の関係を次のように述べている。

「日本語では『子どもが向こうに走る』『こちらに向かって走る』のような言い方をしない。必ず『走っていく』『走ってくる』と『行く／来る』を用いて、話者の視点との位置関係および方向性を“己の認識”として表現を構成する。」

テクルは話し手の視点から、話し手が事態をどのように認識しているかを表す。

³ 旅行に行った友人に「お土産を買ったよ」と言われても、お土産を貰えば「え？ 私に？」と思う。また一方で、「お土産を買ってきたよ」と言った友人が何も出さなければ、「え？ お土産は？」と思う。「買った」と「買ってきた」の違いで、聞き手の受け取り方は違う。

⁴ 視点：澤田（2011:167-168）はクルにおける視点を、事物や事象を描写するときの話し手の「空間的・時間的・心理的・認識的・社会的・談話的」な位置であり、直示表現（2-2-4参照）の原点であると述べている。

2-2 状況をどのように認識するか

先行研究では、テクルが表す「移動」を話し手がどのように捉えているかを様々に説明している。

2-2-1 情報のなわ張り⁵への出入り

神尾（1990）の発話情報と話し手の心理的な距離の関係を説明した「情報のなわ張り理論」によると、テクルは話し手のなわ張りに入ってくるような移動、テイクは話し手のなわ張りの外に向かうような移動である（神尾 2002：92）。

2-2-2 パーフェクト

須田（1995：109-112）は、テクルはパーフェクトを表すとする。つまりクルが表す発話の場面（移動の到着点、視点の位置）に、前項動詞の動作の状態や動作の痕跡が残っていて、それが発話の場に関わっている。

2-2-3 ポライトネス—対人機能⁶

山本（2006：155）は、継起的用法のテクル・テイクを取り上げ、発話の場において話し手が聞き手と共有の場⁷を形成しているという話し手の認識を表すとした。このためテクル・テイクは聞き手を共有の場を形成する相手、つまりウチの人物と見なすという対人機能を持ち、ウチ・ソトの認識を介したポライトネスを表す⁸としている。

2-2-4 直示表現

澤田（2009b：1-2）はクル・イクが「今・ここ・私」という話し手の視点から解釈が決まる直示表現であるとする。クルが補助動詞化したテクルは、私を原点とする視点から事物・事象を話し手の領域⁹に属するか、聞き手・第三者の領域に属するかを言語的に区別する「心理的ダイクシス」であり、テクルは話し手の心的領域に事象が出現すること、テイクは話し手の心的領域から事象が離れること、と述べている。

⁵ なわ張り：神尾（1990:4）はなわ張りがある種の動物がその勢力範囲と見なす空間であり、自己の存在が当然で、他の侵入を許さない空間であるとしている。本稿はこれに「固定したものではなく、相手との心理的な距離感、相手との情報量の差により、拡大・縮小する」を付け加える。「領域」と同じ意味で扱う。

⁶ 対人機能：山本（2006:21）は「ポライトネスを動機づけとした、聞き手との関係調節に関わる発話の機能」としている。

⁷ 会話の場：会話が成立する空間。話し手と聞き手がいて、お互いを対話相手であること、共に事態に関わっていることを認め合っていて、メッセージや影響力のやりとりが行われている空間。一発話ごとに話し手と聞き手の影響力の大きさが代わり得るダイナミックな、物理的、心理的空間で、聞き手と話し手の関係において成立する。典型的には現実の会話場所であるが、時間・場所には束縛されない。例えば、手紙、電話、メール、ソーシャル・ネットワークなどでも会話の場は成立する。

⁸ ポライトネス：山本（2006:156-168）は継起的用法のテクルを、相手をウチの人物とみなすことにより、相手の認められたいという positive face を満たす Positive Politeness であると述べている。

⁹ 領域：「注5：なわ張り」と同じ意味で扱う。

2-2-5 主観的表現

森田（1968：85）は、テクルは話し手が事態を自分に直接関わりのあることとして主観的に捉え叙述する、と言っている。山本（2007a：77）もテイク・テクルは「話し手が事態の出発点あるいは到着点に位置し、事態に直接関与していることを表す主観的な指標である」と述べている。澤田（2009a：32）も、テクルの直示性の特徴から、「話し手の視点が刻印された主観的な表現である」と述べている。

3 考察と結果

3-1 テクルが表すもの

先行研究からテクルが表すものをまとめると以下のようになる。

- 主観性から：前項動詞句が表す事態は、話し手の主観的な認識である。
- 情報のなわ張り理論から：前項動詞句が表す事態は話し手に属する情報である。
- パーフェクトから：前項動詞句が表す事態は、現在の会話の場に関わる。
- ポライトネスから：現在の会話の場は、話し手と聞き手が形成し共有している。
- 直示表現から：テクルは話し手の領域に前項動詞句の事態が現れることを表す。

つまりテクルを使うとき話し手の認識は、

- 事態は、話し手の領域に属し、会話の場に存在 / 関わることである。聞き手は会話の場を話し手と共に形成し、共有している。

従って、

- 聞き手は話し手と共に話し手の領域にいて事態に関わっているし、話し手の主観的な状況認識を共有している。

言い換えると、

- 話し手は、聞き手も話し手の領域にいて事態を話し手と同じように考えている「つもり」である。

3-2 なぜ言いにくさを感じるのか

従って、話し手が次のように考えている場合、話し手は聞き手が動作主となるテクル文に言いにくさを感じることになる。

- 前項動詞句の事態は聞き手の領域に属すること¹⁰と考えている場合
- 話し手が聞き手を、目上、ソトの人物と考えている場合

¹⁰ 鈴木（1997：58-66）は、話し手が聞き手に係ることがらについて一方的に決定を下すことは、聞き手の決定、判断の権利の侵害、丁寧さの欠如であり、ことがらが話し手の世界のことであっても、判断が聞き手に属することであれば、丁寧さの欠如である、と述べている。

これが先に述べた「先生、課題のレポートです。見てきていただけませんか」という発話に言いにくさを感じる所以であると考えられる。「レポートを見る・見ない」は「私の領域」に属する事態ではなく「先生」が決める事であり、「先生」は「私の領域」に属する人物でもないからである。

3-3 仮説

以上から次の仮説を立てる。

仮説：「会話において、聞き手が動作主であるテクル文は、聞き手が目上あるいはソトの人物である場合には回避される」

このような説は管見ではまだ言及されていない。

3-4 仮説の検証方法

仮説を検証するために、聞き手が動作主となるテクル文が会話においてどのように使われているかを、ドラマや映画のシナリオ会話文から考察する。しかし実際の会話においては回避される文は現れないため、仮説の検証は次の3点から進める。

- (1) 話し手の認識を聞き手が受け入れている（会話がスムーズに運ばれている）場合の聞き手の立場を検証する。

この場合、聞き手の立場は以下のように考えられる。

- ①話し手の領域に属する人物、話し手と領域／事態を共有する人物
- ②話し手の領域の人物と見なされることに異論はない、あるいは異論を唱えられない人物

- (2) 聞き手が話し手の目上・ソトの人物である場合にテクルが使われている用例の発話状況を検証する。

- (3) 時間的用法の用例を検証する。

時間的移動を表す使い方においては、事態が時間的変化・推移を含有している点が空間的移動と異なるが、事態が話し手の領域にあることとして発話がなされていることには変わりがない。動作主が聞き手で、前項動詞が意志動詞である場合のテクル文は、聞き手の継続的な意志的行為、つまり努力が話し手の領域にある事として発話されることになる。これは動作主の評価にもつながるため、話し手と聞き手の関係によっては失礼な表現になると考えられる。

3-5 検証に用いる資料

映画、ドラマのシナリオを資料として用い、聞き手が動作主となるテクルが使われ

ている会話文を選択した。シナリオ会話は現実の会話ではないが、現実の会話に近い文字資料である。本稿は文脈や人間関係などの発話状況も特定するためシナリオを使用した。

例文の選択基準は、前項動詞が意志動詞であること、独り言ではないこと、二重の場¹¹ではないこと、方言¹²ではないこと、慣用句¹³ではないことである。クルとイクが同形となる「いらっしゃる」と「まいる」も除外した。

3-6 結果

上記の条件を満たす会話例は 23 作品から 512 例集められた。このうち聞き手が動作主となるテクル文は 161 例あった。この 161 例を、活字として現れている人間関係、文脈から上記(1)(2)(3)に分類した。それぞれの例文を何点か挙げる。

(1) - ① : [聞き手は話し手の領域に属する人物、話し手と領域／事態を共有する人物である]

このような関係が考えられるのは、家族、友人、仲間など、いわゆるウチの関係にある人物である。この分類に属する用例は、161 例中 96 例あった。

万引きをした息子を警察に引き取りに行った父親が息子連れて家に戻り、迎えに出た母親に塩を持ってくるよう言う。(『冬の運動会』)

母親： 「塩一塩は不祝儀の時のお浄めに使うもンですよ」

父親： 「もってきなさい」

母親： 「(聞こえないフリをして息子に) 早くお上がり」

行きつけのバーで、いつもたむろしている 5 人組。そのうちの一人、穴井は皆に「うぬぼれストラップ」を渡しなが、5 本買ったが売り場であるガソリンスタンドの女の子にポーっとして、一つ落としてしまったと言う。(『うぬぼれ刑事』)

¹¹ 二重の場：テクルの「到着点となる場」と「会話一発話の場」が異なる場合である。テクルの「到着点の場」の聞き手と「会話の場」の聞き手が異なる場合、聞き手は同じでもテクルの「到着点の場」と「会話の場」が時間的に異なる場合がある。

「署長がもう一回鈴木村を見て来いっていうんですが、村はもう誰も住んでないし、こっちに戻ってくる可能性なんかないんですよね」(『北のカナリアたち』)

現在の会話の場 話し手(巡査)と聞き手(勇)

「見て来い」の場 話し手(署長)と聞き手(巡査)

¹² 山口(2002)参照。『日本方言辞典』(p.109)にも「行く」の方言として「来る」が使用される地域として以下の県の一部地方が載っている(富山県、石川県、岐阜県、鳥取県、島根県、佐賀県、長崎県、熊本県、宮崎県、鹿児島県)。

¹³ 慣用句：『広辞苑 第六版』(p.651)は「二つ以上の語から構成され、句全体の個々の語の元来の意味からは決まらないような慣用的表現」としている。テクル・テイクの用法の下位分類として、森山(1988:186)は「語彙的形式類」、山本(2006:151)は「その他」という名称で、共に「死んでいく、生まれてくる、やってくる」の3語をあげている。

栗橋：「子供じゃあるまいし」

穴井：「本当だよ。だったらテメエで買って来いよ」

サダメ：「買って来ましょうか？ 僕、どこのスタンドですか」

レイ子は、迎えの車を待つ駅前で偶然昔のバンド仲間に会い、久々に一曲歌う。ボーカルとしてまた一緒にやりたいが、今日が初日の一座が主役のレイ子の帰りを待っている。迎えの車が来た。（『嫁ぐ日』）

レイ子：「じゃ、あたし、行くから」

仲間：「オレたちのバンド、これからもボーカルなしでいくから、お前が帰ってくるの待ってるから」

レイ子：「・・・」

1-②：[聞き手は話し手の領域の人物と見なされることに異論はない、異論を唱えられない立場の人物である]

このような関係が考えられるのは、聞き手が上下関係のある下の立場のもの、目下の立場のものである。このような例は 161 例中 58 例あった。

教師・はるは、友達の人形を壊した生徒・勇を叱る。（『北のカナリアたち』）

はる：「信ちゃんの心はもっと、もっと痛いの。分かった？」

はる：「先生はこれを直すから、勇ちゃんは信ちゃんを探してあやまってきなさい。返事は？」

勇：「はい」

文房具メーカーの苦情係・護と真島が、製品の文句を言う客に対応している。（『マルモのおきて』）

客：「関係ねーだろ、そんなこと。おい、お前、さっきから聞いてんのか」

護：「はい？ はい。申し訳ありません」

客：「聞いてろよバカヤロー。お前らじゃ話にならねー。もっと上のやつ連れてこい」

スキー旅行に出かける文男は仕事が終わらず残業になってしまい、焦って計算をしている。見かねた課長が言う。（『私をスキーに連れてって』）

文男：「—無言で必死—」

課長：「おい、無理しないで明日出て来てやれよ」

文男：「いえ・・・今日中に絶対」

(1)のまとめ：

聞き手が話し手の状況認識を受け入れている①と②で、聞き手が動作主である161例の96%を占めた。用例で見る限りは「聞き手が動作主となるテクルを持つ会話文における聞き手は、話し手とウチの関係の人物、あるいは話し手より立場的に目下の人物である」という非常に強い傾向がみられた、ということができる。

(2)：[動作主である聞き手が、話し手の目上・ソトの人物の場合の発話状況の検証]

本稿の仮説では回避されるとした、動作主である聞き手が話し手の目上・ソトの人物である場合の会話例を検証する。このような例は161例中7例(全体の4%)であった。以下に7例全てを列記する。

用例1：江戸時代にタイム・スリップした外科医・仁は町中で緊急手術を行うことになり、周りにいる町人達に手術の段取りを頼み、一度見かけたことのある侍に、仁が投宿している屋敷に置いてある手術道具を取ってくるよう頼む。
(『JIN-仁』)

侍：「しゅ、しゅじゅちゅ？」

仁：「この方を治すための道具です。それを取ってきてもらえませんか。
一刻を争うんです！」

侍：「もちろんじゃ！ けんど、場所が」

用例2：病院近くの野球場で、病院チームと製薬会社チームが試合をしている。突然スーツ姿の男がグラウンドに入ってきて、野球道具を身に付け始める。
(『チーム・バチスタの栄光』)

バッター：「何なんだあんたは」

監督：「いやあ、ちょっと。困りますよ。勝手にグラウンド入って来ちゃ」

監督：「(名刺を見せられて) 分かりました。じゃっ代打白鳥さんという
ことで」

用例3：村長と東京暮らしからUターンした職員が、一週間の予定で東京に出てくる。「金はあるからいいホテルを」と言った村長は、職員が案内した高級ホテルのフロントで、宿泊料金に文句を言う。(『合言葉は勇氣』)

村長：「しかし三万五千円っていうのは、どうかね。うちの村じゃ、馬が
買える値段なんだけど」

職員：「(フロントに) すみません。(村長を脇に呼んで) いくら持って来
たんですか」

村長：「八万円」

用例4：落ちぶれた中年の俳優に依頼された仕事は、弁護士になりすまして村人が訴訟を起こすのを止めさせることだった。村に来た俳優は、仕事を頼んだ若い職員が止めるのも聞かず、あちこちで自分は弁護士だ！と吹聴する。しかし、思いを寄せるようになった女性が彼を弁護士と信じ込んでいることがだんだん辛くなり、東京へ逃げ帰ろうとする。引き受けた仕事は終わっていない。
（『合言葉は勇気』）

俳優： 「それが俺には耐えられないんだ」

職員： 「だけどそれは、あんたが自分でそういう風に持って来たんじゃないですかっ」

俳優： 「・・・」

用例5：訴訟を起こされる会社側のやり手弁護士は、村民側の弁護士がニセ者であることを最初の発話で見抜き、わざと追い打ちをかける。（『合言葉は勇気』）

ニセ弁護士：「四期でした」

本物の弁護士：「不勉強で申し訳ないが、先生は、これまでに、どのような事件を扱って来られたのか」

ニセ弁護士：「え？」

用例6：有能な座員のミツコは東京でのオーディションに合格し、プロダクションのマネージャーが迎えに来た。マネージャーは「東京」であることに優越感をもっている。どさ廻りの一座の座長は、自分の妻が主演をやるためミツコを主演にはできず、出て行くミツコに気を使う。（『嫁ぐ日』）

座長： 「ミツコ、すまんなあ」

ミツコ：「・・・」

マネージャー：「座長、一つ約束していただきたいんですけど、この子売れ
ても四の五の言ってこないでくださいね」

座長： 「フザけんな、キサマ！」

用例7：画家の榊は刑事の右京に、自分が犯人だと疑っているのかと聞く。右京は答えず、榊が絵は趣味だと嘘をついたことを指摘する。

（『最後のアトリエー相棒 Season9』）

榊： 「この年になっても売れない絵を風呂敷に包んで画廊を廻り続けている。そんなことを喜んで人に話さなければなりませんか」

右京： 「確か、初めてお会いした時も、あなたはご自分を『画家』とは仰らなかった。50年あまりひたすら描き続けてきたというのに」

榊： 「何年描いていようと、個展の一つも開けなければ画家とは言えん

のだ。そんなことが事件と関係ありますか」

上記の7例は3つのグループに分けられる。

第1のグループは例1と例2に見るように、緊急時や危険時である。

第2のグループは、例3、例4、例5に見るように、聞き手は話し手の目上、ソトの人物ではあるが、その状況においては話し手のほうが明らかに優位に立っている場合である。話し手のテクルを使った発話に、聞き手は反論できない状況である。

第3のグループは、例6と例7にみるように、目下、ソトである話し手のテクルを使った発話に対して聞き手は、乱暴な言葉や丁寧体を突然普通体に変るなど、怒りを表す応答をしている。

(2)のまとめ

緊急、危険時とは上下、ウチ・ソトといった人間関係が不問とされる場合である。聞き手が話し手の目上、ソトの人物ではあっても、その状況においては話し手の方が明らかに優位に立っていて聞き手は反論できない状況は、(1)のケースの一部と考えられる。従って、これらは「(2)：聞き手が目上、ソトの人物」という枠の例外として除外される。

残る2例で聞き手が怒りや不愉快さを表しているように、聞き手が目上・ソトの人物であり動作主となるテクル文は、採用した用例でみる限りでは、聞き手に失礼な発話であった。つまり通常の間人間関係が維持されている場合には、目上、ソトの人物である聞き手が動作主となるテクル文は現れず、このような会話は回避されていると考えられる。

(3)：[時間的用法を表す用例の検証]

時間の推移・変化を表す用例は161例中5例あった。うち2例は、上記の「用例5：話し手は目下ではあるが、明らかに聞き手より優位に立っている場合」と「用例7：話し手と聞き手はソトの関係であり、聞き手は話し手の発話に不愉快さを表明している場合」である。残りの3例は、父親から娘、口の悪い夫から妻、親友のわがままに怒っている女の子の発話であり、上記「(1)-①：話し手と聞き手がウチの関係」に分類された。

はるは夫が死んだ日に夫以外の男性と会っていたことが噂になり、島を追われる。夫に対する罪の意識から、誰とも連絡を取らず一人静かに暮らしてきたが、当時の生徒の事件で20年ぶりに島に戻る。(『北のカナリアたち』)

父： 「なあ、はる。お前は、お前なりに精一杯、生きてきた。だからな、もう自分を許してあげなさい」

はる：「おとうさん・・・」

(3)のまとめ

時間的用法の5例も、ウチの関係が3例、話し手が目下でも優位に立っている場合が1例、ソトである聞き手が不愉快さを表す例が1例であった。従って、採用された用例で見る限りでは空間的用法との違いはなく、通常の間関係が維持される会話においては、「動作主である聞き手が目上・ソトの人物である場合にはテクル文は回避されている」と考えられる。

3-7 考察と結果のまとめ

会話文において、「テクルの動作主が聞き手で、かつ目上・ソトの人物である場合には、テクルをもつ会話文には使いにくさがある」ということは今までに指摘されていなかった。しかし、採用された161例でみる限り、以下のことが確認された。

聞き手が動作主となる例文161例中159例、全体の99%で、話し手は聞き手のウチまたは目上の人物であった、あるいはたとえ目下・ソトであっても状況的に優位な立場にあり、聞き手は反論できない状況であった、あるいは危険・緊急など上下、ウチ・ソトが不問とされる場合であった。残りの2例、全体の1%は聞き手が動作主であり、かつ話し手の目上・ソトの人物であったが、聞き手は話し手の発話に対して怒りや不愉快さを表明していた。

以上から、通常の間関係が維持されている会話においてテクルが使用される場合、「話し手は聞き手のウチ、または目上・優位な立場」であり、「動作主である聞き手が目上・ソトの人物である場合にはテクルの使用が回避されている」と考えられる。

4 おわりに

「動詞のテ形+クル」の構造を持つ会話文は、話し手の視点を基にした話し手の認識を表す表現であることから、様々な意味を持つ。本稿はそのような様々な意味の中から、動作主が聞き手である場合には使用の制限があるという仮説を立て、これを映画、ドラマのシナリオから考察した。

この結果、集められた用例の範囲内では、テクルの動作主が聞き手である場合は、緊急時などの上下、ウチ・ソトの関係が不問とされる場合を除き、話し手の立場は聞き手と家族・友人・事態を共にするなどのウチの関係にあるもの、立場的に目上であるもの、その状況においては明らかに優位に立っているものだけであった。通常の間関係が維持されている会話においては、動作主となる聞き手が目上・ソトの人物である場合にはテクル文が現れず、「動作主となる聞き手が目上・ソトの人物である場合にはテクルの使用は回避されている」と考えられる。

これはテクルが話し手の視点からの状況認識であり、事態が話し手領域への移動で

あることに由来する。

今後の課題として、シナリオ以外の資料の可能性も含め、さらに多くの用例を集め検証を進めること、テクルの持つ他の様々な意味も例文から検証することとしたい。

引用・参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2000）『日本語文法ハンドブック』松岡弘監修 スリーエーネットワーク
- 池上嘉彦（2011）「日本語と主観性・主体性」『主観性と主体性』ひつじ意味論講座 5 pp.49-67. ひつじ書房
- 出原健一（2007）『come の意味論—多重活性化モデルを用いて』彦根論叢 pp.97-111
- 大江三郎（1975）『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂
- 神尾昭雄（1990）『情報のなわばり理論』大修館書店
- 神尾昭雄（2002）『続・情報のなわ張り理論』大修館書店
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店
- 古賀裕章（2008）「『てくる』のヴォイスに関連する機能」『ことばのダイナミズム』森雄一・西村義樹・山田進・米山三明編 pp. 241-257. くろしお出版
- 近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ研究叢書第 19 巻 第 10 章 ひつじ書房
- 坂原茂（1995）「複合動詞『V て来る』」『Language, Information, Text』Vol.2 pp.109-143. 東京大学大学院総合文化研究所
- 澤田淳（2008）「『変化型』アスペクトの『テクル』『テイク』と時間性—タ形『テキタ』と『テイツタ』の非対称的な分布に注目して—」『日本語の研究』4 pp.63-69. 日本語学会
- 澤田淳（2009a）『ダイクシスへの歴史語用論的アプローチ—ダイクシス動詞「来る」の歴史的展開と話し手・聞き手の対立—』Ars Linguistica 16 pp.32-55. 日本中部言語学会
- 澤田淳（2009b）「移動動詞『くる』の文法化と方向づけ機能—『場所ダイクシス』から『心理的ダイクシス』へ—」『語用論研究』11号 pp.1-20.
- 澤田淳（2010）「直示と視点」『ことばの意味と使用』pp.222-233. 澤田治美・高見健一編 鳳書房
- 澤田淳（2011）「日本語のダイクシス表現と視点、主観性」『主観性と主体性』ひつじ意味論講座 5 pp.165-192. ひつじ書房

- 杉戸清樹・水谷信子 (2009) 「日本人の言語行動」『NAFL 日本語教師養成プログラム』
4、アルク
- 鈴木睦 (1989) 「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つか」『日本語学』8巻2号 pp.58-67.
- 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』3章 田窪行則編 くろしお出版
- 須田義治 (1995) 「『してくる』と『していく』」『日本語の研究と教育』 pp.92-118. 専門教育出版
- 田窪行則編 (1997) 『視点と言語行動』 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2010) 『日本語から見た日本人』 開拓社
- 牧内勝 (1979) 「テンス、アスペクト および ムード—『～ていく』と『～てくる』の文法—」『フェリス女学院大学紀要14号』 pp.65-86.
- 森田良行 (1968) 「『行く・来る』の用法」『国語学』No.75 pp.75-87. 国語学会
- 森田良行 (1984) 『日本語の発想』 冬樹社
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店
- 森田良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』 明治書院
- 森田良行 (1995) 『日本語の視点』 創拓社
- 森田良行 (1998) 『日本人の発想・日本語の表現』 中公新書
- 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』 ひつじ書房
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- 山岡政紀 (1988) 「「場」の概念」『言語学論叢』6・7 筑波大学一般・応用言語学研究室
- 山口治彦 (2002) 「直示動詞と対話空間:英語、日本語、そして九州方言をもとに」『神戸外大論叢』第53巻3号 pp.51-70. 神戸外国語大学
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房
- 山本裕子 (2000) 「『くる』の多義構造—「くる」と「てくる」の意味のつながり」『日本語教育』105号 pp.11-20 日本語教育学会
- 山本裕子 (2001) 「聞き手とベースを共有することを表すテイク・テクルについて」『日本語教育』110号 pp.52-61. 日本語教育学会
- 山本裕子 (2006) 『方向性を持つ補助動詞の意味と機能』名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 山本裕子 (2007a) 「<主観性>の指標としての「～テイク」「～テクル」」『中部大学人文学部研究論集』第17号 pp.67-81
- 山本裕子 (2007b) 「行為の方向性を表す『～テイク』『～テクル』について」『ことばの論文集 安達隆一先生古希記念論文集』 pp.338-354. おうふう

渡辺誠治 (2005) 『「テイク/テクル」の分類をめぐって』 活水論文集 現代日本文
化学科編 48 活水女子大学

渡辺誠治 (2008) 「日本語の補助動詞『テイク』『テクル』について (その1) — 『テ
イク』のアスペクト性を中心に—」 『活水論文集 現代日本文化学科編 51』 活
水女子大学

『日本語文法大辞典』 (2001) 山口秋穂・秋本守英編 明治書院

『日本方言辞典』 (2004) 佐藤亮一監修・小学館辞典編集部編 小学館

『広辞苑 第六版』 (2008) 新村出編 岩波書店

例文引用資料—シナリオ

『かけおち』 (1983) つかこうへい 日本放送出版協会

『嫁ぐ日』 (1984) つかこうへい 日本放送出版協会

『ふぞろいの林檎たち II』 (1985) 山田太一 大和書房

『冬の運動会』 (1985) 向田邦子 新潮文庫

『わたしをスキーに連れてって』 (2000) 一色伸幸 演劇ブックス社

『合言葉は勇気』 (2000) 三谷幸喜 角川書店

「チーム・バチスタの栄光」 (2008) 斉藤ひろし・蒔田光治 『シナリオ』 4月号 シ
ナリオ作家協会

「JIN—仁—」 (2009) 森下佳子 『ドラマ』 12月号 映人社

「最後のアトリエ—相棒 Season 9」 (2010) 太田愛 『ドラマ』 2月号 映人社

『うぬぼれ刑事』 (2010) 宮藤官九郎 角川書店

「マルモのおきて」 (2011) 櫻井剛 『ドラマ』 7月号 映人社

「北のカナリアたち」 (2012) 那須真知子 『シナリオ』 12月号 シナリオ作家協会

同時通訳における起点テキスト特性と 訳出パフォーマンス

—中国語から日本語への訳出の場合—

杏林大学大学院 国際協力研究科 開発問題専攻
川端 谷津子

要 旨

中国語から日本語への同時通訳（中→日同時通訳）は、両言語の属性（孤立語か膠着語か）や同一内容の伝達に要する音節数の差といった特性に起因して、特有の時間的制約を受けることが経験的に知られている。しかし、中国語を起点言語（the source of language : SL）、日本語を目標言語（the target language : TL）とした同時通訳の研究事例は少なく、未整理の部分が多い。そこで、本稿では、中→日同時通訳において、中国語（SL）の入力変数（すなわち、起点テキストの特性）が日本語（TL）での訳出パフォーマンスに与える影響を明らかにすることを目的とした。訳出パフォーマンスを変化させる入力変数としては、SL テキストの語彙密度、話速およびスピーチ形態を取り上げ、「SL 原稿読み上げ / TL 原稿読み上げ同時通訳（R-R 同通）」「SL 原稿読み上げ / TL 即興同時通訳（R-I 同通）」「SL 即興 / TL 即興同時通訳（I-I 同通）」の3形態について調査を行ったところ、SL スピーチ形態の違いや TL スピーチ形態の違いにかかわらず、SL の話速が訳出率に強く影響することが明らかとなった。また、その原因として、日本語は同一内容の情報を伝達するにあたって中国語よりも多くの音節数を必要とすることから、SL に対し次第に遅れを生じるためであることが聴取-発話間隔（ear-voice span : EVS）の分析を元に検証された。中国語と日本語の音節数の差は、TL を事前に推敲可能な R-R 同通においても完全には回避不可能なほど強い阻害要因であり、本研究では R-I 同通、I-I 同通、R-R 同通の順で訳出率に強く影響した。

I 序論

1. 同時通訳における中国語から日本語への訳出課題

中国語は、語のほとんどが1音節ないしは2音節という短い音節数からなり（卢，2011）、さらにこれらの語をつなぐ形態素を必要としない「孤立語」に分類されるため（風間 他，2012）、相対的に少ない音節数で必要な情報を伝達することができる。これに対し、日本語は語の大部分が多数の音節を組み合わせるうえ、実質的意味を持つ語に対し文法的機能を補う形態素を付加せねばならない「膠着語」に分類される（風間 他，2012）。すなわち、必要な情報を伝達するためには中国語よりも多くの音節数を必要とし、その差は経験的に1.5倍程度とされることが多い（塚本，2003）。

日中通訳・翻訳の実践において、こうした音節数の差が最も強く影響するのは同時通訳の現場、特に中国語から日本語への訳出の場合である。聞きながら話すことを求められる同時通訳では、言語に関わらず時間的制約が課題とされることが少なくない。しかし、中国語から日本語への同時通訳（以下、中→日同時通訳）の場合には、特に上記のような言語特性の違いから、他言語以上に厳しい時間的制約が科されるものと推測される。

この点に着目し、中国語を起点言語（the source of language : SL）、日本語を目標言語（the target language : TL）とした研究事例としては、時差通訳（同時通訳形態の一種）における中→日の訳出率を英→日の訳出率と比較した藤田（2012）がある。同研究では、全訳文（調査者による翻訳文）の音節数を求め、これに対する TL テキストの音節数の比率を訳出率として算出した結果、中→日の訳出率は平均70.02%であり、木佐（1998）による英→日の理想的な訳出率80%を下回るとの結論を導いている。

2. 同時通訳の訳出パフォーマンスを変化させる SL テキストの入力変数

藤田（2012）の研究は訳出率の算出手法に改善の余地があるものの、中→日時差通訳の訳出率が英→日時差通訳に比べ低くなるという現象について一定の結果を得た点で意義がある。しかし、中→日時差通訳の訳出率が低く抑えられる原因がI-1で述べたような日中両語の言語特性の差に起因する時間的制約を受けてのものか否かについては明らかにされておらず、さらなる検証と考察が必要である。ここで、過去の研究事例より、同時通訳の訳出パフォーマンスを変化させる要因として以下の入力変数が考えられる。

1) 同時通訳の訳出パフォーマンスを変化させる入力変数①：SL テキストの情報密度

Dillinger（1994）は、SL テキストの「主要部の概念（述部）」と「これに関連する多数の概念」からなる「命題（proposition）」を「意味の単位（unit of meaning）」

と位置づけ、命題密度 (proportion density) は SL テキストの理解の困難さを示す指標になるとした。ここでいう命題密度とは SL テキストにおける情報の密度に相当すると考えられ、同研究では、SL テキストの命題密度が Medium、High であった場合の通訳の正確さは、命題密度が Low であった場合に比べ大きく低下するとの結果を得ている。

2) 同時通訳の訳出パフォーマンスを変化させる入力変数②：SL テキストの話速

AIIC (国際会議通訳者協会) のホームページに掲載の “The AIIC Workload Study” によると、1999 ~ 2001 年に同時通訳者を対象に行った調査で (回答者 607 名、有効回答率 41%)、通訳者がもっともストレスを感じると回答した項目は「早口のスピーカー (78%)」であった。Pöchhacker (2004) が紹介する Gerver (1969) の実験結果によれば、SL テキストの話速が毎分 95 ワードから 120 ワード以上のスピードになると、正しい通訳部分の比率が低下したという。中国語は慣習的に語数ではなく音節数で話速が算出されるため本結果との比較は難しいが、仮に一般的な話速を毎分 230 音節とするならば (郭, 1993)、語の大半が 1 ないし 2 音節からなる中国語は、Gerver (1969) のいう 95 ワードから 120 ワードを超える速度で発話される可能性が高く、日本語への訳出を変化させる入力変数として看過できない。

3) 同時通訳の訳出パフォーマンスを変化させる入力変数③：SL スピーチ形態

上記の AIIC 調査によると、通訳者が「早口のスピーカー」の次にストレスを感じると回答した項目は「原稿を棒読みするスピーカー (71%)」であった。この点については Pöchhacker (2004) が、即席のスピーチと原稿読み上げでは前者のほうが通訳の成績がよかったとする過去の研究事例 (Déjean, 1982; Christopher, 1989; Balzani, 1990) を紹介している。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、中→日同時通訳に特有と考えられる時間的制約に注目しつつ、中国語 (SL) の各入力変数 (すなわち、起点テキストの特性) が日本語 (TL) での訳出パフォーマンスに与える影響を明らかにすることである。同時通訳の訳出パフォーマンスを変化させる入力変数としては、① SL テキストの情報密度、② SL 話速および③ SL スピーチ形態を取り上げた。また、藤田 (2012) が同時通訳の一形態である時差通訳 (SL 原稿読み上げ / TL 原稿読み上げ同時通訳: R-R 同通) のみを調査対象としたのに対し、本研究ではさらに「SL 原稿読み上げ / TL 即興同時通訳 (R-I 同通)」 「SL 即興 / TL 即興同時通訳 (I-I 同通)」を加え、これら 3 つの通訳形態別に SL 入力変数と訳出パフォーマンスの関係を調査・分析した。なお、「R-R 同通」「R-I 同通」の調査材料については国際会議の現場からの入手が困難であったため、やや代

替的ではあるが、前者についてはNHK BS1で放送された時差通訳音声、後者についてはCCTV大富で放送されたニュースの同時通訳音声を使用した。これらは厳密には放送通訳に分類され、特に時差通訳では独特の手法が用いられることが知られているが、その点を考慮の上で分析を行った。

Ⅱ 調査手法

1. 調査材料

1) R-R 同通の調査材料

2012年5月26日～5月30日にNHK BS1で放送された『ワールド WAVE アジア』『ワールド WAVE』の中→日時差通訳のうち、日本語母語話者による通訳パフォーマンスを抽出した。ただし、同一の通訳者が同じまたは類似のニュースを複数回通訳することによる「慣れ」の影響を排除するため、調査材料は上記の番組のうち当日の朝一番に放送されたもののみから抽出した。なお、字幕付きニュースや、ニュースの内容が文字情報として詳細に画面に映し出されるニュースについては調査材料から除外した。これは、通訳者がSL文字テキストを目で追うサイト・トランスレーションを行っている可能性があり、このような通訳パフォーマンスはSL音声に対する通訳者の反応を分析しようとする本稿の趣旨には沿わないためである。また、専門家や市民に対するインタビューなど原稿読み上げでない箇所を含むニュースについても除外した。結果として、通訳者4名による同時通訳音声7本が調査材料として抽出された。

2) R-I 同通の調査材料

2012年3月28日～4月2日にCCTV大富で放送されたニュース番組『中国新聞』『新聞联播』の中→日同時通訳のうち、日本語を母語とする通訳者によるものを用いた。ただし、同一の通訳者が同じまたは類似のニュースを複数回通訳することによる「慣れ」の影響を排除するため、各通訳者が同日中に同じまたは類似のニュースを複数回担当した場合には、1回目に担当したニュースのみを調査材料とした。さらに、R-R同通と同様に、字幕付きニュースや、ニュースの内容が文字情報として詳細に画面に映し出されるニュース、専門家や市民に対するインタビューなど原稿読み上げでない箇所を含むニュースについては除外した。このほか、対象期間内に同時通訳を担当した日本語を母語とする通訳者計5名のうち、予備調査で訳出率（各通訳者につき2本の平均訳出率）の成績が他と比べて著しく低かった通訳者1名（他の通訳者の平均訳出率が43.6～56.1%であったのに対し、当該通訳者の平均訳出率は28.7%）についても調査対象から除外した。結果、通訳者4名による同時通訳音声17本が抽出された。

3) I-I 同通の調査材料

2011年9月2日に独立行政法人国際交流基金助成事業として東京で開催されたシンポジウム「東アジア気候フォーラム 2011～低炭素東アジア実現への道～」の中→日同時通訳音声のうち、日本語母語話者2名による通訳パフォーマンス4本を調査材料として使用した。ただし、調査材料4本のうち3本は同じ通訳者によるものであった。

2. SLの各種入力変数の算出

1) SLテキストの情報密度の算出

SLテキストの情報密度としてはDillinger (1994)の命題密度を用いることが考えられるが、命題の算出にはたいへんな手間と時間がかかり、大量のテキストを扱う本研究の手法としては現実的でない。そこで、本研究ではテキストの情報密度を示す指標として「語彙密度 (lexical density)」を用いた。語彙密度とは、語を実質的な内容を表す「内容語」と内容語同士を文法的に関連付ける「機能語」に分けた場合に、内容語がテキスト全語に対して占める割合をいう (Stubs, 2002)。中国語に関しては、内容語を「実詞」、機能語を「虚詞」として算出した語彙密度を情報密度の指標とする報告が複数みられることから (李, 2010)、本研究もこれに倣った。

2) SL話速の算出

SL話速としては、SL長1分あたりに発せられた音節数 (SL音節数 / min) と、Run長1分あたりに発せられた音節数 (SL瞬間音節数 / min) という2つのパラメータを採用した。SL長とはSL音声の開始から終了までの時間 (s)、Run長とはSL長からポーズ (連続した無音の時間) の合計を除いた時間 (Run, 単位: s) であり、それぞれ音声編集ソフト Wave Pad を用いて算出した。なお、庾 (2009) の実験に基づき、ポーズは0.3s以上連続する無音の時間と定義した。

3) SLスピーチ形態の設定

SLスピーチ形態としては、同時通訳の現場で一般的に用いられる「原稿読み上げ」と「即興」の2形態について調査した。具体的な調査材料については上述した通りである。

3. 訳出率の算出

藤田 (2012) は、訳出率の算出にあたって調査者による TL 全訳文を 100% と仮定する手法をとったが、このような算出法は訳文作成者によって訳出率の値が変化する可能性を否めず、十分に客観的であるとはいえない。本来、訳出率とは、SL テキストの情報量 100% に対する TL で再現された情報の割合を示す値のはずである。そこ

で、本研究では稲生&河原（2008）と類似の手法を用い、SL テキストの全語と TL テキストの全語を比較し、TL テキストにおいて再現された語の割合を訳出率として算出した。算出にあたっては SL を語単位で分割し、「虚詞」「実詞」の別なく、すべての語について TL への再現を「再現（1点）」「圧縮（0.5点）」「再現されていない（0点）」の3段階で評価した。この手法によれば、SL テキスト自体を100%とした訳出率の算出が可能となるため、訳文作成者によって訳出率の値が変化することはない。

さらに、本研究では調査者の主観による影響を可能な限り排除するため、「再現」「圧縮」「再現されていない」の判断にあたり表1～表3に示すような基準を設けた。

表1 「圧縮」とみなす場合

アスペクトの違い	例：“ <u>当地时间</u> 29号举行”（文脈より「開かれました」）を「開かれています」と訳出。
固有名詞の簡略化	例：人名“福田康夫”を姓の「福田」とのみ訳出。ただし、二回目以降は初出時に全称を訳出していれば聞き手にとって「福田」＝「福田康夫」は自明のため、「福田」のみでも圧縮とはみなさない。
語の持つ意味範囲の明らかな縮減	例1：“ <u>检验检疫问题</u> ”（ <u>検疫の問題</u> ）を「 <u>検疫の強化策</u> 」と訳出。「強化策」は「問題」よりも意味範囲が限定的なため下線部の語は圧縮とみなす。 例2：“ <u>有关项目</u> ”（ <u>関連プロジェクト</u> ）を「 <u>協力プロジェクト</u> 」と訳出。「協力」は「関連」よりも意味範囲が限定的なため下線部の語は圧縮とみなす。

表2 省略・簡略化されているが「圧縮」とはみなさない場合

普通名詞における圧縮	例：“ <u>菲方代表团</u> ”（ <u>フィリピン代表团</u> ）を二回目以降「代表团」とのみ訳出
普通名詞の代名詞への言い換え	例：“ <u>使节们</u> ”（ <u>使節ら</u> ）を二回目以降「彼ら」と訳出
聞き手にとって自明な目的語の省略	例：“ <u>驻华使节参加了活动</u> ”（ <u>中国駐在の使節がイベントに参加し</u> ）を二回目以降「 <u>中国駐在の使節が参加し</u> 」とのみ訳出
聞き手にとって自明な主語の省略	例：“ <u>中方要求菲方……</u> ”（ <u>中国はフィリピンに求めた</u> ）を、 <u>中国とフィリピンの会談</u> という前出の文脈より、「 <u>…よう求めた</u> 」とのみ訳出
並列・累加を表す接続詞“并”“同时”の省略	例：“ <u>菲方表示、理解中方所采取的措施、并邀请……</u> ”を「 <u>フィリピン側は中国の措置に理解を示し、…よう要請した</u> 」と訳出
日本語として訳出の不要な語句の省略	例：“ <u>一名即将大学毕业的十九岁的男孩儿</u> ”の「 <u>一名</u> 」の省略

表3 訳出されてはいても「再現されていない」とみなした場合

明らかな言い間違い	例1：人名“韓”（カン）を「カイ」と発音 例2：“扩大”（カクダイ）を「コウドウ」と発音
命題（セグメントにおける役割・関係性）の変化	例：“南门村附近”（南門村の付近）を「付近の村」と訳出

このような基準を踏まえて訳出率を算出した例を以下にあげる。

【例】

SL：中国国家质检总局(1)官员(1)和(1)专家(1)与(1)菲方代表团(1)举行(1)了(1)会谈(1)、重点(1)讨论(1)了(1)近期(1)进口(1)菲律宾(1)水果(1)出现(1)的(1)检验(1)检疫(1)问题(1)。< 21 点 >

TL：中国品質監督検査検疫局の(1)関係者(1)と(1)専門家が(1)、代表团(1)と(1)フィリピン産(1)果物(1)の(1)輸入(1)検疫(2)の強化策(0.5)について意見を交わしました(2)。< 14.5 点 >

上記テキストの場合、語単位で分割して得られた SL ポイント（=全語数）が 21 点であるのに対し、TL ポイント（=再現された語）は 14.5 点であるため、訳出率は $14.5 \div 21 \times 100 = 69\%$ となる。

Ⅲ 調査結果

1. SL 話速と訳出率の関係

1) R-R 同通について

図1は、R-R 同通における SL 話速と訳出率の関係を示す分散図であり、(a) に SL 音節数 / min と訳出率の関係を、(b) に SL 瞬間音節数 / min と訳出率の関係を示している。同図の特に (b) より、訳出率は SL 話速が速いほど低下する傾向がみられた。そこで、SL 話速と訳出率の関係をみるために、分析ソフト js-STAR 2012 を用いた相関分析を行ったところ、SL 音節数 / min と訳出率の間には有意な相関は認められなかったが ($r=-0.191$, $F=0.19$, $df1=1$, $df2=5$, ns)、SL 瞬間音節数 / min と訳出率の間には弱い負の相関の可能性が示唆された ($r=-0.725$, $F=5.54$, $df1=1$, $df2=5$, +)。すなわち、SL 瞬間音節数 / min が多い (SL 話速が速い) ほど訳出率は低下する傾向にあった。

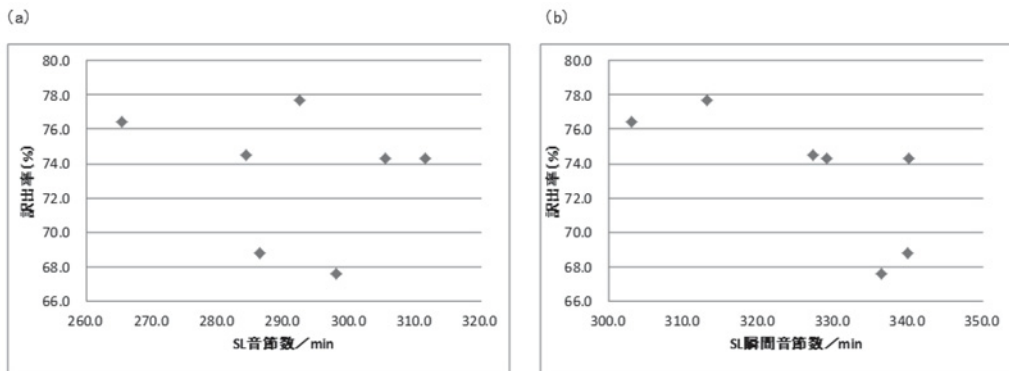


図 1 R-R 同通における SL 話速と訳出率の関係

2) R-I 同通について

図 2 は、R-I 同通の SL 話速と訳出率の関係を示す分散図であり、(a) に SL 音節数 / min と訳出率の関係を、(b) に SL 瞬間音節数 / min と訳出率の関係を示している。同図より、訳出率は SL 話速が速いほど低下する傾向がみられた。そこで、SL 話速と訳出率の関係をみるために分析ソフト js-STAR 2012 を用いた相関分析を行ったところ、SL 音節数 / min と訳出率の間に有意な中程度の負の相関がみられ ($r=-0.628$, $F=9.79$, $df1=1$, $df2=15$, $p<.01$)、SL 瞬間音節数 / min と訳出率の間に有意な強い負の相関がみられた ($r=-0.723$, $F=16.42$, $df1=1$, $df2=15$, $p<.01$)。すなわち、SL 話速が速いほど訳出率は低下することが示された。

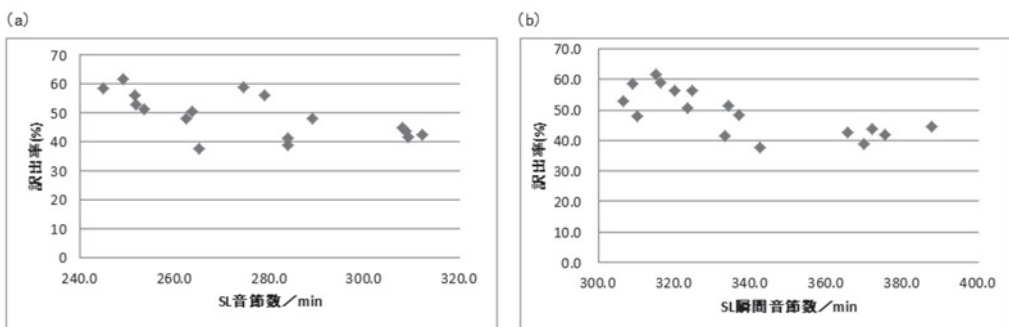


図 2 R-I 同通における SL 話速と訳出率の関係

3) I-I 同通について

図 3 は、I-I 同通における SL 話速と訳出率の関係を示す分散図であり、(a) に SL 音節数 / min と訳出率の関係を、(b) に SL 瞬間音節数 / min と訳出率の関係を示している。同図の特に (a) より、訳出率は SL 話速が速いほど低くなる傾向がみられた。そこで、SL 話速と訳出率の関係をみるために分析ソフト js-STAR 2012 を用い

た相関分析を行ったところ、SL 瞬間音節数 / min と訳出率の間には有意な相関はみられなかったが ($r=-0.500$, $F=0.67$, $df1=1$, $df2=2$, ns)、SL 音節数 / min と訳出率の間に有意な非常に強い負の相関がみられた ($r=-0.956$, $F=21.25$, $df1=1$, $df2=2$, $p<.05$)。すなわち、SL 話速が速いほど訳出率は低下することが示された。

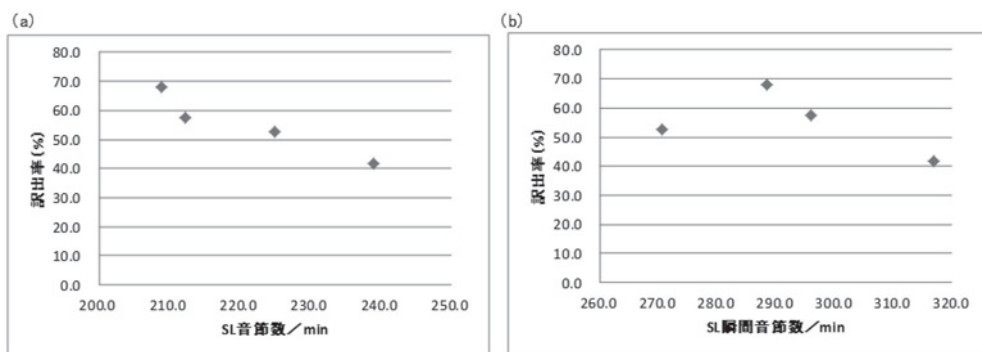


図 3 I-I 同通における SL 話速と訳出率の関係

4) 結論

以上より、通訳形態の如何にかかわらず、SL 話速が速いほど訳出率は低下することが客観的データをもって示された。特に、R-R 同通の訳出率が SL 話速の影響を受けていたことから、SL 話速は事前に訳文の推敲が可能であったとしても回避不可能なほど強い阻害要因であることが示唆された。この結果は、通訳者は早口のスピーカーに最もストレスを感じるとする AIIC の調査結果 (I-2-2 参照) に一致する。

2. SL 情報密度と訳出率の関係

SL 語彙密度と訳出率の関係をみるために分析ソフト js-STAR 2012 を用いた相関分析を行ったところ、R-R 同通と I-I 同通においてはいずれも有意な相関は認められなかった ($r=0.128$, $F=0.08$, $df1=1$, $df2=5$, ns ; $r=-0.120$, $F=0.03$, $df1=1$, $df2=2$, ns)。すなわち、これら通訳形態においては、SL 語彙密度と訳出率の間に相関関係は認められず、Dillinger (1994) が示した「SL の情報密度が高くなるほど通訳の正確さは低下する」との実験結果には一致しなかった。

一方、図 4 に示すように、R-I 同通においては SL 語彙密度と訳出率の間に弱い正の相関の可能性があった ($r=0.481$, $F=4.52$, $df1=1$, $df2=15$, +)。すなわち、SL 語彙密度 (SL の情報密度) が高くなるほど訳出率も上がるとの傾向が示され、Dillinger (1994) とは相反する結果となった。

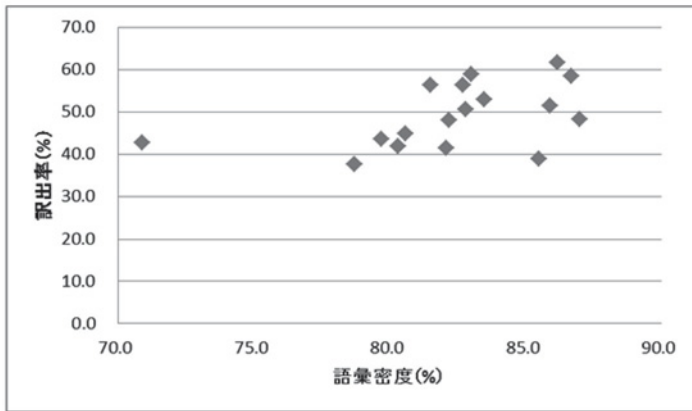


図4 R-I 同通における SL 語彙密度と訳出率の関係

ここで、再び図2を参照すると、R-I 同通では SL 話速が速いほど訳出率が低下した一方で、SL 音節数/min の範囲は 244.9 ~ 312.1 音節/min、SL 瞬間音節数/min の範囲は 306.4 ~ 387.6 音節/min でばらつきがあり、これら音節数の差が SL 語彙密度と訳出率の相関に影響した可能性は否定できない。そこで、SL 話速と TL 語彙密度の関係を図5に示す分散図にまとめた。うち (a) は SL 音節数/min と SL 語彙密度の関係を、(b) は SL 瞬間音節数/min と SL 語彙密度の関係を示している。

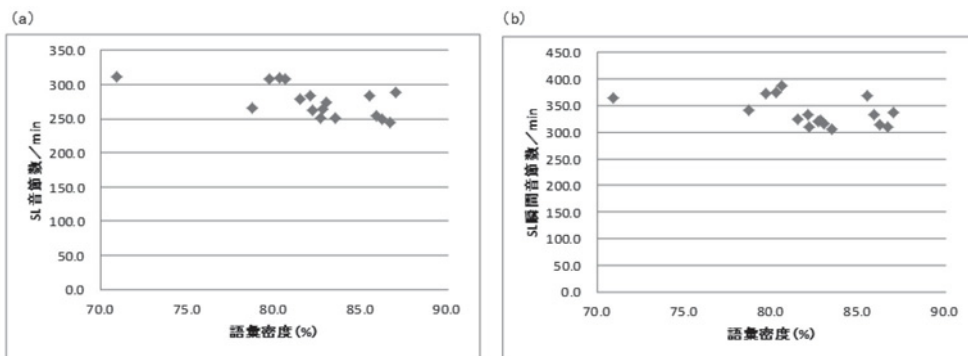


図5 R-I 同通における SL 話速と SL 語彙密度の関係

図5より、SL 語彙密度が上がるほど SL 音節数/min と SL 瞬間音節数/min は減少する傾向がみられた。そこで、SL 話速と SL 語彙密度の関係をみるために相関係数を計算したところ、SL 音節数/min と SL 語彙密度の間には有意な中程度の負の相関がみられた ($r=-0.601$, $F=8.47$, $df1=1$, $df2=15$, $p<.05$)。また、SL 瞬間音節数/min と SL 語彙密度の間には弱い負の相関の可能性があった ($r=-0.468$, $F=4.20$, $df1=1$, $df2=15$, +)。すなわち、R-I 同通の調査材料において、SL 音声の読み手は SL 語彙密度の高いテキストほど遅い話速で読んでいたことになる。上述のよ

うに、本調査では SL 話速が遅いほど訳出率は高くなっていることから、SL 語彙密度が高い（すなわち SL 話速が遅い）ほど訳出率が高く、SL 語彙密度が低い（すなわち SL 話速が速い）ほど訳出率が低いとの結果は、純粋に SL 語彙密度の変化を反映したものではなく、SL 話速の影響を強く受けていると推測される。

以上の結果から、本調査では訳出率に対する SL 語彙密度単体の影響は測れていないことになる。純粋に SL 語彙密度と訳出率の関係のみをみたいのであれば、実験的手法で SL 話速を統一し、SL 語彙密度のみを変化させた条件を設けて比較分析を行う必要があるが、本研究では調査材料の不足からこれ以上の検討は不可能であった。

3. SL スピーチ形態と訳出率の関係

図6は、R-R 同通、R-I 同通、I-I 同通の訳出率を比較するグラフである。図より、I-I 同通の訳出率は R-R 同通の訳出率に比べ低い値にとどまったものの、R-I 同通よりは高い値を示した。これより、TL 訳出形態が即興である場合、SL スピーチ形態が「原稿読み上げ」であるほうが「即興」である場合よりも訳出の困難性が増すことが客観的データをもって示された。この結果は、通訳者は原稿を棒読みするスピーカーに大きなストレスを感じるとする AIIC の調査 (I-2-3 参照) に一致する。

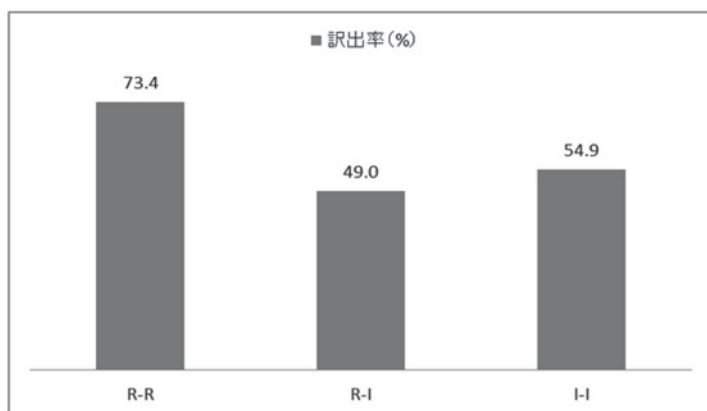


図6 R-R 同通、R-I 同通、I-I 同通の訳出率比較

IV 論議：日中の言語特性の差が訳出率に与える影響

1. 聴取 - 発話間隔 (ear - voice span : EVS)

本調査では、どの通訳形態においても SL 話速が訳出率に強く影響することが確認された。この結果は、同一内容の伝達に要する日中両語の音節数の差に起因して、SL 話速が速くなるほど日本語への訳出が間に合わなくなった可能性を示唆している。

そこで、SL 話速の上昇と訳出率低下の相関が日中両語の言語特性の差に起因することを検証するため、本章では SL 聴取から TL 訳出までの遅れに着目する。この遅れは、一般的に「聴取 - 発話間隔 (ear-voice span : EVS)」と呼ばれ、同時通訳に特有の現象とされている (Pöchhacker, 2004 ; 小松, 2006)。EVS が生じる原因は各言語の特性によって異なり、例えば英→日同時通訳であれば、S + V + O を基本構造とする SL (英語) と S + O + V を基本構造とする TL (日本語) との語順の違いに起因して、意味の単位をつかむまで (すなわち、訳出可能となるまで) に相当長い「待ち (ウェイティング)」が必要とされることがあり、これがいわゆる EVS となって訳出作業を困難にする (小松, 2006)。

中→日同時通訳の場合、英→日同時通訳と同様に SL (中国語) が S + V + O 構造、TL (日本語) が S + O + V 構造という違いはあるものの、動詞と目的語の位置を除いてはほぼ順送りの訳出が可能であるため、英語ほど長いウェイティングは発生しないと思われる。例えば、表 4 に示す例より、中→日訳出にあたっては、動詞の訳出を後回しにする他はほぼ中国語と同じ語順で順送りに訳出すればよいことがわかる。しかし、これまで述べてきたように、中→日同時通訳の場合には同一内容の伝達に要する音節数が中国語と日本語で約 1.5 倍 (経験値) 異なるという問題があり、これが EVS 発生の主な要因になると予測される。

表 4 中→日同時通訳における順送り訳出の一例

上段：原文	下段：訳文
日中两国需要相互了解、共同合作。	
にっちゅうりょうこくはそうごりかいときょうりょくがひつようです。	
同时、我认为不拘于特定的立场和观念、进一步活跃国民各界各层的交流、极为重要。	
とどうじに、わたしはとくていのたちばとかんねんにこだわらず、いっそうこくみんのかっかいかくそうのこうりゅうをかっばつにすることが、きわめてじゅうようだとおもいます。	

例えば、表 4 の“日中两国需要相互了解，共同合作。同时，我认为……”という SL テキストを同時通訳する場合、“日中两国”と聞いた時点で通訳者は SL に対して少し遅れて「日中两国は」と訳し始める。しかし、中国語の 4 音節 (“日中两国”) に対し日本語は倍の 8 音節 (“にっちゅうりょうこく”) 必要なため、多少早口で訳出したとしても SL に対し TL は少しずつ後ろへずれこむことになる。結果として、次の“同时”からの SL センテンスが開始されたときには、まだ“需要 (…がひつようです)”あたりを訳出している可能性があり、この場合、“同时 (…とどうじに)”をずいぶん遅れて (長い EVS を介して) 訳出することになる。あるいは、SL 話速が非常に速い場合には、“同时”からの SL センテンスの開始部分を聴取し損ない、訳出不能とな

ることによって訳出率低下につながる恐れがある。

以上を踏まえると、R-R 同通、R-I 同通、I-I 同通間で EVS の動向を比較分析すれば、訳出率低下をもたらす要因が、推測どおり同一内容の伝達に要する日中両言語の音節数の差であるか否かを検証できるはずである。

2. 調査手法

1) 調査材料

R-R 同通を R-R 群、R-I 同通を R-I 群、I-I 同通を I-I 群として各群間で EVS と訳出率の比較分析を行った。また、本比較分析にあたっては、R-R 同通、R-I 同通、I-I 同通すべてを担当した通訳者 1 名（以下、通訳者 X）のデータのみを取り上げた。これは、R-R 同通と R-I 同通の調査材料が複数の通訳者のパフォーマンスを含むのに対し、I-I 同通の調査材料は 4 本中 3 本が通訳者 X のパフォーマンスであるため、このような条件で算出される複数通訳者の平均値の群間比較にはあまり意味がないためである。

2) EVS の算出

調査材料ごとに表 5 のような一覧を作成し、各 Run の SL start とこれに対応する TL start の差から Run ごとの EVS (s) を算出した。なお、表 5 は R-R 群の EVS 算出例であるが、R-R 群は事前に訳文を推敲可能なことから、場合によっては TL が SL に先行する場合があった。例えば、表中の Run 2 や Run 15, Run 16 のようにマイナス値の EVS は、SL が発話される前に TL が発せられたことを示す。ただし、これは R-R 群に特有の現象であり、R-I 群、I-I 群にはみられなかった。また、表中の TL start と EVS が空欄の部分は、当該 Run が訳出されなかったこと（訳出率 0%）を示す。このほか、各 Run に対応する訳出率を算出し、EVS と併記した。

表 5 EVS 算出の一例 (R-R 群)

Run	b-1						
	Run長	SL start	SL finish	ポーズ長	TL start	EVS	訳出率
1	1.9	2.4	4.3	0.3			
2	3.9	4.6	8.5	0.3	3.4	-1.2	100.0
3	4.0	8.8	12.8	0.4	9.7	0.9	66.7
4	4.1	13.2	17.3	0.4	15.2	2.0	70.8
5	0.9	17.7	18.6	0.3	19.8	2.1	100.0
6	4.7	18.9	23.6	0.4	20.8	1.9	66.7
7	2.3	24.0	26.3	0.4	24.4	0.4	100.0
8	2.5	26.7	29.2	0.3	28.2	1.5	85.7
9	3.5	29.5	33.0	0.5	31.0	1.5	75.0
10	2.9	33.5	36.4	0.5	36.4	2.9	100.0
11	5.0	36.9	41.9	0.4	40.4	3.5	80.0
12	0.8	42.3	43.1	0.3			
13	2.1	43.4	45.5	0.3			
14	2.1	45.8	47.9	0.3			
15	0.7	48.2	48.9	0.3	47.2	-1.0	100.0
16	0.5	49.2	49.7		48.0	-1.2	100.0

3. 結果

1) R-R 群の EVS と訳出率の関係

図 7 に、R-R 群における EVS と訳出率の関係を示す。

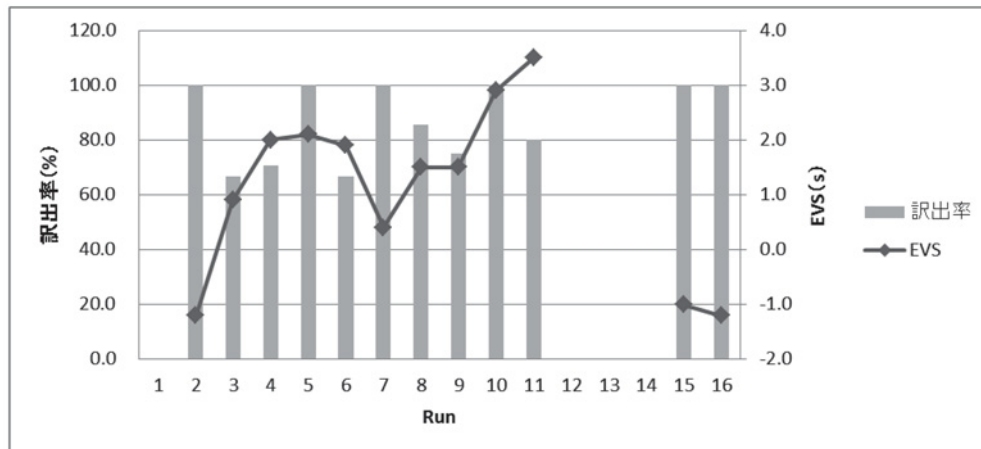


図 7 R-R 群の EVS と訳出率の関係

図 7 から明らかなように、R-R 群では訳出率が 60% を下回る Run は存在せず、EVS の長短と各 Run の訳出率の関係に一定の傾向はみられなかった。EVS は時間の経過とともに長くなる傾向がみられ、Run 11 で最長の 3.5s に達した。その後、Run 12 ~ Run14 は訳出されず、最後の Run15, Run16 が、それぞれ -1.0s、-1.2s の EVS をもって SL よりも先行して訳出されていた。すなわち、R-R 群においては事前に訳文を推敲可能であるにもかかわらず、TL は時間の経過とともに SL から徐々に遅れをとっていることがわかった。そして、Run 11 で EVS が最長となった時点で、Run 12 ~ Run14 の訳出を意図的に行わないことで遅れを取り戻し、さらに最後の Run15, Run16 をそれぞれ 1.0s ほど先行して訳出することでこれら Run における 100% の訳出率を確保したものとみられる。

なお、訳出率 0% であった（遅れを取り戻すのに利用された）Run 12 ~ Run14 の SL ポイント（算出手法は II - 3 参照）の合計は 17 点であり、R-R 群全体の SL ポイント 119 点に対する割合は 13.3% に達していた。よって、これら Run が訳出されなかったことが、R-R 群全体の訳出率を引き下げる大きな要因となったといえる。

以上より、R-R 群においては、同一内容の伝達に要する中国語と日本語の音節数の差が中→日の訳出の遅れをもたらし、訳出率を引き下げることが検証された。また、本結果より、中→日同時通訳における中国語と日本語の音節数の差は、事前に訳文を推敲可能な場合にも完全には克服不可能なほど重大な訳出阻害要因であることが確認された。

2) R-I 群の EVS と訳出率の関係

図 8 に、R-I 群の EVS と訳出率の関係を示す。

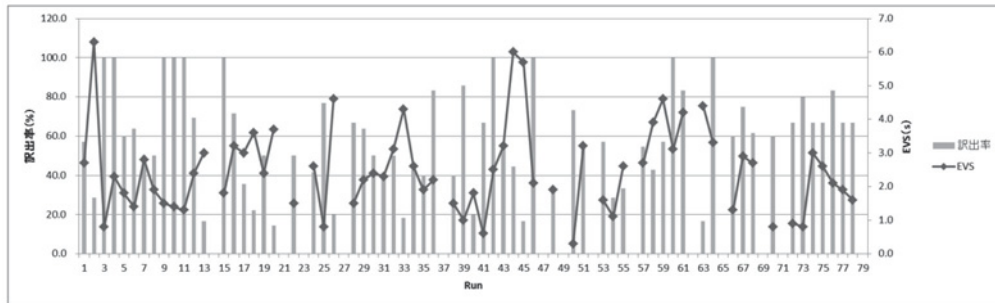


図 8 R-I 群の EVS と訳出率の関係

図 8 より、R-R 群は R-I 群と異なり、訳出率と EVS が Run 間で非常に激しく変動していることがわかる。また、比較的短い EVS で高めの訳出率を維持する期間（以下、「訳出率維持期間」と、EVS が伸びて急激に訳出率が低下する期間（以下、「遅延期間」とがほぼ交互に出現していることが明らかである。具体的には、Run 1 で、EVS 2.7s をもって比較的高い訳出率 57.1% が示された後（Run 1：訳出率維持期間）、Run 2 で EVS は急激に延長し、それに伴って訳出率が 28.6% にまで激減している（Run 2：遅延期間）。その後、Run 3 で EVS 0.8s、訳出率 100% が示されると、続く Run 4～Run 12 の期間では、EVS は多少変動しながらも大部分が 2.0 s 以内で抑えられ、訳出率もほぼ 60.0% 以上の高い水準を維持している（Run 3～Run 12：訳出率維持期間）。しかし、Run 13 では再び EVS が 3.0s と長めの数値を示し、これに伴って訳出率は 16.7% にまで激減している（Run 13：遅延期間）。このようにして順に見ていくと、Run 13～Run 14 は遅延期間、Run 15～Run 16 は訳出率維持期間、Run 17～Run 18 は遅延期間…というように、各期間の長さには差はあるものの、訳出率維持期間と遅延期間が交互に出現していることがわかる。また、遅延期間は前述のように長めの EVS で訳出率が急激に低下する期間のほかに、Run 14 のように訳出されていない期間も含む。そして、R-R 群との大きな違いとして、訳出率維持期間の最終 Run と、続く遅延期間の最初の Run の訳出率の差が非常に大きいことがあげられる。例えば、訳出率維持期間の最終 Run 12 と、これに続く遅延期間の Run 13 とを比較すれば明らかなように、各期間の境界箇所において、訳出率は徐々に低下するのではなく急激に低下している点で特徴的である。図 8 より、同様のことは、Run 25 と Run 26、Run 32 と Run 33、Run 36 と Run 37、Run 39 と Run 40…というように、ほぼすべての訳出率維持期間と遅延期間の境界箇所についていえる。また、これら箇所では訳出率が急激に低下すると同時に、急激な EVS の上昇がみられる（ただし、

訳出率が0%にまで低下している場合にはEVSは示されない)。このことは、前のRunの訳出が次のRunに食い込んだことで、当該Runの訳出が時間的に阻害されたことを示している。

また、遅延期間の最終Runと、続く訳出率維持期間の最初のRunの訳出率の差が非常に大きいことも特徴的である。例えば、遅延期間のRun 14と訳出率維持期間のRun15とを比較すれば明らかなように、各期間の境界箇所において、訳出率は徐々に回復するのではなく急激に上昇している。図8より、同様のことは、Run27とRun28、Run 33とRun 34、Run 37とRun 38、Run 40とRun 41…というように、ほぼすべての遅延期間と訳出率維持期間の境界箇所についていえる。また、これら箇所では訳出率が急激に回復するだけでなく、EVSの回復（短縮）もみられる。これは、前のRunでの訳出率低下を受けて、遅れを挽回しようとする通訳者の意識が働いたためと思われる。よって、続くRunではEVSが回復することで訳出率維持期間に転じ、これに伴って急激な訳出率の回復がみられたものと推定される。

以上のような遅延期間における度重なる訳出率の激減が、R-I群全体の訳出率を大幅に引き下げたことは疑いようもない。これより、R-R群と同様に、同一内容の伝達に要する中国語と日本語の音節数の差が中→日の訳出の遅れをもたらし、訳出率を引き下げることが検証された。

3) I-I群のEVSと訳出率の関係

図9に、I-I群におけるEVSと訳出率の関係を示す。

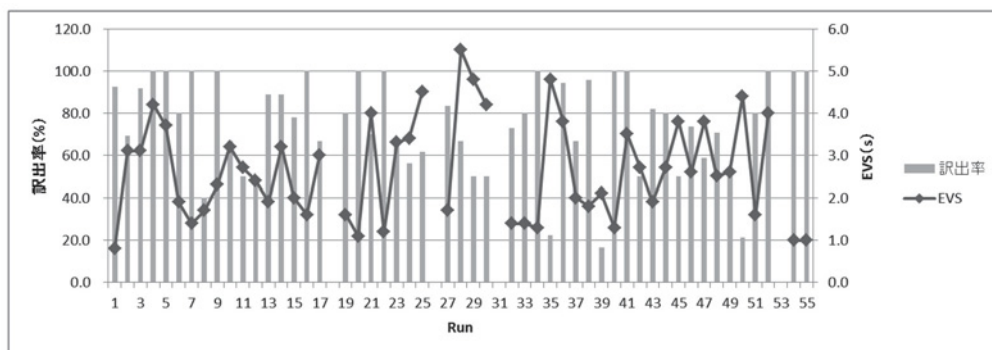


図9 I-I群のEVSと訳出率の関係

図9より、I-I群では中間部分を除くほとんどのRunにおいて、EVSの長さに影響されずに50%を超える訳出率を維持したことがわかる。また、訳出されなかったRunは、Run18、Run26、Run31、Run53のわずか4箇所にとどまっていた。ただし、中間部分のRun 25で4.0sを超えるEVSに達した後は、R-I群と同様の遅延期間と訳

出率維持期間が Run39 辺りまで交互に出現した。そして、Run 40～Run49 までは訳出が安定したが、Run 50 から再び遅延期間と訳出率維持期間の反復がみられた。

すなわち、I-I 群では R-I 群ほどの訳出の遅れはみられず、仮に Run 4 や Run 21 にみられるような大幅な遅れが発生したとしても訳出率を急激に低下させるには至らないことがわかった。これは、SL スピーチ形態が即興である I-I 群は R-I 群に比べて SL 話速が遅い (R-I 群の SL 音節数 = 263.6 音節 / min、I-I 群の SL 音節数 = 208.8 音節 / min) ため、前の Run の訳出が多少食い込んだところで、ある程度は挽回可能であることが一因と考えられる。また、このような推測は SL 話速が遅いほど訳出率が上がるとする上述の結果とも矛盾しない。ただし、何らかの原因で EVS の長さが許容値を超えた場合には (例えば Run 25 の 4.5s)、R-I 群と同様の遅延期間と訳出率維持期間の反復に突入し、訳出が元の安定を取り戻すには一定の時間が必要であった。

以上より、SL 音節数 / min が I-I 群 < R-I 群である本稿の SL 話速条件において、I-I 群でも中国語と日本語の音節数の差によって訳出率が引き下げられはするが、R-I 群に比べれば訳出の遅れを挽回しやすく、訳出率の低下はある程度抑制されることが明らかになった。このことから、I-I 群では R-I 群を上回る訳出率を実現できたものと判断される。

4. 結論と今後の課題

本研究では、SL スピーチ形態 (原稿読み上げか即興か) の違いや TL 訳出形態 (原稿読み上げか即興か) の違いにかかわらず、SL の話速が訳出率に強く影響し、SL 話速が速いほど訳出率は低下することが明らかとなった。また、その原因として、日本語は同一内容の情報を伝達するにあたって中国語よりも多くの音節数を必要とすることから、SL に対し次第に遅れを生じるためであることが客観的データをもって検証された。中国語と日本語の音節数の差は、TL を事前に推敲可能な R-R 同通においても完全には回避不可能なほど強い阻害要因であり、本研究では R-I 同通、I-I 同通、R-R 同通の順で訳出率に強く影響した。

また、SL 語彙密度と訳出率の関連性については本研究の手法では明らかにされなかった。中→日同時通訳における SL 語彙密度の影響を検証するには、語彙密度以外の SL 入力変数を一定にした条件下で再調査を行う必要がある。また、情報密度の指標として語彙密度を用いることの是非についても検討の余地がある。

このほか、SL スピーチ形態と訳出パフォーマンスの関係については、TL 訳出が即興である場合、「SL 原稿読み上げ」のときのほうが「SL 即興」のときよりも訳出が困難になることがわかった。ただし、SL スピーチ形態とは SL 語彙密度、話速、SL テキスト全体に対するポーズの割合、各ポーズの平均長さ、Run の平均長さ等の変数を含む複合的なパラメータである。そこで、SL スピーチ形態を構成する各変数を通訳形態間で比較した結果を表 6 にまとめる。

表6 SLスピーチ形態を構成する各変数の通訳形態間比較

通訳形態	SL語彙密度(%)	SL音節数/min	SL瞬間音節数/min	SLポーズ割合(%)	SLポーズ平均(s)	SL Run平均(s)
R-R	81.5	292.0	327.0	10.7	0.5	4.0
R-I	82.3	275.8	337.7	18.3	0.6	2.6
I-I	69.0	221.3	293.0	24.3	0.6	1.8

表6より、I-IのSLテキスト（即興スピーチ）に比べ、R-R, R-IのSLテキスト（原稿読み上げ）はSL語彙密度が高く、SL話速が速く、SLテキスト全体に対するポーズの割合が小さく、Run長が長いことがわかる。すなわち、「SL原稿読み上げ」は「SL即興」に比べてテキストの言語的余剰が小さく、これに起因して訳出率が低下したとみられる。

ここで、表6に示すスピーチ形態を構成する複数の変数のうち、少なくともSL話速が訳出率の変化に大きく作用することは、R-I同通に対する分析から明らかである（Ⅲ-1-2参照）。一方で、本研究ではSL語彙密度と訳出率の間に相関はみられなかった（Ⅲ-2参照）。さらに、R-R, R-I, I-Iともに、js-STAR 2012を用いた相関分析の結果では、SLテキスト全体に対するポーズの割合と訳出率（ $r=-0.513$, $F=1.79$, $df1=1$, $df2=5$, ns ; $r=-0.069$, $F=0.07$, $df1=1$, $df2=15$, ns ; $r=0.392$, $F=0.36$, $df1=1$, $df2=2$, ns）、各ポーズの平均長さ（ $r=-0.009$, $F=0.05$, $df1=1$, $df2=5$, ns ; $r=0.142$, $F=0.31$, $df1=1$, $df2=15$, ns ; $r=0.146$, $F=0.04$, $df1=1$, $df2=2$, ns）、Runの平均長さ（ $r=0.603$, $F=2.85$, $df1=1$, $df2=5$, ns ; $r=0.228$, $F=0.82$, $df1=1$, $df2=15$, ns ; $r=-0.534$, $F=0.80$, $df1=1$, $df2=2$, ns）のいずれにも有意な相関は認められなかった。したがって、SLスピーチ形態を構成する変数のうち、TL訳出に影響する主な変数はSL話速であると推察される。しかし、本研究におけるI-I同通の調査材料が4本と極めて少なかったことを考慮すれば、本分析結果のみから、SLスピーチ形態を構成するSL話速以外の変数はTL訳出に影響しないと断定することは望ましくない。

すなわち、SLスピーチ形態を構成する各種変数が複合的に作用し、訳出率を変化させる可能性を否定することはできない。しかし、これら複数の変数がどのような力関係と役割をもってTL訳出へ作用するかを考察するには、調査材料を一層充実させた上でのさらなる分析が必要である。さらには、SLスピーチ形態間でこれら変数条件を人為的に操作した実験的な手法も必要と考えられる。

【参考文献】

- 相原茂 (2005) 『中国語学習ハンドブック 改訂版』 大修館書店
- 稲生衣代・河原清志 (2008) 「放送通訳における同時通訳と時差通訳の比較」『通訳翻訳研究』(8) : pp. 37-56.
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健 (2012) 『言語学 第2版』 東京大学出版会
- 神崎多實子・待場裕子 (1999) 『中国語通訳トレーニング講座 逐次通訳から同時通訳まで』 東方書店
- 木佐敬久 (1998) 「放送通訳の聞きやすい速度とは?—ビデオ調査による視聴者の反応」『放送研究と調査』48 (3) : pp. 40-63.
- 小松達也 (2003) 『通訳の英語 日本語』 文芸春秋
- 小松達也 (2006) 『通訳の技術』 研究社
- 塚本慶一 (2003) 『中国語通訳への道』 大修館書店
- 原不二子 (2004) 『通訳ブースから見る世界』 ジャパンタイムズ
- 藤田由香利 (2012) 「ニュース番組における時差通訳～中文日訳に関する訳出率分析～」『杏林大学大学院国際協力研究科 大学院論文集』(9) : pp. 63-73.
- 郭锦桴 (1993) 『汉语声调语调阐要与探索』 北京语言学院出版社
- 李小凤 (2010) 「从词汇密度看电视语体的阶列」『现代传播』2010年第12期 中国传媒大学 : pp. 170-171.
- 卢惠惠 (2011) 『现代汉语词汇学』 上海世纪出版股份有限公司
- 庾恺珊 (2009) 「英汉同声传译中译语语速与信息量的关系」 厦門大学修士論文
- 吴远宁 (2003) 「文本同声传译材料的语言特点分析」『中南大学学报 (社会科学版)』9 (4) : pp. 552-555.
- 朱景松 (2007) 『现代汉语虚词词典』 语文出版社
- Danica Seleskovitch (1968) *L'interprète dans les conférences internationales* 『会議通訳者 国際会議における通訳』ベルジュロ伊藤宏美訳 (2009)、研究社
- Dillinger, M (1994) "Comprehension during Interpreting: What do Interpreters Know that Bilinguals Don't?" *Lambert and Moser-Mercer* (eds) : pp. 155-89.
- Franz Pöchhacker (2004) *Introducing Interpreting Studies* 『通訳学入門』 鳥飼久美子監訳 (2008)、みすず書房
- Michael Stubbs (2002) *Words and Phrases : Corpus Studies of Lexical Semantics* 『コーパス語彙意味論 語から句へ』 南出康世/石川慎一郎監訳 (2006)、研究社
- Roderick Jones (1998) *Conference Interpreting Explained* 『会議通訳』 ウィンター

良子／松縄順子訳（2007）、松柏社

【参考 URLs】

ゴカクル「同時通訳よもやま話」 <http://gogakuru.com/blog/tsuyaku/2012/01/003671.php>（2012年7月28日閲覧）

AIIC “The AIIC Workload Study” <http://aiic.net/page/888>（2012年7月31日閲覧）

2012年秋学期 博士後期課程（博士）修了論文

2013. 3. 31

	専攻	学位授与者	博士論文題目	指導教授
1	開発問題	左 咏梅	中国における外資系企業の会社名・製品名の研究	武内 教授
2	開発問題	高 立偉	中国語形容詞の動態性と時間表現に関する考察 —日本語との対照研究から—	今泉 教授

2013年 3 月 論文提出による博士学位授与論文

2013. 3. 6

	所属・職名	申請者氏名	博士論文題目	紹介教授
1	NPO 法人小石川 後楽園庭園保存会 事務局長（理事）	高橋 豊	日本の文化外交の将来戦略	松田 和晃

2012年秋学期 博士前期（修士）課程修了論文

2011.3.31

	申請者氏名	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
1	池田 翔一		交際費課税に関する一考察	千葉 洋
2	郭 琳		所得概念における所得区分の在り方について の一考察	千葉 洋
3	斉 龍	※	中国民族系自動車メーカーの現状と課題 —奇瑞、吉利、比亞迪、を中心に	田中 信弘
4	藤井 洋行		無償取引規定の適用範囲に関する一考察	千葉 洋
5	八木 俊樹		租税法規不遡及に関する一考察	千葉 洋
6	王 霞		環境と経済：中国のエネルギー戦略	馬田 啓一
7	大沢友花里		ピット・リバーズ博物館における日本コレク ションの研究	楠家 重敏

	申請者氏名	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
8	韓 氷		1981年の映画「魯迅伝」に見る魯迅評価について	小山 三郎
9	金 黎琳		新語からみる韓流分析 —日本（語）への浸透を中心に—	鄭 英淑
10	小山 菜摘		「あくた」の流れ	玉村 禎郎
11	嶋崎 雄輔		疑問副詞「どうして・なぜ・なんで」の語用論的用法	金田一秀穂
12	隋 春珊		条件表現に関する日中対照 —「たら」を中心に—	今泉 喜一
13	高畑 伸子	※	パフォーマンス評価を用いた形成的評価による日本語口頭表現の運用力育成 —CEFR、JFスタンダード、日本語 Can-doとの照合と応用から—	金田一秀穂
14	陳 業		「N + の + まえ」と「N + まえ」についての研究	今泉 喜一
15	田 帥		現代中国語の新受身表現「被 XX」について —「被」の新しい使用方法に関する研究—	今泉 喜一
16	由 欣玉		中国語介詞“在”と日本語格助詞「に」「で」の対照研究	今泉 喜一
17	劉 項霏	※	中国語母語話者の日本語に見られる誤用分析	玉村 禎郎
18	野島 真美		東日本大震災の派遣救援者の惨事ストレスに関する研究	角田 透
19	溝口 敦子		必須医療品の入手可能性改善に向けた取り組みに関する研究：発展途上国への介入の文献調査	北島 勉
20	室田 力		海外の地震災害に対する我が国の緊急援助の医療評価に関する研究	北島 勉
21	山下菜穂子		本邦における男性同性愛者に対するH I V感染予防啓蒙活動の効果と今後の課題	田口 晴彦
22	川端谷津子		同時通訳における起点テキスト特性と訳出パフォーマンス—中国語から日本語への訳出の場合—	塚本 尋
23	呉 雅雯		日中時差通訳における情報処理の手法に関する一考察 —凝縮化と明示化を中心に—	塚本 慶一
24	呉 珍珍		法廷通訳資格試験の一考察 —法廷通訳資格試験を新設する際の試験内容を中心に—	塚本 慶一
25	朴 梅花		通訳における言語干渉について —日中同形語を中心に—	塚本 慶一

	申請者氏名	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
26	余 麗君	※	翻訳小説における「トイウ」についての中国語訳考察—夏目漱石『吾輩は猫である』を研究材料として—	塚本 慶一
27	楊 瑩		日中通訳翻訳における「倒訳」の応用	塚本 尋
28	林 舒		帰化翻訳と異化翻訳の時代性についての—考察 —中国近代における翻訳語彙を中心に—	塚本 尋

※リサーチペーパー

2013年春学期 博士前期課程（修士）修了論文

2013.9.30

	申請者氏名	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
1	劉 曉好		労働契約における誠実配慮義務に関する考察	阿久澤利明
2	王 晴		日本語のカタカナ表記による意味の変化について—形容詞を中心に—	金田一秀穂
3	徐 錚		「乾杯」の語史—漢語の展開についての考察	玉村 禎郎
4	張 雯	※	「日中同形異義語」—意味をめぐって	玉村 禎郎
5	趙 文麗	※	中国語動詞の「テンス」と「アスペクト」について—日中時相表現対照研究—	今泉 喜一
6	前田 公子		視点を表すテクルの会話における用いられ方	荒川みどり
7	刘 元		日本語の「出る」「入る」と中国語の「出」「入」について—認知言語学の観点から—	金田一秀穂
8	太田 静恵		作家が嫌う挿絵画家 ～作家オスカー・ワイルドと画家オーブリー・ビアズリー～	赤井 孝雄

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	左 咏梅
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲国第 27 号
学位授与の日付	平成 25 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規程第 5 条
学位論文の題目	「中国における外資系企業の会社名・製品名の研究」
審査委員 主査	杏林大学総合政策学部教授 経済学博士 内 藤 高 雄
副査	杏林大学総合政策学部客員教授 商学博士 武 内 成
副査	千葉商科大学名誉教授 経済学博士 影 山 僖 一

要 旨

左咏梅氏より提出された博士学位論文「中国における外資系企業の会社名・製品名の研究」は、次の各章より構成されている。

序論

本論文は中国における外資系企業の会社名・製品名を研究した論文であり、その研究アプローチとしては仮説検証型アプローチを採用している。そこでまず序論で左氏は仮説を呈示し、研究アプローチとして仮説検証型を採用することを宣言している。

1990年代に入り、いわゆる中間層の増加とも相俟って、急速に進展した中国市場では、欧米企業ならびに日本企業が、企業名、及び製品名としてどのような漢字表記を採用するかが重要であると左氏は指摘している。何故ならば中国では外形企業の企業名、製品名を中国語表記することが要求されているからである。そしてこの問題は中国の消費者の商品選択行動と密接に関係しており、第1章第4節で分類した5つのネーミング法で考えるべきであるとの仮説を呈示し、この仮説の検証を試みるのである。

第1章 中国における会社名、製品名に関する研究系譜

第1章では中国の会社名、製品名について、言語学の視点から論じている。すなわ

ち第1節ではまず、この問題に関する沈国威、陳潔光、薛東権、胡品品、王巫、金京淑、莫邦富らの、中国国内の先行研究について考察している。とりわけ左氏はビジネスの視点からネーミング研究を行った莫邦富の研究を高く評価し、彼の示した中国語ネーミングの分類方法を自らの研究の参考にしている。そしてこれらの研究を前提にして、第2節では「形、音、義」という、企業名、製品名のネーミングに影響する言語学的要素について考察しているのである。さらに第3節で会社名、製品名のネーミングについて言語学的に研究したうえで、第4節でネーミングの方法を、①発音型ネーミング、②意味型ネーミング、③発音兼意味型ネーミング、④解釈型ネーミング、⑤原語移行型ネーミングの5つに分類している。①の発音型ネーミングは、言語の発音によく似たものをあてはめるものである。漢字における発音の要素のみをとらえたネーミングである。②の意味型ネーミングは言語の意味を直接的に再現しようとしたものである。③の発音兼意味型ネーミングは言語の発音をできうる限り再現しようとすると同時に、漢字の組み合わせによって意味も表現するものである。④の解釈型ネーミングは表記される会社の起源や経歴を考察し、ここから中国語に置き換えるものである。⑤の原語移行型ネーミングは原語の会社名および製品名をそのまま中国語に置き換えるものである。左氏はこの分類方法で産業あるいは製品に対する中国人の見方を明らかにすることができるとしている。

第2章 中国市場における消費者の特徴と消費動向

中国に進出した外資系企業にとって、中国の消費者がどのような製品を購入し、どのような消費行動をとるのか、すなわち消費動向を把握することは最大の関心事である。そこで左氏は中国市場における消費者の特徴と消費動向を考察するにあたって、経済の自由化の恩恵を受けた企業の経営者、投資成功者などの富裕層、企業幹部や知識人階層、大都会の新中産階級、好業績企業の職員集団、個人・自営業者らの中間層、今後消費の中心となるであろう、いわゆる一人っ子世代である新世代の3階層に分けて考察した。

これらの3階層に共通する消費動向の特徴として挙げられることは、ブランド志向である。品質に優れた、ステータスとして、あるいはライフスタイルに高い価値を持つブランド品を手に入れるためには、中国人は高い対価を払うことをいとわないと言える。

また個別の特徴としては、まず富裕層は顕示欲が強く、ステータス、優越感を維持するために外資系企業の高級ブランドに固執しており、その原因として左氏は中国の面子文化を指摘している。次いで中間層は国内のブランド品には高い関税がかけられているため、ブランド品購入のために、海外へ旅行に出かける傾向にある。高級住宅地のマンションや高級自動車、海外ブランド品など物質的なものに満足し、精神的には中産レベルにまで到達していないのが中間層の特徴でもある。さらに新世代は「お

金があれば生活をエンジョイする」という意識を持っており、物質的満足だけでなく、精神的満足も追求し、享楽主義で、洋風のライフスタイルに憧れをもっている社会集団であるとしている。

第3章 小売業における外資系企業の会社名

以上のように論じた上で、第3章～第5章で、左氏は個別の企業の会社名ならびに製品名につき、仮説の検証を行う。まず第3章では消費者に近い産業であり、中国の消費動向を知る上で最も相応しい小売業をとり上げている。具体的には、カルフル（仏）、ウォルマート（米）、テスコ（英）、メトロ（独）、ピーアンドキュー（英）、オーシャン（仏）、イオン（日）、イケア（スウェーデン）、イトーヨーカ堂（日）の9社について、中国における事業発展の概観、ならびにそれぞれの会社の中国語名のイメージ分析を行っている。

分析の結果は、小売業の会社名としては「発音兼意味型ネーミング」が最も多く採用されている。これは外資系企業が中国の消費者の交換を得るために命名していると考えられる。また「発音型ネーミング」をウォルマートが採用し、「解釈型ネーミング」をイオンが採用しているが、「意味型ネーミング」と「原語移行型ネーミング」を採用している企業は、小売業ではほとんど見られない。外資系企業は様々な側面で優位性をもっているが、この優位性を中国の消費者にどのように伝えるのかが問題になってくる。消費者に受け入れやすい会社名、製品名をつけることが一般的な方法であり、外資系小売業はそれを踏襲していると左氏は結論づけている。

第4章 化粧品・トイレタリーにおける外資系企業の会社名・製品名

第4章では人を美しく装い、彩るという点で、消費者が最も身近にその存在を感じる産業である化粧品・トイレタリーをとり上げている。具体的には、ロレアル（仏）、エスティローダー（米）、エイボン（米）、資生堂（日）、プロクター・アンド・ギャンブル（米）、ファンケル（日）、ユニリーバ（英・蘭）の7社について、中国における事業発展の概観、ならびにそれぞれの会社および傘下会社や製品名の中国語名のイメージ分析を行っている。

分析の結果は、化粧品・トイレタリーの会社名・製品名としては「発音兼意味型ネーミング」が最も多く採用されている。また「発音型ネーミング」や「解釈型ネーミング」を採用している会社も多数存在している。これに対して「原語移行型ネーミング」を採用している企業は、資生堂およびSK-IIのみである。これは外国風のブランド名から高級感を連想させ、ブランドの高付加価値を伝えようとしたものであるが、一般消費者をターゲットとした場合、消費者がわかりやすい漢字名が多く見られる。したがって前記の「発音兼意味型ネーミング」や「象牙」のような「意味型ネーミング」が使用される。すなわち消費者になじみのある漢字表記によって親近感をもたらし、

購買意欲を喚起するのがその目的である。また近年では、この業界は高級市場と大衆市場の二極化が進んでおり、外資系企業の細かいマーケティングはブランド名からも明らかであると左氏は結論づけている。

第5章 自動車における外資系企業の会社名・製品名

第5章では自動車産業をとり上げている。高度経済成長と所得の上昇に伴い、中国の自動車産業は急速に成長し、近代的なライフスタイルの象徴として、中国人の身近な存在になってきている。具体的には、ゼネラル・モーターズ（米）、フォルクスワーゲン（独）、トヨタ（日）、ホンダ（日）、日産（日）の5社について、中国における事業発展の概観、ならびにそれぞれの会社名や製品名の中国語名のイメージ分析を行っている。

分析の結果は、自動車業界の会社名・製品名としては「発音型ネーミング」および「発音兼意味型ネーミング」が非常に多く、「意味型ネーミング」、「解釈型ネーミング」、「原語移行型ネーミング」は比較的少ないと言える。とりわけ、欧米の自動車、また日系企業の高級自動車は「発音型ネーミング」が多いといえる。一方「発音兼意味型ネーミング」は、近年見られる現地生産ブランドに多く採用される傾向があるとしている。

結論

以上のように、小売業、化粧品・トイレタリー、自動車業について、企業名、製品名についての膨大な事例を検証してきた上で、左氏は自らの仮説の正当性が証明されたことを結論づけている。すなわち、中国に進出している外資系企業の企業名、製品名の漢字表記は5つのネーミング法に分類することができ、そして外資系企業は中国国民の消費行動を分析した上で、その業種や企業の特徴を浸透させるために、様々な工夫をしているのである。

審査結果の要旨

本論文で評価すべき点は次の3点である。

第1に左氏は自らの仮説を証明するために、多大な事例を検証したことである。左氏は小売業、化粧品・トイレタリー、自動車業について、企業名、製品名についての事例研究をしてきたのであるが、もともとの種の研究は多くの事例を要求する。すなわち多くの事例を集め、比較研究することが必要になるのである。左氏は小売業9社、化粧品・トイレタリー業7社、自動車産業5社、合計21社について事例研究しているが、その参加のグループ企業の名称やそれぞれの商品名・ブランド名をあわせると、採り上げた事例は膨大な数に及ぶ。またこれらの産業を採り上げた理由は、消

費者に近い産業であるからである。

小売業については多くの消費者の行動がわかりやすく、消費者の好みが如実に表れる産業である。かつては国有企業としての百貨店が小売業としての代表と認識されていたが、本格的なサービスを提供する小売業の台頭は外資系の小売業が中国に進出してきてからのことである。そのため、中国の消費者に訴えるための会社名は受け入れやすい名称を使用することであった。カルフルを家楽福などと表記する事例は、中国人の好む会社名称になっており、同社は中国において順調に発展を続けている。

化粧品・トイレタリー業界は消費者でも日常的に使われ、消費者の選考が良く現れる業界である。中国社会が豊かになり、化粧品に心をひかれる社会となってきたことも1つのメルクマールとなっている。しかしながら化粧品などの製品名は、日本においても、それ自体フランス語で表記することも多く、これをまた中国語で表記することになるのである。

自動車業界は中国政府が最も関心を持つ産業であり、政府も強力に力を入れてきた産業である。しかしながらこの業界はまだ中国独自の会社が自動車のすべてを製造する段階には入っておらず、先進諸国の企業と合併するか、海外の自動車会社を買収する段階にとどまっている。そしてこの業界の会社名、製品名も先進諸国の名称を中国語で表記する場合が多く、それぞれの名称の意味を解釈しての表記、あるいは世界的なブランドの漢字が多いと左氏は結論づけており、これほどの多大な事例を検証した点は、本研究の評価される点と言えよう。

第2に事例研究にあたって左氏は言語学的な先行研究および自身の研究を積極的に取り入れ、会社名、製品名の中国語表記を、①発音型ネーミング、②意味型ネーミング、③発音兼意味型ネーミング、④解釈型ネーミング、⑤原語移行型ネーミングの5つの類型に分類して研究を行っている点である。この5つの分類類型は、それぞれの類型が事例研究をするにあたってどのような意味を持っているのかについても十分に考察した上で、左氏が呈示した仮説に繋がっている。これらの分類は、それぞれの産業において、会社名、製品名に対する外資系企業の戦略や、中国人の見方を表しており、研究手法として高く評価することができると言えよう。

第3に本論文で左氏は従来までの言語学的分析に加えて、マーケティングや経営史など経営学的考察を積極的に導入している点である。すなわちそれぞれの企業に対する研究の冒頭で、企業自身や傘下のグループ企業、ブランドについて、沿革や中国進出の過程についての考察を加え、また企業名や傘下グループ企業名、製品名やブランド名などの中国語表記を選択する際に、その企業の中国における販売戦略、広告戦略、マーケティング戦略、イメージ戦略などをも考察している。これは左氏が杏林大学大学院で学んだ言語学の知識と経営学の知識を融合させた研究を行っているものであり、この点も高く評価できると考えられる。

残された課題は次の2点である。

第1に、中国のそれぞれの地域の問題を考察の対象とすることである。広大な国土から形成される中国では、地域間格差の問題、および地域特有の文化の問題が存在する。そしてこの問題には、言語としての地域の格差を考える必要もあるであろう。また地域の特性を明らかにする場合には、それぞれの産業のロケーションの問題も重要である。たとえば小売業をとっても、都市の中心部に立地するのか、反対に郊外型の店舗を展開するのかは、インフラの問題や物流の問題も関係してくることになるであろう。

第2に中国人の識字率の問題を検討する必要もあるであろう。この問題は教育の義務化によって将来は変わってくるであろうが、今のところ世代的な違いも勘案する必要もあるであろう。これらの2つの問題を考察することで、本来的な意味で、中国社会への提言が可能になるという側面も否定できない事実であろう。

しかしながら、これらの指摘は、左氏が今後の研究で考察を深めることで十分に解決できるものであって、本論文の持つ学術的価値、すなわち中国における外資系企業の会社名・製品名を単に言語学的な観点から分析するのみではなく、経営学的観点から分析したという研究の独創性と先駆性、また自らの仮説を検証するために膨大な事例を採り上げて考察したという研究手法への評価を損なうものではない。したがって審査委員一同は、本論文が博士の学位授与要件を十分に満たしていると判断する

氏名	高 立偉		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博甲国第 28 号		
学位授与の日付	平成 25 年 3 月 31 日		
学位授与の要件	学位規程第 5 条		
学位論文の題目	中国語形容詞の動態性と時間表現に関する考察 —日本語との対照研究から—		
審査委員 主査	杏林大学外国語学部教授	文学修士	金田一 秀 穂
副査	杏林大学外国語学部教授	学術博士	今 泉 喜 一
副査	麗澤大学外国語学部教授	文学修士	井 上 優

要 旨

[概要]

中国語のテンス・アスペクトに関する先行研究を参考にしつつも、日本語研究で開発された「日本語構造伝達文法」理論の中のテンス・アスペクト理論を適用して、中国語の、特に形容詞の時相関係を体系的に解明しようとする論文である。

[構成]

[各章の内容]

序論

0 問題提起

中国語形容詞のテンス・アスペクトは先行研究では必ずしも正面からは扱われていなかった。本研究では、日本語と対照しつつ中国語形容詞を動態表現，時間構造，時間表現という複数の視点から捉え，研究を体系的なものにする。また研究の成果は言語教育にも貢献しようとする。

1 研究の出発点

中国語形容詞の先行研究では，形容詞を語義用法から考察するのが一般的であり，形容詞を時間上において研究することはあまりなかった。本論文では「日本語構造伝達文法」のテンス・アスペクト理論を中国語に適用し，中国語形容詞研究をより体系

的なものとするために、理論的にありうるすべての表現を網羅した上で、現実の自然な形容詞表現のあり方について分析する。

2 中国語形容詞の動態性と時間表現に関する先行研究

まず、形容詞の歴史的発展を扱う研究者1名の先行研究を示し、次に現代語（日中対照研究を含む）の研究者7名の先行研究を示している。特に今泉（2003）による日本語テンス・アスペクト構造の図示化とデジタル化によるモデルが研究の前提となるとしている。

3 研究方法と課題

研究方法としては、今泉（2003）により日本語において開発されたテンス・アスペクト構造モデル、その図示法及び2桁数字表示法を中国語に適用する方法を採ることが述べられている。

課題としては以下の6点を挙げている。（各課題は当該章節において解決される。）

- (1) 時間表現からみて、形容詞三種類にはどのような使い分けがあるか
- (2) 中国語形容詞にも絶対テンスと相対テンスがあるか
- (3) 程度因子で形容詞の内的・外的変化を表せるか
- (4) 形容詞が副詞と共起したとき、程度因子で表せるか
- (5) 形容詞は動態助詞・方向補語（方向動詞）を用いてどのような時間表現が可能か
- (6) 否定の場合、形容詞にはどのような時間表現があるか

第一章 中国語形容詞のテンス・アスペクト表現と三分類

1 中国語形容詞の文法的・語義的特徴と使用状況

形容詞の文法的特徴として現在捉えられている4つの特徴について触れ、語義用法については5つを示している。形容詞は本来の特徴のままに述語になることができ、また、時間名詞、動態助詞、方向補語と共に用いられてアスペクトを表現することができるようになる。

2 中国語形容詞のテンス表現

中国語形容詞は日本語形容詞と同様に、出来事としても質としても、絶対テンスで捉えられることを述べたのち、相対テンスでも捉えられることを論じている。ただし、中国語は日本語と異なり、形容詞が語形変化をせず、日本語のタ形に当たるものを取らないので、形式の上で明確に相対テンスを絶対テンスから区別することはできない。したがって、中国語の場合の相対テンスは理論上のものとなることから、日本語で相対テンスが優先されるのに対して、中国語では絶対テンスが優先されると考えることになる。

3 中国語形容詞のアスペクト表現

中国語形容詞をテンス・アスペクトで捉えて考察する。日本語ではテンスとアスペ

クトを切り離して捉えることは形態的に難しいが、中国語ではそれが可能である。そのため形容詞は同一形態のままで多様な時間的側面を持つことになる。

分析に際し、先行研究を参考にして中国語形容詞を3種類に分類し、それぞれのアスペクト的特徴を次のように捉えた。「性質形容詞」は開始点と完了点が存在しない。「状態形容詞」は開始点と完了点を意識しない。「変化形容詞」は全アスペクト局面が完備している。

次に各形容詞の表現しうる現実の事態との対応を、「日本語構造伝達文法」のテンス・アスペクト2桁表示法を用いて、理論的にありうるすべての局面において捉え、詳細に分析し、その結果を表の形にして示している。これにより、各形容詞のより自然に使用される局面とそうでない局面の分布が一目瞭然に捉えられるようになり、体系において形容詞を捉えられるようになった。なお、「変化形容詞」はさらに「瞬間形容詞」と「延続形容詞」に分類されている。

第二章 程度因子で形容詞の内的特性を表す

1 形容詞の内的特性と程度因子

動態助詞や方向補語を用いる形容詞の時間表現をより体系化して捉えるために、「程度因子」という概念を導入する。「程度因子」を「形容詞の程度性を表す因子」と定義し、0から100までの段階があるものとしてモデル図化した。モデル図化により、先行研究に比べて、形容詞の程度性がより分析しやすくしなり、形容詞の内的特性をより明白に示すことができるようになった。

2 程度因子で形容詞の内的特性を表す：程度因子をアスペクト局面に入れて考える

程度因子をアスペクト局面に入れつつ、3種類の形容詞の時間的特性を考察した。性質形容詞・状態形容詞の程度性を表す程度因子は一定の段階に固定されて変化がないのに対して、変化形容詞の程度性を表す程度因子は時間とともに変化があり、程度因子の増加という特性のあることが確認できた。先行研究で直観的には分かっていたことではあるが、程度因子の導入によりその相違がモデルで可視的に明示できるようになった。

3 程度因子で状態のあり方を表す：副詞が左右する場合

程度副詞が共起するときの形容詞の内的特性を程度因子で示している。形容詞の程度性・量性と副詞の量性との対応関係を、程度副詞の程度を微量・中量・高量・極量のように分けて、程度因子とともに図で示した。

第三章 動態助詞・方向動詞と共起するときの形容詞のアスペクト表現

1 日本語と中国語のアスペクト表現について

日本語では、テンス形式とアスペクト形式が融合しており、純粋にテンスあるいはアスペクトだけを表示する形式というものは存在しない。これに対して、中国語では、

テンスとアスペクトは互いに緊密な関連性を持ってはいるが、切り離して考えることが可能である。アスペクトは動態助詞等によって表現される。これについて先行研究に触れつつ論じている。

2 後ろに動態助詞が付くときの形容詞のアスペクト表現

形容詞に付く動態助詞として「了, 着, 過」をとりあげ、2桁表示法と程度因子モデルにより分析を行っている。体系性を目指しているために、テンス・アスペクトの理論的にありうるすべての場合において網羅的に考察している。そのため、表現としては自然なものも、不自然なものもある。分析が理論的で明晰なものとなっているところに特徴がある。結果として以下のような結論を得ている。

- i 一つの時間表現において、中国語は日本語と対応する場合と対応しない場合がある。それがどのような場合であるかを明らかにした。
- ii 中国語では、基本的には、一つの助詞で一つの局面を表すが、二つの助詞の選択が可能となる場合もある。それがどのような場合であるかを明らかにした。
- iii 日本語では、補助的な動詞を使わなければ、未来の完了が表現できない。中国語形容詞では、それが可能であるが、未来の進行中が表現できない。

また、「了, 着, 過」については次のことが判明した。

「了」: 程度因子の一定程度への到達完了を表す。

その結果状態の保持を表すこともある。

「着」: 程度因子の固定後の程度保持を表す。

「過」: 「過1」: 程度因子の結果状態の保持を表す。

一定程度への到達の完了を表すこともある。

「過2」: 程度因子固定後の程度保持の状態を表す。

(両者ともテンスに関わり、「程度因子固定後の程度保持状態が過去にあったことを表す。)

3 後ろに方向動詞が付くときの形容詞のアスペクト表現

形容詞に付く方向動詞として「起来, 下去」をとりあげ、形容詞の時間表現を程度因子で考察している。その結果以下のことが判明した。

「起来 (来)」: 程度因子が0から100まで増加する全過程の中の一部として捉え、さらにその結果状態の保持を表す。

「下去」: その形容詞の反対語のもつ程度因子が100から0へ変化する過程の一部として捉え、さらにその結果状態の保持を表す。

第四章 形容詞の否定形式におけるアスペクト表現

第四章では否定形式の側面から形容詞の時間表現を考察している。

1 中国語否定詞の定義とその使い分け

中国語否定詞の「不」と「没」は、動詞や動詞連語に関わる場合の語義用法として

は明確に定義され、使い分けがなされている。このことを先行研究で確認している。しかし、形容詞に関わる場合の両者の区別はいまだに不十分であり、検討を要する現状であることを述べ、また、形容詞の否定形式は時間的側面からはあまり触れられていないことを述べている。その状況が、この研究を要求しているとしている。

2 否定形式の図示法：概念によって設定された時間／空間が空になる

今泉（2005）は（日本語の）否定を、概念によって設定される空間／時間が空になることと定義し、否定のテンス・アスペクトをモデル化している。ここではこの理論を中国語に適用して、形容詞の否定を分析している。

3 中国語形容詞の否定形式におけるアスペクト表現

中国語動詞の否定形式と対照しつつ、3種類の形容詞の否定形式をアスペクト各局面において分析している。性質形容詞の否定形式は開始点と終結点の両端が認識されず、アスペクト局面の2と◎（出来事としての扱い）しか表せない。状態形容詞は開始点と終結点があるが、その両端が問われず、アスペクト局面2と◎しか表せない。これに対して、変化形容詞はアスペクト各局面が認識され、動詞の否定形式と似たようなものとなる。この3種類の形容詞における「不」と「没」の使用状況を検討し、表としてまとめた。ここから確認されたことは、性質形容詞と状態形容詞では「不」を用いて否定を表すのに対して、変化形容詞では「不」と「没」のどちらを用いても否定を表せるということである。

さらに、程度因子の観点から、改めて「不」を「程度因子が固定された状態の否定」、「没」を「程度因子の増減変化の否定」という定義の形で述べた。文法上では、変化形容詞の否定形式は動詞と似たようなものと見なされがちだが、やはり程度因子の増減による内的変化と時間表現から考えて、動詞とは異なるという結論に至った。

第五章 結論

各章での結論を改めてここでまとめている。また、今後に残る課題を3項目挙げている。

審査結果の要旨

[論文の特徴]

この論文の研究が理論的に依拠している「日本語構造伝達文法」は、テンス・アスペクトの扱いにおいて先行研究とは異なる特徴を持つ。先行研究では、日本語の表現形式の異なりとして表れる表現そのものに基づいて考察するが、日本語構造伝達文法では、現実世界に生起する事態そのものを、時間の流れにおいて変化として捉え、その経過におけるそれぞれの過程が基準時点との関係でどのように言語表現されるものであるかを明らかにしている。この理論は、テンス・アスペクトの関係を時間モデル

で可視化して表現し、かつ両者のありうる関係を2桁の数字で簡潔に表現できる利点を持つ。テンス・アスペクトの関係を原理的に捉えるために、表現のされやすさ、認識のしにくさに関わらず、すべてのあり得る局面を扱うことができ、全体を体系的に把握できる。

この論文は、この理論を中国語の形容詞に適用して考察しており、この理論の利点を最大限に生かしているところに特徴がある。

また、この論文は形容詞の程度性を可視化して分析しやすくするために「程度因子」を設定して考察していることにも特徴がある。

この2つの特徴を持つ本論文は研究の結果として、第三章、第四章に述べられている成果を得た。

[研究史における意義]

中国語の研究史において、必ずしも関心をもたれることのなかった形容詞のテンス・アスペクトを研究の対象としたことに意義があり、かつ、「日本語構造伝達文法」の理論を適用して、中国語の形容詞のテンス・アスペクト研究を体系的なものとしたことに意義が認められる。

[言語教育上の意義]

本論文は、現実世界に生起する事態そのものを、時間の流れにおいて変化として捉え、その経過におけるそれぞれの過程が基準時点との関係でどのように言語表現されるものであるかを明らかにしようという目的があり、日本語・中国語での表現を、事態の各局面において示すことができている。このため、言語教育においては、従来のような両言語の直接的な対照研究的教育ではなく、事態そのものに即した言語教育を可能とする。強いて言えば、前者が知識暗記型の学習になるのに対して、後者は理解応用型の学習となる。本論文は、日本語母語話者の中国語学習に貢献するところも大であるとの評価も受けた。

[評価]

以上から、日本語との対照研究により、中国語形容詞のテンス・アスペクトを新しい視点から、新しい方法で考察し、体系的に捉えることを実現した本論文は、内容的にも、研究史的にも、言語教育的にも大きな意義の認められる論文であると評価できる。

審査者一同は、論者である高立偉氏に博士号授与がふさわしいとの判断に至った。

氏名	高橋 豊		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博乙国第8号		
学位授与の日付	平成25年3月6日		
学位授与の要件	学位規程第6条		
学位論文の題目	「日本の文化外交の将来戦略」		
審査委員 主査	杏林大学総合政策学部教授	法学修士	阿久澤 利 明
副査	杏林大学総合政策学部教授	法学博士	松 田 和 晃
副査	宇都宮大学国際学部教授	農学博士	友 松 篤 信

要 旨

高橋豊氏より提出された博士学位請求論文「日本の文化外交の将来戦略」は、次の各章により構成されている。

第1章 近代日本における文化外交の黎明

明治政府の要人や日本の知識人は、西欧列強の衝撃的な「ソフトパワー」を受け、その根幹をなすキリスト教文化の理解とキリスト教への態度決定を迫られた。森有礼はキリスト教に傾斜するが、臣民養成のための教育制度の創設者となる。福沢諭吉は教育近代化のために、反発から転じてキリスト教容認に至る。洋行してキリスト教に改宗した新島襄らは、キリスト教を基盤とする教育機関を設立する。洋行組の一人でキリスト者の新渡戸稲造は、「和魂」を説明するために『武士道』を著した。

第2章 多国間文化外交による国際社会への復帰

新渡戸門下のキリスト者、前田多門は、日本文化会館館長として戦前にニューヨークで活躍し、戦後は初代文部大臣としてアメリカ時代の人脈を生かしてGHQとの交渉にあたった。この時期の新渡戸門下のキリスト者には、GHQの信任が厚い、教育基本法制定にかかわった東京大学総長南原繁がいる。

元外交官・上田康一はユネスコ民間運動の父と呼ばれ、世界初の民間団体、仙台ユネスコ協力会を設立した。日本政府は、国際社会への復帰を目標にユネスコ加盟運動

を行い、「平和で文化的な生活」を実現する一種の平和運動として、民間ではユネスコ運動が拡大した。

ユネスコの設立理念には、世界平和のための諸国民の義務としての文化協力と各々の文化的特質の尊重が唱われている。ユネスコの目的はわが国の文化のあり方に合致し、ユネスコ運動への支持と理解は国民的なものとなった。国際文化協力とは、諸国民の文化権を認めて文化の保全や振興を行うための国際協力のことである。

1993年日本はフランスの協力を得て、アンコールワット遺跡の保存修復のための国際委員会を設立した。ユネスコ事務局長松浦晃一郎は、ユネスコの行政改革と、伝統的な舞踊、音楽、儀式などを保護する無形文化遺産保護条約をユネスコ総会で2003年に採択し、指導力を発揮した。

第3章 2 国間文化外交による外交の新展開

平和構築は文化外交の目標であり、平和構築の理念は「人間の安全保障」である。「人間の安全保障」とは、国家を外的侵略から守る従来の安全保障ではなく、国や地域に捉われない、従来、脅威と見なされなかった「欠乏からの自由」と「恐怖からの自由」に対応する、人間を主体とする安全保障である。

小渕首相は国連に「人間の安全保障基金」を設立し、2000年の国連のミレニアム・サミットで「人間の安全保障」を提言した。森首相は、アナン国連事務総長に「人間の安全保障委員会」設立を提案し、委員会の共同議長となった緒方貞子とアマルティア・センは、2003年に最終報告書を提出した。「人間の安全保障」は、ここで唱われた提言を日本政府が肉付けして2000年国連ミレニアム・サミットに提案したもので、多国間および二国間の外交理念として国際社会で広く認知されている。

緒方は2003年に国際協力機構（JICA）理事長になり、「人間の安全保障」は日本の国際援助政策とされた。日本の援助は、貧困や社会的弱者に配慮した「欠乏からの自由」を軸とする開発援助である。日本政府はグローバル覇権の弊害を牽制すべく、大国とは一線を画した中間領域に注目する「ミドルパワー外交」の一環として「人間の安全保障」を活用すべきである。日本は2006年に「文化協力」を国の責務として明記する画期的な法律を施行し、国際文化協力を加速させた。

1992年国連は、明石康を国連事務総長特別代表として、国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）による平和維持活動を開始した。日本政府は自衛隊や文民警察官を派遣し、一般市民は国連ボランティアとして選挙監視団に加わった。国連平和維持活動と並行して、日本はフランスと協力して、アンコール遺跡保存修復のための国際委員会を設立した。この背景には、上智大学の地道な調査と、文化遺産修復を地域発展に結びつけた創意があった。日本の寄付は政府、民間とも各国で最高であり、日本は官民による文化協力で大きな足跡を残した。

日本は、中国に対する経済外交を展開し、国交に結びつけた。しかし、日本が政経

分離の原則でODA 供与を続けた結果、皮肉にも、中国は、飛躍的な経済発展に支えられて軍事大国となった。仮に現在、双方の国民感情が悪化すれば、紛争に発展する可能性があり、予防外交の観点からの日中文化協力が求められる。「日中交流史博物館」を建設して、アニメ版日中交流史を用いる知日派中国人による教育普及活動、青年海外協力隊による日本文化紹介を行えば、中国政府の中華思想に基づく「暴走」への歯止めとなる。

第4章 文化外交の現状分析と課題

ゲーテ・インスティトゥート、アリアン・フランセーズ、ブリティッシュ・カウンシル、孔子学院は、いずれも母国語教育を中心とした自国文化の広報を任務としており、そこには他文化との違いを強調するアイデンティティ確保の狙いがある。

国際交流基金は1972年に設立され、事業は文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流の3本柱であり、日本語教育中心ではない。予算規模はドイツ、フランス、イギリスよりも人口比で小さい。

海外の126カ国と7地域で日本語教育が行われており、298万人が学ぶ(2006年度)。海外の日本語教師の7割は、日本語を母語としない現地の教師である。海外の日本語教育では、自国での日本語教師養成、教材、施設・設備、教授法や日本文化に関する情報などの不足が課題である。

日本では、国際交流基金と文化庁による類似分野への芸術家・文化人の派遣、国際交流基金の短期の派遣・招請および資金不足が課題である。

日本は、イギリス、フランス、ドイツ、中国のように語学教育に注力することが重要である。2010年に国際交流基金の「日本語教育スタンダード」が完成し、日本語能力試験が改定された。国際交流基金が海外で日本語学校を開設すれば、過度な英語至上主義に歯止めがかかる。

日本が文化外交を積極的に展開し、相手国から理解を得るためには、他国とは異なる日本のソフト・パワーを発揮しなければならない。明治維新以降、日本文化の国際理解に貢献したのは、お雇い外国人による紹介や万国博覧会への出品であった。こうした活動の結果、フランスを中心としてヨーロッパにジャポニズムと呼ばれる日本文化愛好が生まれた。

現在、日本の生活文化や大衆文化が世界で流通している。第二次ジャポニズムはインターネット上で展開されており、アニメのコンテンツやキャラクターは、国際交流基金の日本語学習サイトやユネスコ・アジア文化センターの識字教育アニメシリーズでも使われている。クールジャパン現象は、異文化理解を促進し、日本のブランド力の向上に役立っている。

第5章 文化外交の将来戦略

日本は、ハード・パワーの裏づけとなる高度の防衛力と経済力をそなえているが、ハード・パワーには威圧があり、必ずしも相手国の信頼は得られない。ソフト・パワーの担い手を育てるためには、幼少期からミュージアムと図書館に親しむ環境をつくるべきであり、文化外交をささえる教育政策とその実施機関の充実が望まれる。

文化庁は、2007年に、地方公共団体が文化財をその周辺を含めて総合的に保存・活用するよう提案した。日本文化は地域文化の集積の上に形成されたものであり、地域社会が地域文化に向き合うことで、国と地域の双方に刺激を与え、その相乗効果で文化外交を推進する条件を整えることが望ましい。

政策研究大学院大学では、行政官や研究者が文化政策立案に不可欠な文化資源論、比較文化、文化政策評価などを学んでいる。国際交流基金の協力で設立された青山学院大学国際交流共同研究センターでは、文化と平和構築の関わりが研究されている。今後、日本が文化外交を展開するために、比較文化政策、文化支援のパトロネージ、文化をめぐる寄付税制などの研究が求められる。

日本政府と民間の協力によって設立されたユネスコ・アジア文化センターは、無形文化遺産の保護のための各国版コンテンツを制作して普及しているが、アフリカ諸国と協力して、アフリカに関わる展示を世界各地で行えば、アフリカの貧困撲滅や感染症対策に国際社会の関心が深まる。

近年、日本政府の文化外交の取り組みが定着し、文化外交を経済外交に代わる外交方針と位置づけ、文化交流から文化協力への流れを強める時期に来た。そのためには、外務省と文化庁を母体にした、情報収集と情報発信ができる文化省の早期実現が望まれる。日本は、同盟関係のあるアメリカとのネットワークで満足するのではなく、日本のソフト・パワーを発揮する情報発信型ネットワークの形成を戦略とすべきである。アジアや日本の環境・文化・歴史コンテンツの制作やNHKでの放送も呼び水になる。また、日本語文献を英語・中国語・スペイン語に翻訳する助成事業を国家として推進し、日本の学術成果を国際的に広める機会を増やし、二国間語学協力事業にも力を尽くすべきである。

今後、日本の予算規模が縮小すれば、予算は防衛と外交に重点配分し、文化事業の大部分を民間委託することも考えられる。そこでは、地域に縁の深い高齢者やNPOの参加に加え、住民参加の文化財保存修復などの知恵が求められる。

人口減少のもとで文化レベルを維持するためには、大規模再開発ではなく、個々の建築物を丹念に修復・再生する、イタリア型の保存修復型街づくりが参考になる。人口が集積されている東京、横浜、大阪などの八大都市は、民間による大規模開発を転換する時期にきている。すなわち、人口減少社会にみあった、日本を過疎と過密に両極化させない都市計画を国土交通省が提示して、地方公共団体が歴史文化基本構想に沿った街づくりを実行する。地域住民が地域の文化的魅力を知り、地域文化を守り、地域同士の切磋琢磨で、日本の地域文化の水準はむしろ高まる。

日本は、自国の歴史と文化を十分に認識した上で、無定見な欧米化ではない近代化を達成した。日本文化は、地域社会の文化の集積の上に形成されたものであり、歴史と文化の基本構想を軸に、民間主導の国民参加で行えば、日本文化は継承されるに違いない。日本は、それによって文化外交に推進力を付与し、文化大国への道を歩むことができる。

審査結果の要旨

本論文で評価すべきは、次の三点である。

第一に、本論文は、キリスト教文化への親和、妥協、あるいは反発を示した日本の知識人を軸に、欧化主義とアジア主義を内包した日本文化外交の黎明期を摘出したことである。また、敗戦から現在に至る日本の文化外交史をユネスコ中心の多国間協力の時代と、ユネスコを基軸として日本が独自に文化外交を展開した二国間協力の時代に区分してその意義を論じたことである。さらには、ユネスコを中心とする日本の多国間協力は、日本の国際復帰と官民協力によるユネスコ運動として結実し、その市民的基盤が、カンボジアでの文化財保護活動への二国間協力の道を拓き、日本発祥の無形文化財の概念を国際社会に付与するまでの文化外交史の流れを、入念かつ詳細に明らかにしたことである。

第二に、日本は、文化外交を経済外交に代わる外交方針と位置づけ、文化交流から文化協力への流れを強める時期に来たとの大胆な主張である。そのためには、外務省と文化庁を母体にした、情報収集と情報発信ができる文化省の早期実現が望まれるとしている。また、大国とは一線を画した中間領域に着目する「ミドルパワー外交」の枠組みの中で、貧困や社会的弱者に配慮した「欠乏からの自由」を軸とする開発援助として「人間の安全保障」を活用すべきとの主張も注目される。日本文化は、地域社会の文化の集積の上に形成されたものである。歴史と文化の基本構想を軸に、保存修復型街づくりを国民参加で行う。その一方で、国内外での日本語教育を充実させるとともに、文化省の実現によって日本のソフトパワーを発揮する情報発信型ネットワークの構築を行えば、文化外交に推進力を付与し、文化大国への道を歩むことができるとの主張も傾聴に値する。

第三に、指導的人材の存在を国際文化協力に内在する本質と指摘したことである。満州事件による国際的孤立から第二次世界大戦後のGHQとの折衝過程で日本の国際文化交流の基礎を支えたのは、新渡戸稲造門下の人脈であるとの指摘は斬新である。日本が積極的にアジアで文化協力を展開した歴史的背景には、明治以来のアジア主義の伝統があるとの指摘も注目される。日本のアジア理解は美術を通じて深められた。岡倉天心は、西欧による美の独占と、西欧の光栄がアジアの屈辱である状況に反対し、柳宗悦は、民芸運動を通じてアジア理解を深めた。自国の美術品流失と、アジアの美

術品の保護と収奪の両方を経験した日本は、アジア諸国の美術品・文化財の散逸や毀損を防ぐ文化協力に道を求めた。この点に、岡倉や柳らのエトスの連綿が感じられる。本論文が、先人の顕彰拠点としてのミュージアムを強調するのは、当然の帰結と理解される。

残された課題は、次の二点である。

第一に、ソフト・パワーとは、それが本源的に内包する魅力により、強制や報酬ではなく、相手国を納得させ、従わせることであり、その源泉は「文化」「政治的な価値観」「外交政策」とされる。政治学者ジョセフ・ナイによるこの定義を検証しつつ、「文化」「政治的な価値観」「外交政策」の観点から日本のソフト・パワーの実効性を、外交史の中でより実証的かつ論理的に検討することが、研究上の困難は予想されるが、今後の課題として残されている。

第二に、第4章が現状報告に傾き、各国の公的国際交流機関の比較分析が不十分になっている点である。また、そうした影響もあり、随所に首肯し傾聴すべき点も多いが、提言が全体としてやや散漫になっている点である。

しかし、これらの指摘は、今後の研究で考察を深めることにより十分に解決できるものであって、本論文のもつ学術的価値、すなわち国際文化協力を国際関係論の観点ではなく外交史の観点から研究した先駆性と、随所に認められる見解の独創性についての評価を損なうものではない。したがって審査委員一同は、本論文が博士（学術）の学位授与要件を十分に満たしていると判断する。

RONBUN SHU (XI)

CONTENTS

Articles

- The Characteristics of Japanese Onomatopoeia – Verbs in Sensation
.....Mio Sekiguchi
- Expression of Interrogative adverbs in Japanese novels
.....Yusuke SHIMAZAKI
- A Study on [kono/sono/ano] Used for Indicating Tense
.....Dong Zhaojun
- A Restriction on an Usage of “TE-form + KURU” in Conversation
.....Kimiko Maeda
- Characteristics of SL text and interpreter’s performance at the simultaneous interpretation
— Interpretation from Chinese to Japanese —
.....Kawabata Yatsuko

杏林大学大学院国際協力研究科論文集 第11号

発行年月日 2014年3月31日

編集発行者 杏林大学大学院国際協力研究科長 松田 和晃

東京都八王子市宮下町476

電話 042(691)0011

印刷 株式会社 コームラ

〒501-2517 岐阜市三輪ぷりんとぴあ3

Tel 058-229-5858

Fax 058-229-6001